至上最強迷子

月下部　桜馬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
至上最強迷子

【Ｎコード】
Ｎ４１２０Ｗ

【作者名】
月下部　桜馬

【あらすじ】
『願う事は平和な日々と家に帰る』異世界トリップで最強魔力を手にした安佐水（あさみず）　日和（ひより）が望み通りの日々を送っていたのに一枚の手配書によってその世界は激変。魔力なんていらねぇ！なんてそれでご飯食べてるので言えないですが、最強はいりません！その一言を貫く為に最強故の苦労を全部背負い込んでしまうけど、日々努力で乗り越えてみせます

1話　私、迷子になりました

お父さん、お母さん。
恥ずかしながら貴方達の娘、日和（ひより）は２２歳にしてどうやら…

『迷子』になったようです

＊＊＊

今日も今日とて日は昇る。
目が覚めて見慣れた天井は今ではシミの数もわかる。前は起きてから一つずつ数えて変化がないか凝視したりしてた。

だって、ほんとはこの天井は私の部屋じゃない。

目が覚めても自分のベッドだといいなぁって思わなくなったのはいつ頃からだっけ？

まさか自分が異世界トリップなどという『物語の世界』を体験するなんて考えもせず、しかもどうしてこの世界に来てしまったのかという疑問は３年経っても未だにわからない
普通は「勇者様！どうか魔王を倒してください！」などというイベントフラグが立つものじゃないんでしょうか？まぁ…それはそれ

で迷惑な話だけど。イベントが無かったら無いで帰り方もわからなければどうしていいのかもわからず、あたしはこの世界で単なる迷子扱いだったりする。

「ひよ！朝！」

扉の向こうから聞こえる声にいつも安心感を与えてもらいながら、私はいつもの身支度を始めた。白シャツと黒ズボンの動きやすい服装に白の前掛けを腰に巻いて、肩より少し長めの茶色い髪をくるくるっと巻き上げてアップにする。

「よしっ！」

と腰を叩けばどこから見てもあたしは職人。

「あ～もぅこの世界に来て3年経ったんだっけ？皆元気かなぁ？」

洋服を着替えながら、郷愁を感じたのは昨夜、久しぶりに家族の夢をみたからかもしれない。

3年前と全く変わらない両親。

そりゃ3年前から一度も会ってないから変わってなくて当然なんだけど、せめて皺を増やすとか、白髪にしてみるとか、あたしを心配した陰を少しぐらい出そうよ…。

いつものように能天気にニコニコ笑う両親にこっちの方が心配に

なったわっ！

「夢だけどねぇ…」

まぁ…迷子の報告なんていう全くもって恥ずかしい限りな再会だったけど…

「ひよっ！！！朝っ！！！」

あたしの一人妄想に痺れを切らしたのか、扉の外の人間は思いっきり玄関を蹴っ飛ばして開けてきた。そこに立ってたのは超絶綺麗な美少女で、どう見ても扉を蹴破るなんて芸当をしそうにない。

「ミレーヌ…今月玄関壊したの何度目？」

「…2、3回？」

「15回。半月毎日玄関壊されて直してる身になって下さい」

うるうる瞳であたしを懐柔しにかかっているようだけど、まだまだお子ちゃま。

悪い事をしたら、ちゃんとしなくちゃいけない事があるでしょう？

あたしが流すつもりがない事を悟ったのか、ミレーヌはかろうじて聞き取れる大きさで「…ごめんなさい」と口にした

「はい。謝罪受け入れました。で？こんな朝早くにどうしたの？」

時計を見ればまだ朝の7時。いつもミレーヌが店にやってくるのは10時近くになってからで何かがあった事は一目瞭然。するとミレーヌがフリルのついた前掛けのポケットから4つに折られた紙を取り出して差し出してきた

「？」

「これ！昨日宿に泊まった人が持ってたの！！」

ここテリサン村は小さな村だけど隣国への旅行者がよく立ち寄って宿泊していく、中継地点のような村だった。なので宿を経営するミレーヌの家には旅行者の出入りがよくあった。

そんな彼女から受け取った紙は乱雑に折りたたまれていて、その状態から見えた内容は手配書のようだった。

「この付近に強盗団でも逃げてきたの？」

とミレーヌをからかいながらその紙を開け、あたしは目を見開いた。言葉を無くした自分にミレーヌが甲高い声で話しかけてくるが一向に耳に入ってこず、ただただその手配書を呆然と見つめていた

「な…なんで？」

「この絵の人！ひよだよね！？ひよってば王族の人だったの！？」

そう。ミレーヌから渡された手配書にはでかでかとあたしそっくりの似顔絵が描かれていて、懸賞金の金額もとんでもない数字だったけど、その手配書を発行した相手を見て、あたしは更に衝撃を受けてしまった。

そこにはこの世界で一番の大国ガルフェルド帝国皇帝直々の印が押されていた

1話　私、迷子になりました（後書き）

初投稿です。
まだまだ序盤ですが、感想など頂けると嬉しいです

2話　トリップは刺激的！？

手配書に心当たりがあるかと聞かれれば…無いと言いたいけどありますと答えるしかなく、でも私にとって出来れば抹消したい過去なんです。

手配書を見ながらあたしの記憶は嫌でも無理にこの世界に飛ばされた日に遡る。

「刺激のある生活してみたいよ？」

通勤途中で一緒になった同僚にそんな事を軽く言ったかもしれない…でも、断じてあたしは異世界トリップなどを望んでいたわけではなく…ってトリップした先でも刺激的な生活どころか全然モブ的な日常生活ってどういう事！？まぁ…その件は置いといて…

でもトリップした場所が場所なだけに、初っ端は実は刺激的な事があったんだけど。

いや…でもマジであんな刺激望んでませんでしたからっっ！！

そう、あれは3年と少し前の話。

それは極々、普通の日だった。
しいて言えば、通勤ラッシュの電車で入口付近を取れてラッキー！ぐらいな日だった

ＭＰプレーヤーで好きなアーティストの曲を聴きながら、いつもと同じ時間に地下鉄に乗って、会社の最寄の駅で降りたら改札で同じ営業部の同僚、箱崎（はこざき）　那智（なち）と一緒になって、戯言をほざく彼女と会社に向かった。

「日和はほんっとに現実主義者だよね？」
「…そうかな？」
「性格だって男かって言うぐらい淡白だし…容姿は可愛いお子ちゃまなのに中身それってどうなのよ！」

二十歳過ぎた女に可愛いお子ちゃまは決して褒め言葉ではない…

「まぁ…ね」

確かに男兄弟に囲まれて生活してきたんで自分の性格が男寄りなのは自覚してる。学生時代も女子のノリにはついていけなかったし、友達も男の方が気兼ねなく付き合えたからそっちのが多かった気がする。
お子ちゃま容姿なのは、身長が低くて出るとこが出てないからだろうけど、これで髪でも短けりゃどっからみても中坊だろうと自分でも思う。凹凸の無いあたしの唯一の女子らしさが腰まである直毛黒髪で、家族から絶対に切るなと断言されている。容姿全ては社会人になっても全く変化無かった。

「日和って刺激ある生活とか求めないわけ？」

何事にもストレートな物言いをする彼女は大学時代からの付き合いで珍しく女子の中で気があった貴重な存在だった。

「失礼な、あたしだって刺激ある生活してみたいよ」
「え～日和に刺激的な生活なんて似合わないっ！ビバ日常！」
「……どっちやねん」

なんて軽く突っ込みを入れながら、社員証をゲートに翳したときにそれは起こった。

「っ！？」

急に光で視界が遮られて目を瞑った。暫くして目をゆっくり開けたら、暗い世界で今ゲートにかざしていた社員証を右手に、思い切りビジネスバッグとスーツという違和感で天蓋付きのベッドの隅に正座してた。

「んぅ…あぁんっ！」
「……はぃ？」

ベッド脇にある仄かな灯りで慣れてきた視界の先に広がってたのは美景…もとい美形の男女が全裸で絡み合ってる姿で…

いや…いくら見た目お子ちゃまでも大人ですからわかりますよ？
目の前の人達が×××《ピー》の最中だって事ぐらい…

とにかく何で私がベッドに居るのか訳がわからないけど、この人達の邪魔にならないようにここから去らないといけない事はわかる。

こんな場に遭遇されて相手が気不味くない訳がないし、こっちだってどう対応していいかわからない…

…ここはこっそりベッドを降り…る事は出来ないらしい

「…貴様は誰だ?」

そこには裸で絡み合ってた筈の美形男が映画でしか見たこと無いような物をあたしに突きつけていた。それは包丁なんて可愛いものじゃなくて、刀…でもない西洋剣のような感じの物だった。

「え〜っと…」

…これって本物?なんて悠長に構えている自分もいれば、この危機を乗り越えるための言葉を捜す自分もいたり、あたしはどうしていいかわからないという状況を初めて味わっていた。

これが、所謂パニック状態ってやつ!?とテンションが上がる自分がいるのも訳がわからない

「もう一度聞く、貴様は誰だ?」

あ〜美形女子が引きまくってるよ…。ま…そりゃ引きますよね。

とにかくこの剣を下げてもらうのが先決で…

「あ、怪しい者じゃないです。安佐水（あさみず）　日和（ひより）と言います」

「…アサミ…ズ、ヒ…ヨリ？それは名か？」

「あ…はぃ。あのこれ…」

しまったぁ～～～！いつもの営業の癖で名刺とか差し出しちゃってるし！！

こんな怪しい人に身分明かしてどうすんのさっ！！しかも名刺取り出そうとしたら剣が動いたしぃ～

「…何だこれは？」

「名刺です」

「…メイシ？何だこの文字は？」

「…私の身分証明みたいな物です。文字は日本語なんで…」

確かに西洋風な方々に日本語の名刺が通じるわけもなく、っていうか相手裸で名刺交換ってありなんですか？交換してないけど…

「陛下っ！！早くその者を殺して下さいませっ！！そのような怪しい容姿の者！陛下を狙う刺客に決まっておりますっ！！！」

「…はぃぃぃ？」

陛下を狙う刺客？……つまり暗殺者って事？あたしが！？

陛下って…この人そんなに偉い人なの！？って、何であたしこんなとこにいるの！？

しかも殺すって何？これって銃刀法違反でしょ！？

「ち…ちがっ！！」

「余の寝所に許可無く立ち入っただけで極刑に値する」

どんどん迫ってくる剣先にあたしは後退するしかなくて…ベッドからずり落ちるようにして後退してたらいつの間にか背中に壁があたって、あたしの頭上にはベッド横の灯りより明るい灯りがあって、『陛下』と呼ばれた男の容姿があたしの視界に飛び込んできた

彼は銀髪に青い瞳で暗闇の中でも美形だとは思ったけど、こんなに人外な美形だとは思ってもみなくてあたしははっと息を呑んだ。ただそれは相手も同じだったみたいであたしの姿を見た瞬間、男の剣が下げられた。

「そな…たは…」

「誰かっ!!近衛ぇ!!!!!近衛ぇ!!!」

美形男が続けた言葉はベッドにいた美形女によって遮られ、あたしには聞き取れなかった。そしてその美形女の声に部屋の扉が開き、中世のようなマントを纏った兵士が駆け込んできた。

「陛下っ!!ここは我々がっ!!!どうかお下がりください!!!」

あたしの周りはあっという間に近衛と呼ばれた男達に囲まれ、美形男の周りにも男達がいて何か言い争っているようだが、あたしはそれどころじゃなかった。

「貴様っ!!覚悟しろっ!!!」

近衛の一人が剣を振り上げたのを見て、…殺される。と思った瞬間、また先程の光があたしを包んだ。美形男が「殺すなぁ!!」と叫んでいるのが遠く聞こえたが、その時にはもうあたしの視界は別

の景色を映していた。

その別の景色こそ、このテリサン村で、この村の人達と話す事によってあたしはようやく異世界トリップをしてしまったんだと気付いた。でも、そんな怪しいあたしでも村の人達は襲ったりしなかったし、それどころかあたしを迷子だと思って献身的に受け入れてくれた。

それから3年平和にこの村で暮らしながら、何とか日本に帰る方法を探している。

あたしはもう一度手配書を見て大きくため息をついた。

あたしがこの世界で知ってる貴族っぽい人なんてあの美形カップルぐらいだし…逆に言うとあたしを知ってるのも彼らだけなので、つまりはあの美形男かその家族がガルフェルド帝国皇帝なわけで…

「ねぇミレーヌ…。もしも…もしもよ?」

「ひよ、どうしたの?」

「皇帝陛下の寝所に潜入とかしちゃったら、指名手配になるかしら?」

「……そんな馬鹿な人いないんじゃない?」

…つまりは、なるって事だよね。

あぁ、やっぱり一度謝りに行かなくちゃいけないのかな…

2話　トリップは刺激的！？（後書き）

ひよと皇帝（まだ名前は出てません）の出会いでした
これからまたひと悶着ありそうです。

3話　平和に暮らしたいんです

いつものようにミレーヌと一緒に彼女の家に朝食を食べに行く。
と言っても向かいなのでそんなたいした事じゃないんだけど

「ミレーヌ。さっきの手配書の事ってメルフォスさんとかライザさんに言った？」

ちなみにメルフォスさんはミレーヌの父親でライザさんが母親。
宿は母親のライザさんが経営してメルフォスさんはこの村の守護兵として働いてらっしゃる。守護兵ってのが日本で言う警察みたいな物で、あたしが3年前、この村の外れに突如現れた時、一番にメルフォスさんに連絡がいき保護されたのがこの一家との付き合いの始まりだったりする。
あたしにとって命の恩人と言っても過言ではない人達なのだ

「言ってないよ。お客さんが今朝早く出立の時にテーブルに忘れていった紙を開けてみたらひよが載ってて、慌てて飛び出してきたから」
「そっか。誓って罪人じゃないから、この件ちょっとだけ内緒にしといてくれない？」

ミレーヌが言うように忘れ物程度で偶然この村に辿りついた手配書なら都市部に行かない限りは捕まる事は無いと思うし、その間に謝る方法考えて手配書を取り下げて貰えばいい。ただ出来る限り平和に過ごしたいからお尋ね者なんて騒動になりそうな事は極力避けたいと願う

「罪人？ひよ何言ってんの？」
「え？」
「ひよが罪人なわけないじゃん！」
「え…だって、手配書って…」

少なくとも日本で手配書って言ったら、前科何犯の指名手配犯とかを連想しちゃうんですけど…違うの？

「この手配書は人探しの手配書。罪人の手配書は紙自体が赤いし、金額表示も手配書は謝礼金。罪人は懸賞金。ひよのは謝礼金でしょ？つまりひよの手配書は人探しの手配書なの！…しかも皇帝陛下直々の手配書なんてあたし見た事ないよ？」

ミレーヌの説明に「罪人かもしれない」って不安が無くなった。とにかく罪人扱いじゃなくてよかった…でも説明を聞いても、ややこしい事には変わりなさそうじゃない？

あの件を罪に問わないんだったら何で手配書とかするかなぁ～。やっぱ罪にはならなくても何で突然あの場にいたのかとかの説明を求められるのかなぁ。そんなの自分でもわかんないんだから説明のしようがないですけど…

「…手配される身に覚えないんで、やっぱり内緒でお願い」
「うん。もしかしたら他人の空似かもしれないしね！よく考えたら皇族が3年もこの村にいるなんてありえないしっ！！」

ミレーヌが単純な子で良かった！そして身に覚えはめちゃめちゃあるけど、嘘ついてゴメン！ってあたしは心の中で手を合わせて謝った

「さっ！ご飯食べて開店しようっ！！」

「うんっ！今日も横で見てていい？」

これもこの世界でのいつもの日常。ミレーヌがあたしを起こしに来てくれて二人で朝食を食べてそのままミレーヌはあたしの店を手伝ってくれる。何故かあたしの作業を見ているのが好きらしく、基本は宿のお手伝いなんだけど、日本でいうチェックアウトと食事の時間帯以外は暇なのであたしの店に入り浸ってる。

キラキラした瞳で作業を見られると照れるけど、嫌な気分じゃない。

「いつも許可なんていらないのに。それどころかこちらこそいつも手伝ってくれてありがとう」

そうあたしが言葉を返すと真っ赤になったミレーヌが「そんな…」と照れている。ん～美少女のそんな姿を見ると、お姉さんはそのケはないけどときめいてしまうよ？

「今日のご飯何かな～？」

「今日はグライのスープと母さんのグリュスリーフよ」

「よしっ！！」

グライとは日本の鶏肉みたいなもので、グリュスリーフはシフォンケーキみたいな感じの物だ。どっちもこの世界にきて初めて食べた物で今ではあたしの一番の好物になってる。ライザさんもそれをわかってくれてるのか2週間に一度はこの献立を出してくれて、ほんとにこの家族はいい人達だ…とあたしの涙腺は潤んでしまうのだった

3話　平和に暮らしたいんです（後書き）

今日は昼にメンテナンスがあったので少し短いです。

お気に入り登録の数とアクセス数にびっくりしてます。

本当にありがとうございます

4話　素晴らしき『文明の利器』

隣国へ向かう次の中継地点は結構遠いので、この村に泊まる旅人の朝はとんでもなく早い。だから村人の活動時間には出立してる事が多く、今日もミレーヌの宿の食堂は既に閑散としててどこでも座りたい放題だった。そんな中でもあたしとミレーヌが座るのは入り口の付近の窓の席といつも決まっている。そこなら目の前の自分の作業場が見え、誰かが訪ねて来ればすぐわかる。大体一人目の客が来るまでこの食堂でお茶するのが日課になっていた。

店をやる気があるのか？と聞かれれば「ある！」と答えるけど、この世界というか村の特色が基本の～んびりなので、そんな村人相手の店で一人で頑張って経営しても意味が無かったりする。勤勉日本人のあたしにとってはの～～～んびりぐらいで丁度いいのだ。

目の前には空になった食器達。もちろんライザさんの食事は全て美味しく完食させて頂きました。元の世界では味わった事のない美味しさに、初めてこの料理に出会った時は思わず「お母さんごめんなさい」と謝ってしまったのはつい勢いである

「ご馳走様でした！とても美味しかったです！！やっぱ、ライザさんの食事の中でもグリュスリーフは格別だ～！！」

元の世界のくせはやっぱり3年程度では抜けなくて、両手を合わせての食事の挨拶もそのうちの一つ。ライザさんも初めは不思議そうにその仕草を見てたけど、今ではそれをするとにっこり笑ってくれる。やっぱ何でも礼儀は重要だよね！料理を作ってくれたら作ってくれた人に感謝！原材料を作ってくれた人にも感謝！これ常識！

しかし、これを味わう事が出来たのならこの世界に来た意味もあったかもしれないと思わせてしまうこの料理とそれを作ったライザさんが恐ろしい。

「ははははっ！いつも美味しそうに完食してくれるから、ひよには作りがいがあるよ！うちの亭主も娘もあたしが食事を作って当たり前だと思ってるからねぇ！」

料理はとても繊細な味付けなのだがライザさん自身はとても豪快なおかみさんで、例えるなら肝っ玉母さん！が一番しっくりくる気がする。あたしのこの世界でのお母さん…まだ了解は取ってないけど、心の中ではいつも「ありがとう、母さん！」って感謝してる

ミレーヌは可憐な容姿は父親似で、いつも玄関を破壊する中身は母親似なんだと思う。

いや…決してライザさんが不細工だとは言ってないよ？ただメルフォスさんの美しさが男の人！？っていうだけで。あれで自分の身の丈の倍ある槍を簡単に使っちゃうんだから…この世界って不思議。

「そういえばひよ、ちょっと調理器具の調子が悪いんだよ。見てくれないか？」

「あ、はい。どれですか？」

そう言うとライザさんは調理場に戻って行ったと思ったら、その調理場から声が聞こえてきた

「ひよ～～～！ちょっとこっちに来ておくれ～～～～！」

あ～持って来れないサイズの物って事はオーブンとかおっきい物

だな…。作業場で道具取ってこないと修理出来ないとは思うけど…
とりあえず見てみるか

「今、行きま～す」

そう、この世界でのあたしの職業は道具屋さんだったりする。家庭で使うような小さな調理器具から、それこそ業務用の大きな土方アイテムまでお客様の要望によって様々な道具を作り出しちゃってるのだ。

調理場に入ると、そこはライザさんの世界でこんな村の宿とは思えないほどたくさんの調理器具が雑然と、でもある一定の法則できちんと配置されていた
そんな中困った顔でライザさんが立ってるのはやっぱり予想通りオーブンの前で、扉を開けたまま両手を挙げてお手上げポーズをしている

「オーブンですか？」
「そうなんだよ。最近こいつがご機嫌斜めでねぇ…今日もグリュスリーフを2回ほど焦がしてくれちゃったんだよ」
「えぇ！！グリュスリーフを！？」

それは大事件すぎるっ！！

「焼けないわけじゃないから、ひよの手が空いた時にで」
「すぐ直します」

グリュスリーフが食べれなくなるなんて考えられない！
とにかく原因を調べないと対応の仕方がわからないのでオーブンを空いた扉から覗いてみたら、以外とすぐに理由がわかった。

「あ～これ、暴発しちゃってますね～」

電気が無いこの世界では別の力が存在している。
それが民の生活を支えていて、その力は『魔法』と呼ばれている

なんとあたしはその『魔法』が使えちゃったり、つまり魔力があるらしく…らしくっていうのは魔力自体はあんまり自分で実感出来る物じゃなくて、魔法が使えるから魔力あるんだなぁ程度にしかよくわかってない。
ただビバ日本人！で、手先の器用さと魔法を使うのは一緒の感覚らしく、なんだかパズルを組み立てていく様な感覚で魔法が使えてしまう

で、このオーブンに使われてる魔法って言うのが魔石と言われる電池みたいなやつで、魔法を編んだ石を動力に動いている。詳しく原因を調べるためにオーブンから魔石を取り外す。魔石に触れた瞬間に魔石に編みこまれた魔法図が頭の中に流れ込んでくる。

「これ、あたしが作った魔石じゃないですね？」
「そうなんだよ。ひよが作ってくれた方のオーブンは調子ばっちりなんだけどね。これは少し古いやつなんだよ…」

その場でも直せそうだったが、過去にもっと小さな簡単な魔石を道具も使わずにその場で直したら、周りを驚愕させてしまったのでそれ以来作業は作業場だけでと決めている

「これなら魔石の再設計だけで何とかなると思いますから、道具

必要なんで…この魔石一度作業場に持ってってもいいですか？」

そうあたしが言うと「急がないから頼むよ」とにっこり笑って言われ、その場で直せるのに直さない自分の良心の呵責が疼いた。母さんごめんよ。

「じゃ、一度帰ってまた来ますね」

今度はこんなちゃちな魔石じゃなくてもっとばっちりな高性能な魔石作るから！

あたしは魔石を握ると調理場を後にして、まだ食堂で朝食を食べてたミレーヌに簡単に事情を説明して「すぐ戻るから」といって自分の作業場に向かったのだった

４話　素晴らしき『文明の利器』（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます

ユニークが昨日５８００人と若干びびってますが…

たくさんの方に読んでいただけて、こんなに作家冥利はないなと感激してます

ほんとにありがとうございます

5話　愛読書は「はじめてのまほうのつかいかた」です

どうしよう…多分、いや絶対ピンチです。

いや、魔石は全然楽勝だったんだけどね。だってあたしの愛読書『はじめてのまほうのつかいかた。ちいさなこへ』で立派な物が作れましたから！

え？そんなちゃちい本でいいのかって？

ごほんっ！何事も基本なのですよ？変に上級編の本なんて読むとその著者のくせが出まくりで碌な事ないんですからっ！！決して読めないからって負け惜しみ言ってるわけじゃないですからっ！！

…えぇ。どうせ、幼児レベルしか読み書き出来ませんよ。

何か問題ですか！！？

生活出来ればいいんですっ！！

大人なのに…と自暴自棄で泣いた過去は見なかった事にして下さ

い。だいたいこの世界の文字の数が多すぎるでしょ？
何なんですか？子供と大人で使用する文字が違うって？
しかも貴族と平民でまた使用文字が違うって何？
それ以外にも事細かに文字が分けられてて意味がわからない！！

文字とは本来、人に伝達する為のものだろうがぁっ！！！
せめてひらがな・カタカナ・漢字レベルで抑えとけよっ！！

という、あたしの過去3年のジレンマ…もとい、誰にぶつければいいかわからない怒りはいいとして…

そうっ！ピンチなんです！！

あれは作業場に戻ってすぐの事。

魔石の修正はすぐ終わりそうだったんで、あまり早く戻るのも宜しくないと思って、たまたまさっきの手配書に手を伸ばしたのがまずかった。
手配書に触れた途端、さっきは感じなかった違和感を感じて思わず凝視しちゃったんです。よく見ればあたしの似顔絵部分に変な魔法が織り込まれちゃってるのを発見してしまったんですよね。

普通気になりますよね？
自分の顔に何の細工がされちゃってるの？とか

…もし、これで似顔絵が年をとったら凄いっ！！とかって思っち

やったんですよね～

……ぇぇ安直でした。今猛烈に反省してます。

何故ならその不思議な魔法に触れた途端に手配書が鳥となって羽ばたいていってしまいましたから。

…あの魔法は何だったんでしょうかね？

十中八九『追跡魔法』だと言う自分の脳ミソに蓋をして、現実逃避に愛読書を読みました。あ、これも元の世界のくせの一つなんですよ！現実逃避に本に逃げるっていうの！まぁ、読める本は幼児レベルしかないですけど…ふふっ

でもおかげで立派な魔石の修正が出来ました！

残る問題はやっぱりさっきの手配書で…

「まずい…まず過ぎる…」

これなら下手したら罪人の方が罪がはっきりしてる分気持ち的には楽かもしれないと思う。何だかよくわからない追跡ほど気持ち悪い物はない。公開ストーカーに追いかけられてる気分だ。

「…逃げる」

何処に…。
この世界でこの村と皇帝の寝室しか知らないあたしに何処に行けと？
次に行く村なり街がいい所だという保障は無いのだから…

「あぁ～～！！！どうしてあたしが追い込まれなきゃ駄目なのさっ！？」

悪い事なんてしてないのに…。
あ、寝室に無断侵入はしましたけどね…

「駄目だっ！！こんなモヤモヤ気持ち悪くて仕方ないっ！！すぱっと謝ってこよう！」

よしっ！！
ウダウダ相手の出方を待つより、こっちから謝る方法を考える方が建設的な気がするし、そうしようっ！！

「謝罪するにしても、手紙はいつ届くかわからないし…まず貴族文字なんて書けないし…直接行くにしても、こっから城まで確か徒歩だと半年かかるとか言われたよね？転移魔法…？」

しかしこの転移魔法には自分の記憶の場所にしか行けないという問題がある。
何度も言うようにあたしは皇帝の寝室しか知らない。次にまた夜伽乱入などになったら今度こそその場で殺されてしまうと思うんですけど…

「ん？夜伽？……夜？そっかっ！！！」

夜伽は夜なんだから昼に転送魔法使えばいいんじゃんっ！！
あぁ…こんな事もすぐに思い浮かばないなんて…かなりこの村の
の～んびり空気に感化されてしまってる。いや…別に悪い事ではな
いけど、こんな形(なり)でも元の世界ではやり手の営業だったからちょっ
とショックだっただけですよ。

この村に来て一番勉強して練習した魔法だから、転移魔法は得意
中の得意！

だって元の世界に帰れそうな一番の魔法が転移魔法だったから…
何度も自分の家をイメージして魔法を発動したけど、その度によ
くわからない大きなぼよ～んとした壁に跳ね返されてしまう。世界
間を越えるには転移魔法の他にも何か魔法が必要みたいであたしは
普通に生活する反面、その研究に没頭してる。

なのでまぁ城に防壁が張られてても何とかなるでしょう！

「そうと決まれば…すぐにでも行動しないと、あの追跡魔法が相
手に届く前に」

鳥の形の追跡魔法って事は伝達レベルは低いはず、その分大量に
施せそうだけど…自分の手配書がたくさんあるのを想像して背筋が
寒くなった。

「う～トリハダっ！！！」

あ～早く処理してしまいたい。そしてこの不気味な感じから解放
されたいっ！！

「よしっ！思ったら即決行しよう！」

あたしはそう決めると、簡単な事情を説明しに修復した魔石を持ってミレーヌの宿に向かったのだった。

5話　愛読書は「はじめてのまほうのつかいかた」です（後書き）

お気に入り登録とユニーク数にただただ戸惑うばかりですが
たくさんの方に読んでいただけてほんとに感謝しております

ありがとうございます

6話　光の道。転送ドライブへゴー！

オーブンの修理は魔石をオーブンに戻すだけだったのですぐに終わった。さて、これからの事をミレーヌにどうやって説明しようか？いきなり皇帝の寝室に乗り込みますとか言ったらどう思われるかわからないし…3年の間に遠出とかした事ないからちょっと隣町までとかも無理。

「あの～ミレーヌ、今日一日店番お願いしていいかな？」
「ひよどっか行くの？」
「あ～の、ちょっと魔石の原材料を採取しに…」

はは…魔石の原料なんて普段は村からちょっと行った川の石コロでしてるくせに…

この世界、魔法を溜められる石なんてゴロゴロしてるからその辺のでもいいんだけど、川の石は水の流れで角が取れて綺麗になってるから気に入ってあたしは愛用してるのだ。

「？いつもの川？」
「ん～もうちょっと遠くまで行ってみようかなって思って、ついでにそこから家まで戻って転送魔法の練習もしたいし…」
「了解！店番しとく」

ミレーヌの笑顔に自分の腹黒さが浄化して昇天させられそうになる。あう…今のお姉さんにその笑顔は毒です…はい。

「じゃあ、…よろしくね」

「うん。行ってらっしゃい！」

帰ったら何かミレーヌの好きな物を作ってプレゼントしよう。

あたしは宿の外で笑顔のミレーヌに見送られながら、そう心に決めたのだった

＊＊＊

歩いて１０分ぐらいでいつも魔石を採取している川の辺りまで来る。

一応自分の魔法に人を巻き込まないように周りに人が居ないか確かめる。転送空間は目を開けられないぐらいの光の世界なのでポケットからサングラスを出して装着するのを忘れない。一番初めに何も装着せずに転送魔法を使った時にはあまりの光に目をやられて、しばらく頭痛が引かなかった。もちろん普通のサングラスでは無理なので、特殊な魔法フィルターをつけた物を自前で作ってみた。なので蝶番部分には魔石が組み込まれてる。

「人の気配なし！オッケー。…んじゃあ、行きますか？」

目を瞑って意識を体の中心に集める。身体の設計図を認識して、それに皇帝の寝室への転送魔法を合成していく。自分の体が沈み込んでいく感覚に転送空間に入った事を認識した。目を開けるとそこは全て光の世界でサングラスが無ければ、やはり目を瞑らなければ耐えられない世界だった。一筋の道が自分の立つ場所から伸びており、自分で歩かなくても意識するだけでその道に沿って立った場所自体が猛スピードで動く。

「初めはこれに振り落とされるかと思って気が気じゃなかったんだよねぇ…」

としみじみ呟いてみるが、もちろん周りには誰も居ない。今ではどんなにスピードを出しても大丈夫だとわかっているので出来る限り最速で場を動かす。

そうしてしばらくそのままでいると、前方に大きな壁が見えてきた。

「お～ビンゴ。魔法障壁見っけ～」

壁の手前で場を止めると、とりあえずその壁を見渡してみる。その壁は道を分断するように建っていて左右を見てもどこまでもその壁が続いていた。

「さて…と」

あたしは右手をその壁にくっつけ、再び目を閉じた。すると、頭の中で壁が魔法の網に変わる。こうなればもうこっちのもんで、網の綻びを探す。どんなに優れた魔法使いが作った物でも完璧な物などなく、必ず小さな綻びは存在する。小さな綻びさえ見つければ後はそこから服の解れを解くように穴を開ければいいだけの事なんだけど、ただこれが意外と気を使う作業だったりする。

ここで重要なのが、服と同じく無理に解くと後で修繕が大変になってしまうので、修繕する人が簡単に済むようにきちんと一人分だけを解いて、他を傷つける事はしない。

う～ん。やっぱり、国の中枢部分だけあって魔法が緻密だしめん

どくさいわ…。出来れば帰りは障壁の外から転送魔法を使いたい。こんなの一日に二回も作業したら肩がガキゴキになってしまう。

「あ、わかり易く目印つけとこうか…」

修繕する人の為にあたしは自分が通れる穴だけを開けると、そこに全く関係の無い物理魔法をかけておく。簡単に言うと待針を刺したみたいなもの。

「よしっ！じゃあ乗り込みますかっ！！」

場を再び動かすとすぐに道が途絶えた場所についた。そしてそこに立つと自分の体が再び沈み込み始め、無事目的の場所に着いた事にちょっと安心した。

どうか余計な人が居ませんように…

出来れば謝罪文を残すだけで帰れますように…

この世界の神様お願いします！

沈むのが収まり、目を開けるとそこには見覚えのある景色が広がっていたが、前回見た光景が広がっていなくて安心する。やはり昼なので人の気配もない。そこまでは予想通りだったが…

「……何でまた転送先がベッドの上なのよ」

自分が座ってしまって出来たであろう皺を戻しながら、何故か自分の道徳観に文句を言いたくなった。

6話　光の道。転送ドライブへゴー！（後書き）

初めて感想を頂いて感動しました
たくさんのお気に入り登録と評価に言葉がありません。

戸惑いながら書いた物ですが、書いてよかったと思います。

ありがとうございます

7話　拝啓、皇帝陛下様

はりきって転送してきたはいいが…そこで気付いた自分の愚かさ。

「何であたし家で謝罪の手紙を書いてこなかったのよ…」

昼間の寝室に人が居ない事なんてわかりきっていたし、むしろそれを望んでいたんだから直接謝罪出来るわけがないじゃないっ！！

あぁ…あたしの馬鹿…。

「でも…凹んでばかりはいられないし」

とにかく謝罪文を残すためにあたしは筆記具らしきものを探してみるけど…見れば見るほど部屋の豪華さが眩しいっていうか…

天蓋つきのベッドって何さ？
これってお姫様の特権じゃないの？
男でもアリなのか？

それにしても無駄にデカイベッドだな…

などの下らない疑問で時間を使ってしまう。

しかも探し物は見つからない。まぁ…偉い人が寝室に筆記具置く必要性もないか…。作業とかは専用の部屋があるだろうし…その時あたしの視線は部屋の出入り口であろう扉に釘付けになった。

「…隣の部屋にあるかな?」

…あ~更に罪を積み重ねそうな気がするけど、ここまで来て何もせずに帰るとかありえないしさ。扉に耳を付けて隣の部屋の様子を伺うも、人の気配はなさそうだし…

……よしっ女は度胸!やってみよう!!

＊＊＊

う~扉に手をかけるだけで、心臓がバクバク言ってるんですけど。結構スパイ映画とかスリルのある映画が好きだったからよくこういうシチュエーション見てドキドキしてたけど、こんな冷や汗ダラダラな事、出来れば実地経験したくなかったというのが本音。

ガチャ…って扉の開く音でっかくない??

何で人ってこっそりする時首を竦めちゃうんだろうね?

あぁ…さっきから下らない思考ばっかり巡ってる。これはかなり

テンぱってるな…。
隣の部屋に人が居てたら即アウトだけど、一応小さく声も掛けてみる

『お邪魔しま～す』

とにかく扉を開けた瞬間に、自分でも驚く凄いスピードで左右上下人の確認をする。寝室で確認した通り、隣の部屋にも人の気配は無かった。

凄い！この緊張感…初めて取引先に行った経験なんてこれに比べたら全然余裕だわ…

安堵感に支配されながら部屋を確認すると、寝室の豪華さとは打って変わって豪華絢爛っていうよりは家具の輝きから高級品に違いなさそうだけど、シンプルな感じだった。机と応接セット？とでっかい本棚には分厚い本がたくさん並んでた。

えぇ…もちろん貴族文字でしょうから…背表紙すら読めませんけどね。

「そんなお家探検してる場合じゃなくて…何か書くもの、書くものっと」

机にはさすがにあるだろうと思って一番に探してみる。机の上に羽ペンと墨壷を見つけた時には、何故か手をぎゅっと握って「ゲットぉ！」と小さく叫ぶのを止められなかった

「え～書くものは見つかったけど…、紙が無い」

机の上にはたくさんの書類らしき紙はあったが、読めないけどさすがにこれに書くのはまずい事ぐらいはあたしにもわかる。こういう時に確実にいらない紙をゲットする為にはあそこが一番。
あたしは徐に机の下に潜ると目当ての物を見つけた

「ゴミはさすがにいらないよね…って空っぽだし！！！！」

ゴミ箱を逆さにしてむなしい行為をしてみる。
うぅ…さすが城。ゴミを放置なんて事しないのか…

さてどうしよう…もう転送してきて結構時間経ってるし…そろそろ障壁に穴開けたの見つかりそうな気がする。

…こんな事なら見つけやすくなんてするんじゃなかった。

「…ん？」

たまたま見た書類の山に挟まった物に、何か見覚えが見える。山を崩さないようにゆっくりとそれを引き抜くと

「……これ」

自分の手配書だった。

「…こ、これなら必要ないよね？」

あたしはすぐに机の羽ペンを掴むと墨をたっぷりつけた。紙にペンを置いた途端に墨が黒く滲む。何度使ってもこの羽ペンというのは慣れないし、ボールペンが恋しいなぁ…と思う。今度自分で作ってみよう！と頭の作成リストに記載する事を忘れない。

え～っとそれでは、文面は…と

『はいけい　こうていへいかさま

わたしはせんじつ、しんしつにとつぜんあらわれたものです。
あのときはほんとうにすみませんでした
ずっとはんせいしてます。

ですからおねがいですので、てはいしょをとりさげてください

よろしくおねがいします

安佐水　日和』

名前だけ日本語の漢字で書いたのは、前に来た時にあの人にあたしの名刺を渡したからで、この文字はこの世界であたししか書けないし、立派なあたしの証明になるでしょう！
…まぁ、その他はお子ちゃま文字しかかけないんで、片言文章しかかけないけどさ…

とにかくこれで任務完了！

このまま机の上に置いといたら見てくれるでしょう。さて、せっかく遠い所まで来たのだから城下町見物でもして帰るかな。

肩凝るし、面倒だし障壁を通らずに城下町に行く方法無いかなぁ？
ミレーヌに都会のおみやげもいいかもしれない。

手紙を書き終えた事であたしは完全に油断していた。

バァーンッ！！！

あたしが来た寝室とは違うもう一つの扉が吹き飛ばされる勢いで開かれる。

何故手紙を書き上げたら障壁も関係無くさっさとこの場を後にしなかったのか、これほど自分自身の怠惰を後悔したことはない。

「あさみずひよりっ！！！」

飛び込んできたのは3年前と同じ麗しい姿の美形男、多分皇帝陛下に違いなかった

7話　拝啓、皇帝陛下様（後書き）

ようやく皇帝陛下と再会です
次回には陛下の名前が出ると思います

たくさんのユニーク、お気に入り登録、執筆の励みになります
ありがとうございます

8話　サバの名前は『あさみずひよ、り』

あぁ…今すぐ自分自身を抹消したい

あの後、飛び込んできた皇帝かどうかは未だ不明な人に、よくわからない紙を背中に張られて強制的に応接セットのソファに座らせられた。

張った本人はあたしがさっきまで立ってた机で何か調べてる。

指名手配まで受けてる超怪しい人物が、突然自分の部屋の机漁ってたらそりゃ当然の対応です。

いや…まぁ…当然の対応なんですけどね。

…一応弁明しなけりゃあたしの首が危ないんで

「…机のペンとちょっと手配書の裏を借りただけですよ」

はは、軽く無視ですか…これはどんだけ無罪を訴えても有罪確定。

…この背中の紙に「この人お馬鹿です」とか書かれてたらやだなぁ…。

と思ったら皇帝が手にしたのはあたしが書いた手配書の裏のお手紙。

「…これは？ん？コウテイヘイカサマ…私への手紙か…」

その後の文章も音読しやがった皇帝様。
超お子ちゃま書きな内容の手紙を目の前で音読されるって何の羞恥プレイですか?これが罰ですか?えぇ今の音読で結構心ぽっきり折れましたよ。

ソファといえども膝を抱えていじけてしまう。

「あさみずひより」

うるさい…こっちは凹んでるんだ。

「おい、あさみずひより!」

フルネームの連呼って何だか教師に叱られてる気分になって、さらに凹む。しかも普通の日本語の発音じゃないから、ただ一定の音で名前呼ばれるのって気持ち悪い。
返事しない事にイラついたのか皇帝が違う手段に打って出てきた

「あさみずひよ、り!」
「変なところで名前切らないでよっ!!!」

何だその名前!
百歩譲って「あさみずひよ」は苗字としてまだ許そう。…大分妥協してだけどね。

だけど「り」は受け入れられない。

名前が「り」って何だよ!「り」って!!
ありえないでしょうが!普通!!

「あたしは『あさみず』、『ひより』！！」
「あさみず…ひより」
「そうっ！わかった！？」
「わかった…あさみず、ひより」

思わず怒りにソファを立ち上がって皇帝に詰め寄ってしまった。

…ま、まずい、こんな事出来る立場じゃなかった。

今までの怒りは何処へ行ったのやら、まるで無かった事のように急速に冷めて、後に残るのはキレた気まずさだけで。
とりあえず顔に自分でもわかる引きつった笑みを貼り付けながら元の位置まで戻る。ソファに座って皇帝から無理やり視線をはずして、ひたすら「ははは」と笑い続ける。

あ～次視線合ったら、もしかしたら今日死ぬかもしれないなぁ…

そんな不吉な予感が頭を過ぎるのを無理やり抑え込む。

とにかく謝罪しなければ…

そう思って頭を下げたときに皇帝からまた声をかけられた。

「あさみず、ひより」

名前を呼ばれて身体がびくっと反応する。

「すみませんっ！！悪気は無かったんです！ただ名前は親に貰った大切な物なのでそれを間違えられてちょっと我慢が出来なかっただけで…」

「…君の年齢は？」

あたしの謝罪と相手の声が被ってよく聞こえなかったけど…

「え……年齢？」

全然想像してなかった質問に、あたしの頭の処理速度が追いつかない。

…どうして今、年齢聞くの？

「そう、君の年齢だ。この文面からしてまだ幼いようだが…」

あ…そっか。

この人あたしの実年齢なんて知らないんだから、幼児文字を書けばそれがあたしの年齢基準になるんだ。

もちろん２５歳なんて実年齢は絶対言いませんよ？ビバ童顔日本人！

…とはいえ、この文字を使う年齢って何歳ぐらいなんだ？

ミレーヌと一緒に文字の勉強してるんだから、ミレーヌの年近くに合わせとけば間違いないんだよね？

…ミレーヌっていくつだっけ？

あたしの頭はフル回転で記憶を辿る。きっとこの返事があたしの生命の助かるボーダーラインだと何となく察した。
ただ慌てた頭は上手く回転してくれなくて「ミレーヌは魚介が食べれない」とか「ミレーヌは首に黒子がある」とか下らない情報だけを提供してくる。そんな中でぽっと思い浮かんだケーキの映像に思わずあたしの下げてた頭が上がる

「１２本！！」
「……じゅう！？」

そうだ、先月のミレーヌの誕生日会のケーキの本数を思い出した！あぁ…サンキュ～あたしの頭、お疲れ！じゃあ…それから計算してあたしの外見で通用するような年齢を考えてと思っていたら、机の方から皇帝のか細い声が聞こえてきた

「１２…とはな。もう少し上だと思ったが…」

…はい？

「１５歳差か…」

…あれれ？

「１２歳か…」

ぎゃ～～～っ！！違うよ！！！
それ、ミレーヌの歳だから！！ケーキの話ですからっ！！
いくらあたしでも１２歳は口に出来ません！！
さすがに１３歳サバ読むのとか犯罪じゃないでしょ！

ってあたし見た目そんな若さ通じるんですか!?
今12歳って、3年前は9歳ですよ?
少なくとも見た目は髪以外、全然変わってないのだからありえないでしょ!!

気付けよ皇帝っ!!!

とにかく混乱に陥ってるあたしは口をパクパクさせるだけで、言葉が出てこない
皇帝も口元に手をあて何か考えているようだった。

「ところで、あの時どうして私の寝室にいたんだ?」

それ今聞く!?
普通最初に聞かないですか!?

そして、皇帝の口から再び年齢の話は出てず…あたしの12歳は決定事項になったようで…
12歳って、中一じゃないですか…去年までランドセルの年齢じゃないですか…

しかし、下手に自分から年齢を上に訂正した事によって罪を問われても嫌だし…まぁ、今しか関わらないから……なんて納得できるわけもなく。

いや~~~っ!!!!
あたしから言えないんだから、皇帝…この不思議に突っ込んでよっ!!

もちろん心の叫びは誰にも届かなく、訂正もなく、とにかくあた

しは口と喉がカラカラでこの後「何か飲みたいです」と皇帝にお願いしたのだった。

8話　サバの名前は『あさみずひよ、り』（後書き）

日本人の童顔はどこの国に行ってもですよね。
アジア圏でも未成年に間違われます…。

毎日たくさんの方に足を運んで頂いて、感謝でいっぱいです
ありがとうございます

9話　ウソも方便

暖かいお茶がテーブルの上で湯気を立ててる。だけどそれはあたしのじゃなくて皇帝の分。あたしの前に置かれているのはグラスに入った果実ジュース…。えぇ…12歳の扱いだから当然だとは思うんですけどね…。

さっきから目の前の皇帝は黙ったままでお茶に手をつける訳でもないし、ただじっとこっちを見つめるって何ワザ？

…逃げないように見張ってるの？

それならもうちょっと扱い方を変えて頂きたいと望むというか…空になったグラスにすぐジュースを注いでくれたり、お茶菓子を薦めてくれたり、丁寧なお客様扱いをされるとお互いの思考のチグハグさに空気が気まずすぎる。

注がれると飲まなくちゃいけない気がして頑張って飲んだけど、何杯もジュースを飲み続けるのもお腹の限界があるし…すでにもう胃がタプタプ状態なので、もうそろそろさっきの話の続きをしたいんだけど、皇帝に対してこっちから話し出すって礼儀作法的にはどうなのよって感じだし…

ただ…あたしの全てが限界です。

「あの～…」

とりあえず、視線を合わせる勇気はないので手に持ったグラスを見ながら皇帝に話しかけてみる。

「…喉は潤ったか？」

思いがけず優しい声に視線を皇帝に向けてしまって、すぐ後悔した。だってそこには信じられないぐらいに眩しい神々スマイルが存在していたからで

ぎゃ～っ！！眩しい！眩しすぎる！！

めったにいない美形男に微笑まれると、顔がムズムズして溶けそうで…これはもう凡人には毒でしかないわ。偉い人に平民が気軽に会えない理由ってこういう事もあるんじゃないかな？って思う。

メルフォスさんも半端ない美しさだけど…この人にはそれプラス神々しさがあるというか…権力者の威圧感というか…とにかく全然落ち着かない。

「……」

「？どうした？」

いや…話そうとした事が貴方の笑顔でぶっとびました…何て口には出来ません。

…というか、無理だわ。美形とは遠く離れたところから見て楽しむもんでしょう！があたしの持論なので、美形の目に自分が映っているなんて状況が耐えられない。

「うぅ…」

「喉が潤ったなら、自分の分かる範囲で答えられる事を答えてほしいのだが…」

この拷問のような状況から早く開放して欲しいので、目線を合わせずにあたしはコクコクと頷いた。

「そうだな…まずさっきも聞いたが、3年前…私の寝室に突如現れたのは？」

待ってました！その質問！！

出来れば年齢なんかよりもまずそれを聞いて頂きたかった！

「あの～、あたしの国はニホンという地図にも載らないとても小さな島国だったんですけど…、そこが魔法でも防ぐ事の出来ない天災に襲われまして、その時に大きな転送魔法を発動したんですけど…それが暴走したらしくて…気がついたらここに居ました」

ニホンが存在しているのはホントで、地図にも載らない小さな国というのはウソ。

国が天災に襲われたのはウソだけど、あたし自身が魔法で防ぐ事の出来ない天災に襲われたのはホント。

大きな転送魔法が発動したのはホントで、それが暴走したのはウソ。

半分のウソと半分のホント。そして異世界の存在は微塵も感じさせない。

すらすらとこんな話が出来たのは、実は3年前のあの日。テリサン村で最初に出会ったメルフォス夫婦と話した時に自分が異世界トリップをしたと分かり、その時にメルフォス夫婦に自分に起こった全てを話し、そして異世界の話は隠しておいたほうがいいと判断した上で、この自分の身の上話を作り上げたのだ。つまりあたしが異世界人だと知っているのはメルフォス夫婦だけで、ミレーヌもこの事は知らない。

身の上を全部ウソにすると、どこで襤褸が出るかわからないので、現実と隠す事実の辻褄が合うように作った今の話。皇帝の寝室に初めに転送した事は夫婦にも言ってないが、この世界でこの身の上話が通用する事はメルフォス夫婦のお墨付きなので多分この美形男にも通じるだろう…と思う。

「…ニホン。確かに聞いた事の無い国だな」
「…はい」

そりゃ異世界ですから…とは言えない。

「天災に遭ったと言ったが…その他の国の者や、両親はどうした？」
「両親や皆とは…その転送された時点で離されちゃって…今どこでどうしてるのかも…わかりません」

両親の話をされるとほんとに元の世界での両親を思い出して思わず目に涙が浮かぶのを止められなかった。

「……すまない」

いやいや…あたしが異世界に飛ばされたのは皇帝のせいではない

し、謝られても困るんですけどね。とにかく多少は脚色してるけどあの日の事情は説明したし、

あとは…

「3年前のあの日はそんな状態で、気付いたら知らない寝室だったので慌ててしまって…ほんとにすみませんでした。許して頂けますか？」

言葉と一緒に頭を下げたあたしに皇帝がさっきまでと同じ優しい声で答えてくれる。

「別に「あさみず、ひより」は罪を犯したわけじゃないのだから許すも何もない。手配書もそんなつもりで配ったのではないさ」

よしっ！口頭でも謝った！！
で、これだけは忘れちゃいけない件がある

「あのぉ…その手配書の件なんですけど…」
「あぁ、もぅ「あさみず、ひより」が見つかったのだから取り下げる」

ふぅ…これで手配書も無くなって、堂々とテリサン村に帰れる。
それじゃ…と言おうとして皇帝の発言に顎が落ちた。

「謝礼金は「あさみず、ひより」に払おう」
「……はぃ？」

謝礼金って…あの手配書の莫大なお金の事！？
あたしの頭に手配書に並んだ莫大な数字が羅列される。

…あれってあたしがこの3年で稼いだ金額より多いですけど。

「そ、そんなのいりません！」

「「あさみず、ひより」が自ら名乗り出てくれたのだから「あさみず、ひより」に支払うのが当然だろう」

そんな宝くじみたいなお金、身の丈にあったお金じゃなけりゃ身につかないし…逆に不幸を呼びそうで怖いわ。

「いりませんっ！！！」

出来ればこの皇帝と関わるのも今回で終わりにしたいし、お金なんて貰っちゃったら縁が出来そうなのも嫌だ。

でも…それよりもさっきからずぅ～っと気になってるんですけど……

「あの…」

「…何だ？」

「あの…名前『あさみず』か『ひより』かどっちかで呼んでいただけませんか？」

そう、さっきからこの人はずっとあたしの事を『あさみず、ひより』とフルネームで呼び続けていて、それがすごく居心地が悪いのだ。

「しかし…『あさみず、ひより』が名前なのだろう？」

「…貴方はお名前なんと言われるんですか？」

相手はあたしが名前を知らない事に驚いてたようだけど知らないんだから仕方ない。皇帝かどうかも名乗ってくれないし……え……皇帝だよね？

「私は皇帝、リュージニアス・クロムレス・レイ・ジェイライト・ローダスタ・ガルフェルドだ」

はい、リュージニアスまでしか覚えられませんでした。
紙に書いてもらっても読めないだろうし……皇帝なので皇帝って呼べばいいだろうけど…

「私にとって『あさみず、ひより』っていうのは陛下のその長～いお名前を全部呼ばれているのと一緒なんです」
「…そうだったのか。私はてっきり『あさみず、ひより』は変わった愛称だと…」

どんな愛称なんだよ…と突っ込みたかったけど、相手の立場がよりはっきりわかったのでやめとく

「…どちらで呼ぶのが普通なのだ？」
「あ～…」

友達とかだったら迷わず「ひより」って呼んでもらうけど…、皇帝は友達じゃないし…男の人だし、何となく上司っぽいんで…

「『あさみず』が普通だと思います」
「そうか…ならば『あさみず』と呼ぼう」
「ありがとうございます。陛下…」

あたしがそう言うと…皇帝は機嫌よく先程の話題に話を戻した。

「…どうしても『あさみず』は謝礼金を受け取らないのか？」
「受け取りません」
そこは譲れない。
皇帝は何か納得がいかないみたいで眉間に皺を寄せて何か考えてる様子だったけど、その顔が一瞬でにっこり笑顔に変わった。
…嫌な予感がする
「…それならば『あさみず』を我が国で保護しよう」
……はい？
…何だかとんでもない方向に話が向かってない？

9話　ウソも方便（後書き）

皇帝陛下の名前がようやく出てきました
私も長くて覚えられません…（苦笑）

閑話集を別で投稿しました
ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ６４９７ｗ／
１０話に１話ずつぐらい書けたらと思います

１０話　多重人格ですか？？

皇帝の言った言葉に固まったのも一瞬ですぐにフル回転で頭が働き出す。

…保護って何？

あの…生活保護とかそういう感じの物ですか？
それなら生活はやっていけてるし血税の恵みはいりませんけど…

ただ…何だかあたしの考えと皇帝の考えが違う様な気がする。
聞くのは怖いけど聞かないと話が終わらないので…頑張る。

「あの…保護って…」

「『あさみず』が両親が見つかるまで、この城に住むといい」

…え？

…城に住む？

「転移魔法が使えるという事は魔力もあるようだから、帝国魔術学院に通うといい。もちろん後見人には私がなろう」

…後見…人？…学校？

「それでは…すぐに部屋を用意」
「ストォォォップ！！！！！」

危ない！危なすぎる！！
皇帝の言ってる事を聞き取るだけで精一杯で思いっきり流されていきそうになった。

「い、いりませんっ！！保護いりませんっ！！」
「『あさみず』を一人で生活などさせられない。私の近くにいればいい」

…あたしの今までの生活を丸無視ってどういう事！？
しかもあたしには毒でしかない満面の笑みで「私の近くにいればいい」とか言うなぁ！！！

「ひ、一人じゃないから大丈夫ですっ！！」

ひぃ～っ！！！い、息苦しい…。
何か突然部屋の空気が減ったぁ！！

「…一人じゃ…ない？だが、両親は別れたままだと…言わなかったか？」

こ、こ、コワイィィィ！！！
な、何で急にこの人怒っちゃってんの！？
あたし変な事言った覚えないんですけど！！

「…もう一度聞こう。…今は一人だな？」

何で断定？と思ったけど、恐怖で思わずコクコクと頷いてしまう。

…だって怖いんだもんっ！！

「ならば…一人じゃないというのはどういう事だ？」

「こ、皇帝の寝室からとある村に飛びまして、そ、そこで大変お世話になった人がおりますっ！！」

「…男か？」

何でそんなに地を這うような声出すんですか…。

び、美形が凄むと凡人の3割増しだって知ってます！？

「夫婦でぇすっ！！！」

「声出せぇぇぇ！」みたいな感じで『で』が思わず声裏っちゃったじゃないか…。

…これ何の訓練ですか？

「夫婦？」

あぁ…ちょっと空気が戻ってきた

…何だったの今のやりとりは…死ぬかと思ったわ。

「夫婦というのは？…拾われたのか？養子にでもなったのか？」

こ、この人さっきから質問多くないですか？

せめてちょっとあたしにも息継ぎの時間を下さいっ！！！

って、もぉ～超メンドクサイ…ほっといて下さいって逃げるのは無しですか？

ちっ、しまった。手配書で所在地ばれてるじゃん…。

でも、何でたまたま寝室に転送してきた子供…にこんなに手をかけようとするの？まぁ…ほんとは子供じゃないけど…。

初めての寝室で見た事が無かったら完全に「…え？この人ロリコン？」って疑惑が浮かぶ行為だよ？

まぁ…そうじゃないにしても、迷子の子供を保護するってどれだけ子供好きなの！ってちょっと心配になってくるわ…。

自分で言うのもなんだけど、一つの国ともなればあたしみたいなストリートチルドレンがたくさんいるわけでしょ？それを全部保護してたら国潰れるよ？

そんな事を考えてたら皇帝が全然的外れな事を言った

「転送魔法で何処かにいこうとしても無駄だぞ。きっちり全て話してもらうからな」

「え？…どうして」

魔法の事なんて頭の中からスパッと消えてたけど、皇帝に言われて思い出した。それにしても無駄ってどういう事？

この部屋特殊結界でも張ってんの？そんな感じしないけど…

「『あさみず』の背中には魔法封じの術がかかってる。私より魔力が優れていない限り、無効には出来ない」

あの最初に貼られた紙！！

でも…よかった。お馬鹿とか書かれてなくて…

んでもさ…こんな事言うのもなんだけど…、多分、多分だよ？

あたし今でも普通に魔法使えそうですけど…

１０話　多重人格ですか？？（後書き）

閑話集を別で投稿しました
ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ６４９７ｗ／
１０話に１話ずつぐらい書けたらと思います

11話　髪は女の命です

多分魔法が使えるっていうのは、それなりの確証があって…まずあたしの頭。

これ実は魔法がかけてあったりする。あたしの髪は本来は黒髪のど直毛なのに今は茶色のフワフワ髪。ライザさんにこの世界では黒髪が珍しいという事を聞いてとにかく目立ちたくなかったあたしはまず髪を変えた。

ざっくり言うと髪の構造と同じ3層魔法構造で今の髪型は出来上がってる。

『メデュラ』と言われるたんぱく質と脂質の塊でこれが髪の張りを司るものなんだけど、まずそれを細〜くする事によって直毛がふんわり毛髪に変わるのですよ！

その次に『コルテックス』と呼ばれる硬ケラチンというアミノ酸の塊があって、この中のメラニン色素をいじる事で好きな髪色に早変わり！

『キューティクル』これ重要！細胞の板！これがしっかりしてないと天使の輪は出来ませんからね！強化！強化！

髪の成分さえ知ってりゃ魔法で簡単に操作出来ちゃったんだよね〜。

この魔法が組み込まれた魔石をピアスにしているのであたしの髪はサラフワ髪になっているのだ。

傷めずに髪を弄れるなんて、素晴らしい。

ひそかに昔からこの髪型に憧れていた事は内緒だ。

さすがに長さはどうにもならないので思い切って切った。いいよね、軽い髪！

切るなって強制する奴がいなけりゃ元の世界でも肩下のこれぐらいの長さがベストだと思う。腰下の黒髪なんて重さ半端ないっすよ。

…髪の構造なんてどこで知ったのかって？ビバ理系！

ふふ…無駄に顕微鏡と格闘してなかったですからね。

いや…元の世界では全然無駄でしたけどね…何せ営業職ですから。

まぁ…ぐだぐだ説明したけど、そんなあたしのピアスは電池タイプじゃなくて魔方陣だけが組み込まれた物でずっとあたしの魔力を使って発動してるから、本来なら背中の紙を貼られた時点で黒髪に戻んないと変なんだけど…指先で掴んだ髪は今までと一緒の茶髪…

…？

…あたし、皇帝より魔力あるって事ですか？

いや…まさかそんな…ね。

きっとこの魔方陣が間違ってるか、皇帝の魔力が…そんなないだけですよね？

いや…失礼な事を考えてる自覚はあるんですけどね？

そうじゃないとすると…え～無理。

考えるの止めよう！
そして今魔法を使うのは止めよう！

「あ！ほんとだ！！魔法使えないやっ！！ははっ！！」

ちょっと時間が空いたけど、とりあえず答えてみる。
怪訝な顔で皇帝がこっちを見てるけど気にしない。

「いや～こんな魔法もあるんですね～。びっくりです。凄いなぁ～まだまだ勉強不足ですね。あたし…」

…これは本音。まだまだあたしの知らない魔法がたくさんある。

…でも、希望が持てた。

あたしの知らない魔法があるって事は、それだけあたしが元の世界に帰れる可能性が広がったって事を意味する。

「これは少し上級魔法だからな…」

皇帝の言った言葉にそりゃあたしには無理だわ…と納得する。
あたしの愛読書「はじめてのまほうのつかいかた」だし…ね。後は独学で全部やってきたから想像出来ない事は形に出来ない。

「上級魔法…」

それを使うのに必要なのは知識。それを得る為に必要なのは文字力。

……分かってるけど、道のりは長いなぁ。

「……だろう。違うか？」

突然聞こえてきた声に体がびくっとなる。

…しまった。ここは皇帝の部屋であたしは闖入者だった。

あたしが自分の世界に浸ってる間に皇帝は何か喋り続けてたらしい。

どうしよう…聞いてなかったんですけど。

「え～…っと」

「どうだ？」

どうだと言われましても…何の事やらさっぱりで…

さっきみたいに「城に住め」とかだったら安易に肯定の返事も出来ないし…

「そ、その件につきましては…後ほど…しっかり考慮させて頂いて…」

日本人秘儀！グレーゾーン！！

「考慮も何も無いだろう…。親に会いたくないのか？」

えぇ？何の話だったんですか！？
全く持って話のつながりが見えないんですけど！？

「いや…親には会いたいですけど……」

「両親を捜すのに魔法ほど効果的な物はないだろう。あさみず…君のご両親の情報は君自身しか持ちえない。それならば調査の為には君自身がもっとその技術を磨くしかない」

「はい…それはごもっともです」

いや、それは重々わかってるんですけどね。
いかんせん道のりが長いんですよ…

「ならばやはりあさみずは帝国魔術学院に通うべきだ」

「陛下…そろそろお時間が…」

「うわぁっ！！！」

突然、扉付近から掛けられた声に飛び上がった。

えぇぇぇ！！！
いつから居たんですか？！貴方！？
そしてどちら様ですか！？

11話　髪は女の命です（後書き）

この回から予約投稿になります
よろしくお願いします

12話　猫の威嚇は怖いんだぞ！

あたしのナゾはナゾのまま、皇帝と突然男は会話を続けてる。
二人の会話を要約すると『ガース国の使者との謁見中にあたしが現れて、皇帝はその人をほっぽり出してここに駆け込んできた』らしい、皇帝陛下の返事が「放っておけ」なんかの切り捨てる言葉が出てきてないとこを見ても重要な案件だったのではと推測出来る。

……って駄目じゃんっ！！！！

重要度は関係なくても社会人としてそういうのはよくないと思うよっ！！
しかもそのガース国ってテリサン村の隣の国じゃん！揉めたらどうすんのさ！！
一番最初に被害受けるのテリサン村の人じゃないかっ！！！

「あ…あの…」

とりあえず声を掛けてみるけど、男二人は全く気付いてくれず、それどころかどんどん話がずれていって「戻ると言った・戻るなんて言ってない」の会話をヒートアップさせていってるようで…
あたしは側にあった適当な紙を丸めると肺いっぱいに息を吸った

「そこまでぇぇぇぇ！！！！」

二人目掛けて自分の出せる最大の声を出すと、呆気にとられこちらを向く二人の顔はなかなか見物であった。

「そんな「言った・言わない」の水掛け論してもしょうがないでしょうが！皇帝！！」

「な、なんだ」

「貴方、一国を統べる王様でしょう！こんな私事に左右されてる場合じゃないでしょうが！！キチンと自分の責任を果たしなさい！責任をっ！！！」

あたしの突然の言葉に皇帝は「うっ」とブロンズ像のように固まってしまった。突然男も片眉を上げて「おや？」という顔でこっちを見てるがそれにもちょっとムカついた

「あんたも側近なら頭使え！！下らない私事に皇帝を煩わせるんじゃないわよ！！」

「あ…あぁ」

今度は皇帝がこちらを見て「くくっ」と笑っている。

それを見てあたしは皇帝に対して眼差しをきつくした。

「さっさと皇帝は元の場所へ行きなさいっ！！」

「いや…しかし…」

「シャーーーッ！！！！！」

あたしが猫のように威嚇すると、皇帝は慌ててソファから立ち上がって扉へと向かう。だけど扉の前で立ち止まるとふっとこちらを振り返った

「すぐ戻る。私が戻るまでここに居るように…」
「そんな事よりさっさと行きなさいっ！！」

あたしが噛み付くように言っても皇帝はその場から動こうとはしなかった。ただ俯いて聞こうとしなければ聞こえない小さな声で

「…頼むから…居てくれ」

と言った。そう言った皇帝の顔は俯いてて見えなかったけど、ぎゅっと拳が握られてるのだけが見えた。そんな皇帝を見てあたしの怒りも急速にしぼんでいく。

え～っと…なんだか犬を捨ててる気になるのはあたしだけですかね…

…散々「う～」とか「あ～」とか誤魔化してみたけど…結局口から出た言葉は「……居るようにします」だった。

それを聞いて皇帝はぱっと顔を上げると、にこりとあの神々しい笑みを浮かべた。

いや、だからその笑顔はあたしには毒なんだって…
自分の中にある罪悪感がどっと押し寄せてくる

いや…だってあたし…居るようにしますって言っただけだし、あたし的には「（皇帝が帰る時間頃に）居るようにします」ってわけで、ずっとここに居るとは言ってないから一度家には帰ってもいい

よね？
いつ戻るかわかんない人をこんな上品な場所で待つって…あたしにとっては罰ゲーム以外のなんでもないもん。それにそろそろお昼でしょ？ミレーヌも心配だし、お腹も空いてきたから、ライザさんの昼食食べに一旦家に帰りたかったりするじゃない…。皇帝が戻りそうな時間にまた来ればいいだけで…ね？

「行ってくる」
「…い、行ってらっしゃい」

にこやかな皇帝が扉を出て行くとあたしは一つでっかいため息を吐いた

「…つ、疲れた」

最後のやりとりだけで疲労困憊になった。

「くっくっく」
「うわぁ～！！」

あたしの横から聞こえてきた含み笑いにまた叫び声を上げてしまう。

と、突然男っ！？あんたも出て行ったんじゃなかったの！？

どうしてか突然男はまだあたしと同じ部屋にいて、しかもあたしの隣で口元を手で覆って笑っている。

「あぁ…すみません。あんな陛下を初めて見たものですから…」
いや…別に笑ってる理由なんて聞いてないし…
「…こ、皇帝と一緒に行かなくていいんですか？」
「えぇ、外には別の側近が控えておりますから」
「……」
あたし的には一緒に出て行って貰った方が嬉しいんですけど…あ、もしかして
「見張りですか？」
「見張り？」
「えぇ…あたしがこの部屋で悪さしないように…」
そりゃ闖入者だから信頼ないのは当たり前だけどさ…なら待っとけなんて言うなよ！って言いたくなる。
「あぁ…違いますよ。そんな疑いはかけてません。幼児文字しか読めない貴方にこの部屋で何か出来るとは思いませんから」
一言多いなこの突然男は…またそれが的を得てるから更にムカつく
「じゃあ何で…」
「貴方に興味があったというか…いや、違うな。皇帝が興味を持った貴方に興味があるんですよ」
…やっぱり一言多い。
別に興味がある事に代わりないんだから違わないでしょうがっ！
！「皇帝が興味を持った」部分はあっても無くてもよくないですか

!?

それにしても、突然男…貴方は誰なんでしょうか？

……いい加減名乗って貰えませんかね？

12話　猫の威嚇は怖いんだぞ！（後書き）

シュビがまだ名乗れません。

たくさんのお気に入り登録ありがとうございます。
ユニークも信じられない数字で…びっくりしています

お礼ではないですが更新頑張ります。

13話　オアシスは毒沼だった

あたしの怪訝そうな目には全く動じず、突然男は優雅にソファに座った。
落ち着いて見ると、突然男…貴方って……

何て普通の顔してるの～っ！

最近、メルフォスさんとかミレーヌとか皇帝とかその相手の美形女性とか…基本この世界の人間は顔が整っているので…その他大勢キャラの中で生活してきたあたしは若干、美に食傷気味。

そんな中のオアシス見つけた～！！！！

名前も分からないけど突然男！
素晴らしいっ！！貴方の普通顔！！

「あさみず、…座ったらどうですか？ずっと陛下が戻られるまで立ち続けるのはしんどいでしょう？」
「え…何であたしの名前？」
「……最初からずっと扉付近にいましたから」

えぇ！？
全く気付きませんでしたけど…何その存在感のなさ！？

…あれですか？この世界は美形度合いで存在感が決まるんですか？

「き、気付きませんでした…」
「まぁ…よくある事です」

…そう言った突然男の姿に影を見たのはあたしだけでしょうか？
ただすぐにその影も取り去って、こちらを向いてにっこり微笑まれた。

いい。いいよ！その笑顔！
神々しさなんていらないよ！素朴な普通の笑顔、素晴らしいっ！！

「お茶のお代わりを頼みましょうか」

突然男の笑顔に見惚れてると、彼がテーブルの上の茶器を片付け始めた。
ただそれを聞いた瞬間あたしのお腹がタプタプを必死に訴えてきて

「いっいえっ！！！もう飲み物は結構です！」

ソファにだけ座らせてもらったが、お腹をポンポンと叩いてアピールを忘れない

「あぁ…そう言えば、レヒアのジュースを7杯も飲んでいらっしゃいましたね…」

…残念だ。
顔はオアシスなのに…やっぱり一言多い…この人。

「…ところで、皇帝の側近って事はわかりましたけど、貴方はどなたなんですか？」
「失礼しました。私はガルフェルド帝国宰相シュバイリヒト・グ

ランロード・レイ・レングランドと言います」
「シュ…？」
「シュバイリヒト・グランロード・レイ・レングランド」

さっきの皇帝と言い、この人と言い…名前が長い！！！
…もう皇帝の名前思い出せないし…リュー…なんだっけ？

ちょっと思い出そうと努力はしてみたけど…無理っぽいんで諦める。

あぁ…他の事考えたら、宰相の名前忘れた…
昔から人の名前覚えるのは苦手なんだよね～…正直、皇帝と宰相の名前は一生覚えられる気がしない。

え～っと……シュ～グラ～……レンがついてたような？

あっ！……シュグラー！

……何か違う。
もう宰相でいい…。

でも宰相って…確か、国の偉い人じゃなかったっけ？

「え～っと…宰相さん。あの…あたしどうなるんでしょうか…」

「どうなると言うか…あさみずがどうしたいかによるんじゃないでしょうか？」

「あたし！？」

「ええ。君が帝国魔術学院に通うならばその手続きを取りますし、そうでなければ今後の事を多少話し合う必要がありますね」

あ～あの保護とかってやつですね…。

「あの…あたし結構自立してやっていけてるんで、保護とかいらないです」

「そうですか。ですが決定事項として諦めて下さい」

「はぃ？」

今、何と仰いました？

諦めろ…意味がわからないんですけど…

「陛下が貴方をこの国で保護すると口にした以上、それに我らは従うだけです。この国で陛下の勅命に逆らう事は出来ません。逆らう者達は下手すれば反逆者です」

は、は、反逆者！？

おぃおぃ、自分の無実を証明しにきて、ほんとの犯罪者になるとかってどうなの！？

…それに何か宰相の言い方が気になる。『者達』って複数形ですよね？

「え～っと…それってあたしが皇帝を無視してこのまま帰れば、住んでる所にも迷惑がかかるって事ですか？」
「説明前にご理解頂けて何よりです」
…褒められても全然嬉しくないんですけど。
「…つまりあたしにどうしろって言うんですか？」
「陛下の御心のままに…」
…何だそれ。
あたしは皇帝のおもちゃじゃないっての！！！
そう思いながらあたしはさっきの皇帝との会話を頭の中でリロードする。
彼はあたしを保護するのは考え直してくれそうだった…でも帝国魔術学院には行けって何度も言われた
「……つまり、あたしは帝国魔術学院に通う事になるんですね」
「…やはり貴方は頭の回転が速い。陛下とのやり取りといい、とても１２歳とは思えません。ニホンという国にちょっと興味が出てきましたよ」
「ニホンは関係ないし…あたしじゅう…」
「…じゅう？」
やばい…もう少しで「１２歳じゃないし」って言っちゃうとこだった
「じゅう…何ですか？」
「え～っと…「十分苦労してきてますから」」

若干、苦しい言い回しだとは思ったけど、宰相は「…そうでしたね」って納得したみたいだった

「では、魔術学院の説明をしましょう」

「……ヨロシクオネガイシマス」

あぁ…宰相がまたにっこり笑顔を浮かべている。

オアシスはどうやら毒沼だったらしい。

私、安佐水　日和は２２歳にて迷子になり、２５歳にて学生に戻る事になりそうです

13話　オアシスは毒沼だった（後書き）

ようやくシュビの名前が出てきました
陛下ラブの氷の宰相具合が発揮できましたでしょうか？

１４話　「前門の虎、後門の狼」隠れていたのは雌ライオンでした

一通り宰相から魔術学院の説明を聞いた感想は、はっきり言って

「…めんどさいこの上無く、超厳しいですね」

学院自体は朝の９時から午後６時までらしい…いやいや、１２歳をどれだけ拘束するの？無茶でしょ？このカリキュラム…まぁ…休憩は２時間あるらしいけど…

この学院だけでも、かなりゲンナリなのにさらに輪をかけて全寮制の寮がハンパ無い。

何？朝５時起床って…５時に起きて何すんの？
…門限６時半って何ですか？学院６時までなんでしょ？

しかも寮で自主学習時間って何？…習い事？んなもんいらねぇ～！！！

それを淡々と語る宰相も人じゃない…この似非オアシスめ～～～～！！！

「…い、行きたくない…なんちゃって」

何で社会人で悠々自適な生活からこんな窮屈な世界に逆戻りせにゃならんのだ！！
基本怠惰人間なので、断固として反対…

「ならば城に住みますか?城ででしたら礼儀作法・貴族常識・ダンスなど社交界に出られる程度の嗜みは必需となりますのでみっちり教育させて頂きますが…」

「前門の虎、後門の狼」を身を持って体験…全然嬉しくないんですけど…。

嬉しくないけど、どうせ食われるなら身になる物のがいい。

「ま…魔術学院でお願いします」

「では、すぐに手続きをしましょう」

「ちょ、ちょっと待ってください。あたしにも今までの生活があるので、それをきちんと整理したいんですけど…お世話になった人達に挨拶もしたいですし…」

とにかく地獄への道は出来る限り先延ばししたい。

あぁ…出来ればドロンしたい。

テリサン村でゆっくりのんびりしたい~~~~!!!

「…それもそうですね」

宰相は手を口元に持っていって少し考えてるような感じだった。

頑張れっ!!あたしっ!!もう一押しだっ!!!!

「では城から連絡を向かわせましょう」

おぉい!

それじゃあたし帰れないじゃないですかっ!?

どうやって宰相を説得しようかとあたしが考えてる間にバーンとまた扉が開かれ、そこにはさっき出て行ったと思った皇帝が立っていた

「あさみず！」
「あ…皇帝」

…どうやら宰相と話してる間に大分時間が経ってたらしい

目の前の宰相は皇帝の姿を確認するとすぐにソファから立ち上がり、横に避けて頭を下げた。あたしも座ったままだったけど釣られて頭を下げる

「お帰りなさい」

無意識にあたしから出た言葉に皇帝がこれでもかというぐらい笑みを深くする。

いや…単なる癖なんですけど？

「今戻った。話は進んだか？」
「はい。魔術学院に通って頂く了承を得ました」
「そうか。よかった」

…いや、了承って…ほぼ脅迫でしたよね？拒否権…何ですか？それ？

口まで出かけた言葉は宰相の笑顔を見て瞬時に飲み込んだ
彼を敵にまわすのは得策じゃないですね～

「…アリガトウゴザイマス。ガンバッテベンキョウシマス」

…心が篭ってないのは許してください。

「？」

「…あさみずは魔術学院の厳しさを聞いて少し不安になったようです」

「そうか…だが、私がいる。私が守るから何かあったら言いなさい」

皇帝が手を広げてくれているけど…

え～～～っと、これは…あたしどういう反応すればいいんですかね…

対応に困って焦っていると宰相と目が合った。

…はぃ？

どうみても首を皇帝の方向にくぃくぃと振っている。

え？何ですか？それ…

……あたしに皇帝の胸に飛び込めと？

それあたしの…死亡フラグですか？
飛び込んだ瞬間に不敬罪とかでメッタ切りに合うんじゃないでしょうか。

どきどきしながら宰相を見るとだんだん眉間の皺が深くなっていくのが見える。そのまま視線をギギギと動かし皇帝を見ると、希望に満ちた目でこちらを見ている。

「え～～～～っと…」

ぎゃ～！！前後の虎と狼が一緒になって襲ってきてます！！

あたしが冷たい汗をだらだら流しながら究極の選択を迫られている中、また扉の方が騒がしくなったと思ったら扉がさっきの皇帝に負けない音で開かれた。

た……助かった！

とりあえずこの状況から救いだしてくれるなら何でもウェルカム！出来れば急用とかで皇帝、もちろん宰相込みで引き取って欲しい

「エリルトーラ様！お待ち下さいっ！！」
「陛下っ！！！！」

駆け込んできたのは女性だった。
それを見た宰相は大きく舌打ちをし、皇帝は今までの笑顔はどこにいった？って感じで無表情で絶対零度な怒りを醸し出してる。
そんな雰囲気を全く察していないのか、飛び込んできたエリル…

?さんはまっすぐにあたしに向かってくる。

あれ…この人どっかで見た事あるんだよね?

思い出せないけど、向かってくる彼女の表情を見て思った

虎と狼を押し退けて雌ライオンがやってきた…

１４話　「前門の虎、後門の狼」隠れていたのは雌ライオンでした（後書き）

エリルトーラは皆様のご想像の通りだと思います

日和がテリサン村に戻れるのはいつになる事やら？です

15話　嫉妬の対象

あ～…エリル？さん。
せっかくの綺麗な顔が雌ライオンから般若と化してますよ。
怖い…夢に見そうです。

猛然と迫ってくるエリル？さんを見て、このままじゃ確実にフルボッコな目に合いそうな予感がしたので、とりあえず慌てて人身御供を立ててその影に隠れてみた。

「どきなさいっ！！！宰相！！！」
「……あさみず…色んな意味で仕返しですか？」

エリルさんの前に押し出された宰相が口を引くつかせながら振り向いてくる。
はて…あたし的にはナイスチョイスだと思ったんだけど…

「え？だって彼女は嫉妬の権化でしょ？火に油注ぐような事してどうするんですか！」

どう見てもエリルさんの瞳は嫉妬の目に燃えていらっしゃるので、皇帝と宰相で比べるとまさか嫉妬の対象が宰相であるわけが無く…皇帝の後ろなんかに隠れて引火されたら困るでしょう

「……別のところで引火どころか大爆発を起こしてますよ」

蒼い顔の宰相が見つめる先を辿って、彼の影に隠れたまま後ろを振り向いてみる…。

ひぃぃぃっ!!悪魔がいた…悪魔が!!

すぐに顔を元の位置に戻し、宰相に話しかけたが余りの恐怖に思わず小さな声になってしまう

「な、何で皇帝あんな怒ってるの!?」

「わかってないんですか!?」

驚愕な色を浮かべた大きな目で宰相があたしを見つめてくる。

いや、エリルさんの嫉妬は分かるんですよ?

皇帝との寝所に突然現れたらしい手配書の女がまた皇帝に接触してるなんて聞いたら、そりゃ飛んで来ると思います。それは皇帝への思いがあってこそですよ。素晴らしい!!

なので穏便に受け流すべくあたしは宰相の影に隠れたんですけど…

何ですか?後ろの伏兵は……全然身に覚えないんですけど!!!

「あ…」

つまりあれですか?この皇帝の怒りは「何隠れてるんだ?俺の好きな女に心配をかけたのだから素直に殴られろ!」ってやつですか?

えー…出来れば痛いのは御免被りたいんですけど、男兄弟の中で育ったんで、女性に殴られるぐらいなら…我慢出来る範囲です。

まぁ、アポとらずにこの部屋を直接訪れたのは事実ですから……

一回は我慢ですかね

あたしは覚悟を決めると宰相の影からゆっくりと前に出て、直立した

「…いい覚悟ですわね」

振り上げられる手を見たけど…そ、そんな振り上げますか？っていうぐらい振り上げられてたので相当の痛みを覚悟した。

思いっきり痛いのは一瞬！！耐えろあたし！！！

ぎゅっと目をつぶって衝撃に備えた。

…けど、いつまで経っても予想した痛みが来ない。

…あれ？

恐々と薄目を開けて状況を確認してみると、あたしの前には大きな背中。それはさっきまで隠れてた宰相の背中とは違い…

「…皇帝？」

しかも皇帝の後ろから前の状況を確認して唖然とした。

「離しなさいっ！！宰相！！私を誰だと思っているのですか！！」

「エリルトーラ伯爵令嬢ですかね…」

え?何でエリルさんが拘束されてるんですかね…しかも宰相に拘束されてるし、皇帝は皇帝で悪魔から魔王へと表情を進化してらっしゃいます!!

え〜っと…何がどうなってるのでしょう…

あたしは現状を把握するべく周りの会話に集中した

「側室一の位の私を公爵位呼ばわりするとは…宰相、身分をわきまえなさい!!!」

「すでに解散させた後宮での位など何の役にも立ちませんよ。私は…筆頭侯爵。貴方が太刀打ち出来る相手でないのはわかっているはずです。『エリルトーラ伯爵令嬢』」

相手が逆上する中で静かに宰相が『エリルトーラ伯爵令嬢』と繰り返した時の声色に思わずトリハダが立つ。エリルさんもそれが分かったのか、話をする相手を変えてきた

「陛下っ!!!私を手に掛けたこの者をどうか罰して下さいませっ!!」

宰相に拘束されながらも、必死になってエリルさんは皇帝に訴えかけてくる。

その時「陛下っ!」と叫ぶ声に自分の記憶の中の彼女が誰だったかを知った。

「あの時…皇帝と寝室に一緒にいた女性(ひと)…」

あの時はベッドの灯りだけでは、暗くてしっかりと顔はわからな

かったが、『陛下っ！！早くその者を殺して下さいませっ！！』という記憶の中にある彼女の声と今の『陛下っ！』の声がリンクした。

ただ、あたしの呟きは誰にも聞こえてなかったようで、会話はあたしを無視して進んでいる。慌てて思考を会話に戻し、キャッチボールを見ているように会話の先に目を追わせた。そしてその先にあった皇帝の凍えるような冷たい視線に思わず彼から一歩距離をとってしまう。

「何故だ？…解散を言い渡して3年も経っているのにいつまでも後宮に居座るそなた達の為に何故私が動かねばならないのだ？」

「へ…陛下！？」

「解散命令に従わぬそなた達が後宮で豪華な生活をおくるを放置していたのは、一重に今までを労っての事。素直に親元へ戻れば、我が側室であった事実に再び良縁に結ばれたであろう…それを…まさかあさみずを襲うとは…」

「……あさみず」

あたしはエリルさんに人を殺さんばかりの視線を向けられた。

そんな憎憎しい視線は生まれて一度も受けた事がなかった。

１５話　嫉妬の対象（後書き）

前半おちゃらけ、後半、真面目と混同してしまいました。

８話の日和の年齢話部分を改定しました

16話　腹が減っては戦…の前に死にそうです

いや…あのね。
これはどうみてもとばっちりでしょう?

「あさみず!!!お前のせいでっ!!!」
「えぇ!?」

いやいやエリルさん。
皇帝の言ってる事をよぉ〜く考えて欲しい。全部自分達のせいじゃないですか?
しかも怒りをぶつける相手間違ってませんか?…怒りなら最初に理不尽な命令をした皇帝にぶつけて頂きたいんですけど…

そして果てしなくあたしにとって皇帝云々はどうでもいいです

…それよりお腹が空きました。
限界越えてます。
死にそうです。
これはもう早く解決して食事にありつかないとヤバい領域です。

一番てっとり早く解決出来る方法な気がしたんで、とりあえず無言であたしの目の前の背中を押してみる。

「…?…あさみずどうした?」
「…とりあえず一発ぐらい叩かれるのがよろしいかと」
「…え!?」
「だって、側室ってようは奥さんの事でしょう?相手が納得して

ないのに権力使って一方的に離縁って…それはヒドいと思います。
そんな男は最低です」

目を見開いて驚くエリルさん。あたしの発言に固まったままの皇帝と宰相だったが。いち早く立ち直ったのは呆れた溜息をついた宰相だった。

「…あさみず。皇帝が側室を持った理由はただ単に子を残す義務の遂行です。皇帝がその義務行為をきちんと果たしていた以上、10年という月日がありながら子を成せなかった彼女達は側室の仕事を果たさなかったのですよ。それに対して何らかの決定を下すのは当たり前の事。その例外対象なのは正妃だけです」

宰相の言葉にエリルさんがぎゅっと唇を噛む。

…何てややこしい貴族世界。
そして、どうでもいい世界。

宰相の話を聞いて、彼女達がそれを理解した上での婚姻だという事はわかったけれど、ならその後の命令に従わなかったのも罪とわかった上での事らしく…

「法で正妃だけは皇帝自ら愛した者を選べます。我が国では子を産んだからといって正妃になれるわけではありません。もちろん継承者の位も産まれた順ではなく正妃・側室一位・二位と続きます。正妃がずっと空位の時もあります」

…別に聞いてないし、聞きたくないし、聞けば聞く程、面倒くさ

さが増すし。

…というか、別にそんな『リアル大奥』豆知識を知りたいわけじゃないんです。

あたしはとにかく自分のお腹の為に解決して欲しいだけなんです!!

あたしは無関係だと誰か証明して下さい!!

すぐ村に帰るのが無理なら、せめて食事を下さい!!

「…あさみず。私は義務だとしても、彼女達を不当に扱った事など無い。家柄によって地位の高さはあったが皆平等に扱っていた」

…いや、それも聞いてませんから。

あたし全然そんな事気にしてませんから!!あたしが今気になるのは自分の空腹だけですから!!

何、この難局…さっきの皇帝の腕の中に飛び込むかどうかの方が何倍も簡単だった

フル回転でお腹の為に脳みそを働かせこの事態を打開しようとするけど、上手くいかず。深く考えれば考える程、お昼抜きのまま現状にいたる事など空腹な事しか思い出せない

…駄目だ限界だ。

『ぐぅ～』

思ったのと同時にあたしのお腹が盛大に鳴った。

だって仕方ないじゃないですか！！

ここに来るまでに転送魔法でかなりのエネルギーを消費してたんですよ？宰相と二人の時にすでにお腹が限界だったのに、帰れる策を微塵も感じさせない脳みそにお腹が反乱を起こしても仕様がないと思うんです！！

…お茶菓子ありましたよね？

あたしの視線はもうテーブルの上にある上品そうなお菓子にロックオンされていて、それ以外の事なんてどうでもよくなっていた。

…視線で殺す？上等です！！

このままだとそれより先に空腹で死にますからっ！！

人間、極限まで追いつめられるとどんな事もへっちゃらしく…

一度たがが外れたあたしはとにかく栄養の補給を求め、ソファにどかっと座り目の前の茶菓子にカブリついた

あたしの突然の行動は残りの３人の空気を一変させたらしく。

「……あさみず」

宰相に話しかけられ、あたしはもしゃもしゃ口を動かしながら三

人を見る。

…何ですか？その3人とも哀れむ様な見守る様な瞳は…

「……食事を運ばせよう」

「私が伝えてきますわ…」

「ならば…その後、私が宮まで送りましょう」

皇帝・エリスさん・宰相の今までの雰囲気は!?という突然の行動にあたしは口を動かしながら頭に疑問符をつけたけど、とにかく食事にありつけそうなのでひたすら目の前の茶菓子を宰相の分まで完食したのだった。

１６話　腹が減っては戦…の前に死にそうです（後書き）

自宅のｎｏｔｅ　ｐｃが調子が悪くなり、投稿が少し遅れました

早くラブ要素を入れたいんですけど、どうも日和の準備が整いません（苦笑）

17話　昼ドラ渦巻く城事情

宰相とエリルさんが一緒に出ていってから数分で部屋の扉がノックされた。皇帝の返事とともに扉が開けられ、部屋に運び込まれる大量の食事にあたしは圧倒されてしまう

「はやっ！！」
「…そうか？」

いや皇帝…わかってないようですけど料理ってもっと手間のかかるものなんですよ？
並べられる食事の中に普通に手の込んだ煮込み物とかありますし…多分魔法で時短調理した物なんですかね？出来れば後で厨房を覗かせて頂けるとライザさんにいいお土産が出来そうな気がします

まぁ…それよりも今はこの空腹をどうにかしないと頭も働いてくれないですけどね。

「…食べてもいいですか？」

まだ並べられてる途中だけど、いい香りが立ち込めていて我慢の限界です
いつの間にか向かいに座る皇帝に視線を向けるとにっこり微笑んでくれる

「どうぞ。…そんなにお腹を空かせていたとは…すまなかった」
「いえ…では、いただきます！」

いつもの習慣で手を合わせて挨拶すると、あたしはとりあえずたくさん並べられたフォークやナイフから一番使いやすそうなフォークを選んで目の前の肉にぶっ刺した。

これでもかというぐらい大口で一気に頬張ると口中に香ばしい味が広がり、そのまま溶けて無くなった。

…有り得ない。感動…これは…

「激ウマ～～～～～～！！！！」

…ほんとにこの世界の料理はおいしい。

元の世界でも食べる事が大好きだったあたしは、料理の点で言えばやはりこの世界はパラダイスだと改めて実感した。

元の世界と同じような食材でも何倍も味が濃厚な気がする。

あたしはとにかくお腹が空いていたので、どんどんお皿を空にしていった

その度に「最高！」や「宝石箱きた～！」などの言葉を発していると、皇帝が向かいのソファで肩を揺らして笑いだした。

「にゃんでふか…（何ですか）」

…口の中に食べ物が入った状態だったから変な言葉になってしまったのは許して欲しい

「いや…すまない。そんなに美味しそうに食事をする人を久々に見たのでな…」

えぇ！？
こんなに美味しい食事を食べて、仏頂面とかありえないし！！！

まぁ…ここに並べられた物でもライザさんのグリュスリーフに敵うものは無いけどね

「それは失礼ですね」
「…失礼？」
「食事を楽しめない環境なんて材料を作った人にも料理を作った人にも失礼です」

こんな美味しい料理を感謝出来ない環境なんて…とんでもない！

「そうか…昔はいつも食事は毒が仕込まれているかと…緊張の日々だったからな」
「ぶっっ！！！」

思わず口の中の物が噴射されてしまった。

「ど、ど、ど！毒！？」
「昔の話だ。今は料理も全てチェックを入れてるから大丈夫だ」

いや…そういう事じゃなくて…
…食べ物に毒が含まれてるってどんな映画の世界ですか？

「…も、もしかして…皇帝はある程度毒の耐性をつけてたりするんですか」
「そうだな。即死するような強い毒に関してはある程度の耐性は

身につけている」

ひぃぃぃぃ！！

恐ろしい！都会っていうか城！愛憎劇から泥沼政治まで恐ろし過ぎる！！

…あたしは田舎ののんびりした空気の方がいいです…はい。

「普段は魔法である程度は防御している。だがもし相手の魔力の方が強かった場合に備えての措置だ」

…あたしは何もしてませんから。

皇帝より魔力が強いかもしれないなんて…脳の海溝に捨てましたから…

え〜

…食欲が激減しました。

まぁ…ほとんどお皿はキレイな状態だったんで、別名満腹ともいいますが…

少なくともこのお腹、3人前は食べた感じです。

「…ご、ごちそう様でした」

手を合わせて挨拶すると不思議そうな顔で皇帝がこちらを見ていた。

「さきほども手を合わせていたな？…それは何だ？」

あ～こっちの世界では食事の挨拶無いんだった…。
ずっとメルフォス家で過ごしてたからすっかり忘れてた。

「ニホンでの習慣だったんです」

「祈りか何かか？」

「いえ…祈りというよりは材料と料理を作ってくれた人への感謝の気持ちです」

「ほぅ…。それはいい習慣だな」

あたしもそう思います。
何事にも感謝の気持ちを忘れなければ、争いなんて起こらないと思うんですけどね…

ま、そんな事はいいとして…

「あのぉ～」

「どうした？」

食い逃げの様で凄く嫌なんですけどね…

「ところで、あたし…いつ帰れるんでしょうか？」

「……帰る？」

「はい。魔術学校に行くにしても一度村に戻りたいんですけど…」

「……村はどこだ」

「テリサン村です」

「っ！？」

…え？

…どうしてそんなに驚かれてるんでしょうか？

「…テリサン…村？」

えっと…あたし何か地雷踏みましたか？

踏んだ地雷がわからないんで対処の仕様が無いんですけど…

何だろう？

またまたピンチな様です

17話　昼ドラ渦巻く城事情（後書き）

取りあえず日和のお腹は満たされました

18話　田舎だと思っていたら、やっぱり田舎だった

えっと…テリサン村はそんな変な村じゃないんですけど…？
そんなドン引きされるような村じゃないですよ？いい人達ですよ！！

あたしがどうフォローを入れればいいか考えていると皇帝が言葉を続けてきた

「帝都からテリサン村まで…魔法以外の一番早い移動手段を使っても3ヶ月はかかる」
「あ…そっちですか…」

あはは～距離の事だったなんて全然勘違いしてました

「…転移魔法も…距離からして莫大な魔石を必要とするからそうやすやすと行える物じゃない」

…あれ？
転移魔法って距離＝使用魔力なんですか？

しかもテリサン村が以外と遠い事実にびっくりした。
…だから3年も帝都で手配書だされても村まで届かなかったんだ、なるほど納得。

村にある地図とか超アバウトだったもんなぁ…。
あの地図では帝都とテリサン村の間２ｃｍぐらいしか無かったけど…結構近所なんだって勝手に思って来ちゃったあたしはどうすれ

ばいいの？

…あの地図の縮図は信用性０っていう事がよくわかった。

…それより前にあの地図って正しいのか？

まぁ…その疑問は置いといて…

今はこの場を乗り切る事に全力を注がなくては…だって皇帝が返事を求めてじっと見つめてくる…これはかなりキツい

「あはは…」

「あさみずは…どうやってここまで辿り着いたんだ？まさかジュールに乗ってきたわけじゃないだろう？」

ジュールは知ってますよ？

この世界で一番早い乗り物で、見た目馬車なのに馬無し。動力は魔石らしく、よくガース国へ向かう旅人が乗ってる。

スピード的には車ぐらい出せるみたいだけど魔石の消費が凄まじいので、だいたい自転車ぐらいのスピードで走ってるのがほとんどらしい。

あれで3ヶ月っていうと…この世界の時間軸は元の世界とあまり変わらないので…単純計算で…

９０日×（一日の走行時間１０時間×自転車時速１５ｋｍ）＝村までの距離１３．５００ｋｍ

東京からマイアミまで行けちゃうよ…

改めて数字化すると…そんなに遠いのか…テリサン村…その距離を２ｃｍって…

もちろんあたしは帝都で地図を買って、あの地図は即座に廃棄する事を頭にメモした

しかし…どうしようか？
そんな距離を「普通に来ちゃいました…」とかありえないよね？

仕方ないけど…

「帝都近くまではこちらに用事のある方に転送魔法を便乗させて頂きまして…これってガース国からの中継地点の利点ですね。まぁ…そこからこの部屋へは自分の転送魔法を使いましたけど…」

嘘がどんどん増えていく度ににっこり微笑む顔筋が痛い…。
平凡に生きていく為とは言え、いつかお婆ちゃんに聞いた「嘘つく子は舌抜かれるばってんね」という言葉が頭を過り、思わず口をぎゅっと閉じた

「そういえば魔障壁は……城へはどうやって転送したんだ？」

…っち。
何かどんどん最初に心配したヤバい点をついてくるなぁ。

「え～っと…穴が開いてまして」
「穴！？」
「目印つけておきましたから後で直された方がいいですよ？」

え～…開けた犯人あたしですけど。一応すみませんと心の中で謝っておく。
皇帝が慌てて外に控えていた衛兵を呼んだから、至急直させるのだと推測。
その際に衛兵から耳打ちで何か言われていたが、こっちまで聞こえなかった

ここでこの会話をしてしまったからには城の中から転送魔法を使う事が出来なくなったので、とにかく一刻も早くこの城を出る事に専念しなくては

…早くおみやげも買いたいし。

「あの…そろそろ遅くなって村の人も心配してると思うのであたし帰ります」
「私にとっては最悪だが…あさみずにとっては朗報だ」
「朗報？」

皇帝が苦虫を噛み潰した顔でこちらを見ている。
朗報とは何ぞや？と視線で訴えかけてもなかなか話しだそうとしない

「…ほんとにこのまま城に残る気はないか？」
「ありません」

えぇ、即答です。
…魔術学院の事とか、とりあえず一旦帰って村で冷静に考えます

皇帝は一度大きく溜息をついた

「ガース国の使者が2時間後にテリサン村近くまで転送魔法で飛ぶらしい…それへの便乗が可能そうだが…どうする？」

…2時間後。

ぎりぎり夕食に間に合いそうな時間…って今御飯食べたとこだけど。

ライザさんの夕食は別腹なんで！！

「お願いします！！」

疲れてるし、自分自身で魔法使わずに済むならラッキー！！！

「ならば…約束して欲しい事がある」

…さっき見た捨て犬のような陛下にまたなった。

切に願う。

美形のこんな姿を邪険に出来る魔法があるなら今すぐ教えて欲しい

18話　田舎だと思っていたら、やっぱり田舎だった（後書き）

ようやく村へ一度帰還いたします！

19話　色んな意味で逃げれません

え〜っとこの沈黙は返事を求められているんでしょうが、先に内容を聞くわけには…

ちらりと皇帝を見てみるけど…やっぱりじっと捨て犬の目で見つめられてるだけで

やばい…やばすぎる。

このままじゃ普通にわけもわからず何でも頷いてしまいそうな気がする

…これ暗示魔法か何かですか？

あたし動物に弱いんです…というかメロメロで…

えぇそりゃもう！！元の世界の実家には猫が6匹、犬が3匹います。

全部拾ってきた子達で…あの子達どうしてるでしょうかね？…まぁ全員あたしより何故か弟に嫉妬の炎も燃やしてしまうぐらい懐いてましたから心配ないんですけどね。

がたんっ！！！

あたしが目を逸らして意識が外れたのを気づいたのか目の前の皇

帝が突然立ち上がった

「うぉっ！！」

「？」

いや…人間、突然の出来事だと癖が出るんですよ。
男兄弟の中で育ったあたしに「きゃっ！！」とか女っぽい事を求めても無駄です

「背中の封じの紙を取ってあげよう」

「え？あ…」

…あ、すっかり忘れてました。
そういえばあたしそんな物貼られてましたね

「…苦しかっただろう。魔力保持者は微力ながら魔力を常に使用しているから、それを無理に止められ体内に留められると、身体自体が何倍も重くなる」

「ど、道理で身体が何か重だるいなぁ～って思ってたんですよ」

全く元気です。
むしろ食事美味しかったんでいつもよりがんがんいけそうです！

立ち上がった皇帝があたしの後ろにまわると背中に貼られていた紙が剥がされた

「……」

身体軽くなるかなぁって……ちょっと期待したのに。

やっぱり何の変哲もない…けど、とりあえず肩を回す動作をしておく。

「気分は悪くないか？」

「あ…はい」

後ろの皇帝へと振り向いた瞬間、耳に感じた違和感。

あっ！

「これが…私からの願いだ」

とっさに耳に手をやると、そこにはいつも感じる金属の感触が無かった。

耳を確認した後、ゆっくりとした動作でそのままその手を頭へと移動させる

…もうひとつ自分に感じた違和感。

視線だけを移動した手元に向け、その手に握られた黒髪を見た

あたしの心臓が早鐘を打つ。

げげっ！もしかしてあたしが皇帝より魔法使えそうなのばれまし

た！？

「…髪の色が変わってただろう？魔力を封じても変わらないなら何かの媒体を使ってるに違いないと思ってね。身に着けている装飾品はこれだけのようだったからな…」

そう言って手にしたあたしのピアスを眺めている

「黒髪の方が君には似合う」

「……」

よ、よ、よかったぁぁぁぁ！！

どうやらピアスが魔力込みの魔石だと思われたみたいで、あたしが常に魔力を使ってた事はばれてないみたい…。

息も詰めてたみたいで、ふぅ～と大きく吐きだした。

ただ…ばれなかったのは良かったけど困った事もある

取られたピアス…あれ、チタンなんだよね。

あたし基本的に金属アレルギーだからシルバーとか１８金とかあれ以外の金属ピアスつけるとただれて酷い状況になっちゃうんで、

よく知らないこの世界の鉱石を身に着ける勇気は無い。だけど身に着けてないとピアス穴塞がっちゃうし。

「返してもらえますか」

無駄な気はするけど一応手を皇帝に差し出してみる

…どうして手を握る？

「約束として預かっておくよ。君が城に戻ってくれれば返そう」

「……」

「その代わりにこれを…」

言葉とともに握られた手首に虹色の細いリングのようなものが現れた。

「……？」

「これ何ですか？」

「魔力を結晶化したものだ。これを身に着けていると自然に体内から流れ出る魔力を集める事が出来る。テリサン村からの転送魔法もこれで行えるだろう」

そんな便利な物があるんですね…

「この髪色だと目立ってしょうがないんですけど…」

「その方が逃げる事が出来ないだろう？」

「……に、逃げませんよ」

テリサン村が思いの他遠かったんで…そのままばっくれようなんて考えてませんよ…。

うぅ…皇帝の笑顔が怖い。

「では、ガース国の使者に引き合わせよう」

握ったままの手を軽くひっぱられ立ち上がるとそのまま腰に手をあてられた

…こ、これは!!いわゆるエスコートってやつですか!?

思わずびくって身体がなった事は許してほしい。

だってあたしは根っからの平民ですから!

皇帝自らエスコートなんて名誉な事なんでしょうけどね…あたしにとってこの状況、羞恥プレイ以外の何でもないんです!!!

散々城の中をこの状況で歩いて人々の好奇な視線に晒され、挙句の果てには勝手にガース国の使者が控える部屋に乗り込んで…

「あさみずは私にとって大事な人だ。丁重に頼むぞ」

んぎゃー!!!

今からこの人達と行動するのに、これほどの妨害は無いでしょう!?

使者の人達の恐縮が…萎縮が…入り乱れてる
ただ一様に皆さん、厄介な頼まれ事を引き受けてしまったって顔に書いてますよ。

…色んな意味で痛い、痛すぎる。

…どうみても、この部屋の中でご機嫌だったのは皇帝だけだった

１９話　色んな意味で逃げれません（後書き）

毎日たくさんの方に読んで頂けてほんとに嬉しいです

明日のお昼は閑話２話目を更新します

２０話　『美形男が口にする言葉１０選』は望郷の念を呼ぶ

今の感想は…針のムシロです。
２時間この状態とかありえません。

一挙一動を監視されてるというか…
ちょっと手を上げただけで誰かが話しかけてきます

しかも

「どうかされましたか？」
「何かご不興でも？」

いや…別にただ伸びただけで…

「「申し訳ありません」」
「……」

目の前で頭を下げる使者の方々。

…あたしは魔王か何かですか？

皇帝は人に呼ばれて「ちょっと待ってて」と言い残し部屋を出て行き、それからずっとこんな感じ。

…非常に居た堪れません。

これでも涙が出るくらい説明したんですよ
あたしはあくまで平民だと…力説に力説を重ねた結果。

…なぜか魔王と化していました。

力説が仇となってさっき以上に萎縮されたらしい。

仲良くしようにも今日初めて会った人、しかも異世界の他国人なんていくら営業人間といえど越えるにはハードルが高すぎて…しかもとどめにあの皇帝の一言ですから

それならば邪魔にならないように黙って隅の方に座っておこうと思って移動したら、ずっとこっちの様子を伺われて、しかもあたしが喋らなければ…みんな喋んないし…重い！重すぎます！！！

とにかく何とかこの空気を打開しようと側に居た人に話しかけてみる

「後…どのくらいで発たれるんですか？」
「申し訳ありません！！！ゲートの使用許可が下りるまで待機状態でして…」

…全力で謝られました。

「……」
「……」

ガース国の人と見詰め合う事5分。
逸らされる事の無い相手の視線はだんだん潤み始めてる

…いや、泣きたいのこっちだし。

もう無理だと思って立ち上がったら、同時に扉が開いてそこに皇帝が立っていた

「あさみず、待たせたね」
「皇帝!!」

うん、今腕を広げてくれたら気持ちよく飛び込む。
実際は皇帝は腕を広げなかったので側に駆け寄るだけだったけど…

駆け寄るあたしを見て皇帝が破顔した。

その笑顔…毒だけど背筋にぞぞぞって何かが走ったけど、今は素直に嬉しい!
だからあたしも笑顔を返す

「使者殿、ゲートの準備が出来たのでご案内しよう」

良かった!!皆さん!!
苦行の時間は終わりを迎えました!!!

と振り向いたあたしが見たものはガース国の使者達が驚愕で固まってる姿だった

「…おや？」

そんなガース国の人にあたしの注意が向いている隙に、また皇帝の手が腰にあてられる

「うわっ！！！」

…しまった油断した。

「さ、あさみず。こちらだ」

この部屋に来た時と同様にさりげなくエスコートの形をとられてしまったあたしは、今更逃げるわけにもいかず素直に従った

…気にしない。気にしない
あたしは子供。子供なのっ！！
これはお兄ちゃんに手を取られてるのと一緒なのよ！

……

……何て思えるかぁ！！！！

何このさりげなさっ！！
歌舞伎町のホストでもこんなにスマートに女性を扱えないんじゃない？

…行った事ないから比べようはないけど、この女性！って感じの扱いがムズムズする

「…皇帝。あのこんな風で無くてもきちんとついていきますから…」
「女性をエスコートするのは男性の義務だ」

…出たぁ！
美形男が口にする言葉１０選に選ばれそうな台詞！！！
しかも皇帝、恐ろしい事にこの台詞が似合いすぎてる。

ムリムリムリ！！！

あたしのキャパをとっくに越えてます
普段のあたしならこんな台詞聞こうものなら、その台詞を吐いた相手とはとりあえず５Ｍほど距離をとるか、見下した笑いを送ってやるのに…

この城に来てからの自分は明らかにいつもの自分じゃない…

冷静？それって何？な状況なんて今まで陥った事無かったけど、

こう立て続けにキャパが決壊されると元の自分に戻れる自信ありません。

…とにかく一刻も早く村という名の避難所に戻って自分を取り戻さなければ。

城に来る時は精神を完全武装して望まないと勝てない事がわかっただけでもよし！

何に対しての完全武装？と聞かれても困ります

だって全て未知との遭遇状態ですから。

これが世に言うカルチャーショックってやつですかね？

この世界に来て3年。

初めて異世界に来た事に押しつぶされそうです。

極度のホームシック。

今、凄く元の世界に帰りたいです。

21話　死にかけてわかる事がある

目が覚めて見慣れた天井は今ではシミの数もわかるいつもの天井。

「……おぉ、生きてた」

神様…この世界に神様がいるかどうかは知らないけど、誓いますもう、二度と楽しようなんて考えません。

帰ってきたあたしの状態を一言で説明すると、酷い船酔い状態。クラブのファンキーソングばりで胃が踊り、脳が殴られた様にグラグラ揺れてる感じ

…他人の転送魔法がこんな永遠ジェットコースターだと思わなかった。

どおりでガース国の使者達が魔法を行う前に魔術師に眠らされていたはずだよ…と納得した。

あたしも眠りの魔法をかけてもらった

ただし皇帝自らにかけてもらったので…やっぱりあの人の魔法は効かなかった

なら自分で眠ろうと思ったのだけど、皇帝が魔法詠唱の最後に小さく付け加えるように言った爆弾発言で一気に目が冴えてしまった。

『…あさみずは嘘付きだな』

何が！？

年齢？出自？魔力？

どの事なのぉ～！！！！

自業自得だけど嘘をつきすぎてどれの事を言ってるのかさっぱりわからず…あたしは恐々としたまま転送魔法に乗せられ……サングラスをかける間もなく、光のジェットコースターを経験した

着いた場所はテリサン村のほんとにすぐ側、歩いて戻れる距離だったのが幸いで、こんな状態のあたしでも自分を保ってガース国の方達ときちんとお別れしました。あたしという気苦労の種が居なくなってほっとしたのか皆さん笑顔で去っていかれましたし、こちらの別れの際の多少の蒼い顔は許して下さい。

その姿を見送って自宅まで辿りついたのはよかったんですがね、すぐグロッキーでトイレに駆け込みましたよ…ふふ…

ミレーヌに事情を説明出来る状態じゃなかったんで、彼女は「きゃーっ！！」という叫び声を上げながら慌ててライザさんを呼びに行ったみたいで…というのも

そこからの記憶は無いです

で、今朝出たはずのベッドに寝かされています。

「夢……んな訳ないか…」

まだ少し残る船酔いと、頭に乗せた自分の左手首に光る虹色の腕輪を見て、深いため息をつく。

「…今、何時？」

部屋が暗いし、夜だという事はわかるけど…

「…気がついたかい？２０時を少し過ぎたところだよ」

暗闇から突然聞こえてきた声に一瞬驚いたけど、それは聞き慣れた声で、そちらを見るとその声の主の部分だけがほのかな明りに包まれている。そこには青髪の美男子が立っていた。

「…メルフォスさん」

「ミレーヌとライザもさっきまで居たんだが、宿の食事の時間になったのでね…」

ライザさんの宿は7時から9時までが食堂での夕食の時間なので忙しくなる

「あ～ご迷惑をおかけして…」

「ストップ。それ以上は言わないでいい。ひよりはこの世界では僕らの家族だろう？」

…涙が出てきた。

自分でもわからない内にすごくテンパっていたのだと思う。

手配書を見てから今日一日、訳のわからない混乱状態に陥って、まるでトリップした日のようで、考えないようにしていた異世界という現実を突きつけられて、あたしの中の何かが限界だった。

顔に乗せた手で目を覆いながら、嗚咽を必死に止めようと思うけどなかなか止まってくれない。

２５にもなった女がみっともない…

何とか泣くのをやめて冷静に今日の事を話そうとして、上手くいかない自分に余計に泣けてくる

「…ごっごめんなさい」

そんなあたしにメルフォスさんはベッドの側に立って上掛けの上からポンポンと優しく叩いてくれる。

しばらくその優しいリズムに身を任せると段々落ち着いてきて、嗚咽も無くなる

もう大丈夫ですという意味も込めて起き上がると、優しい笑みを向けてくれるメルフォスさんがいた

「落ち着いた？」
「……はい」
「何があったか話せる？」
「はい」

こくんと頷くとメルフォスさんは「じゃあライザ呼んでくるよ」と言って一度出て行った。

床に足を下ろしてみたら立てそうだったので、とりあえず部屋の明りをつけてお茶の用意をはじめる。
どうやって今日の事を話そうか考えていると、メルフォスさんがすぐにライザさんを連れて戻ってきて、あたしがお茶を煎れようとしているのを見て代わってくれる。

ライザさんを見ると目が真っ赤で…すごく心配をかけてしまったのがわかる

謝ろうとした瞬間彼女に抱きすくめ…抱き殺されかけた

「ら、ライザ…さん」
「ひよりぃぃぃぃ～～」

…号泣されてしまった
しかしマジでこのままでは死ぬ…

「ライザ…ひよりが死にそうだ」

メルフォスさんの苦笑が混じった声が、ライザさんの腕の力を弱めてくれた

「あぁ…ごめんよ。ひより…ひよりぃぃぃ」

ライザさん、さっきの状態でも見なかったお花畑が見えたよ。

身体を離されても手を握って目の前で泣き続けるライザさんを見ていたら、今度はこっちから抱きついてしまった。

止まった涙もまた溢れ出して二人一緒に泣いた

21話　死にかけてわかる事がある（後書き）

ストックが無くなった途端に体調を壊しました…ぐふ

22話　黒い謎解き

ほんとの子供のように心配してくれる二人にもう嘘はつきたくなかった。

だから手配書を前にしてメルフォスさんとライザさんに今日起こった事も含めて、あたし自身の事を全部話した。

どういう経緯で手配書になったというところでは、実は最初にこの世界に飛んできたのは皇帝の寝室だった事も話さなければならなかったのだけど…

…これはさすがに黙ってた事を怒られた

皇帝の魔封じが効かないと言った時にはメルフォスさんが驚愕し、12歳に間違われた話の時には、ライザさんがお茶を噴いた。

…わかってます。
実年齢を言った後ではその反応になりますよね…

そんな話もしつつ、自分が疑問に思っていても聞けなかった事を二人に質問する

「この国も含め、他国の皇帝も親を失った子を片っ端から保護するんですか?」

と尋ねたら、そんな国は無いと二人ともに全力で否定された。
昔はこの世界にも国家間の戦争や魔族との闘争があったらしく、孤児はガルフェルド国を含むどの国にも居て、それを保護する団体の話などは聞いた事があっても皇帝自ら後見人や保護などの話は聞いた事が無いと言われた。

つまりはやっぱりあたしの一件は特殊な訳で…

全部話し終わって訪れたのは沈黙。

「……」
「……」

メルフォスさんは何か考え込んでいる感じだし、ライザさんは黙ってメルフォスさんを見ている。
あたしからこの沈黙を破る勇気は無く、やっぱり話し出したのはメルフォスさんだった

「ところで日和はこれからどうしたいんだい？」
「はっきり言って出会い方も最悪だったし…どうして皇帝にこんなに関心を持たれたのか全くわからないんで…このまま帝都に行くのは怖い感じがします」
「あぁ。それについてはちょっと心当たりがあるんだけどね…」
「えぇ！？」

どうしてメルフォスさんに心当たりがあるの！？

あたしの説明で変なところがあったとか!?

ストーカーされるような変な行動した覚えないんだけど…

もしかしてあたしにこの世界で誤解されるような態度があったとか!?

「…な、なにかあたしに…悪いた、態度が…あったでしょうか」

「まぁ…いきなり皇帝の寝室に乗り込んで殺されなかったのは奇跡だよね…」

「あんたっ!!!」

ライザさんがメルフォスさんを怒ってくれるけど…あたし的には

や、やっぱりそこですか!?って感じで…

皇帝は別に構わないって言ってましたけど、やっぱり罪人決定ですか!?

「日和もライザも最後まで話を聞きなさい。日和は殺される筈だったのに殺されてないだろ?」

ひたすら落ち込むあたしにメルフォスさんが言葉を続ける

「陛下にも日和を殺せない理由があったんじゃないか…と僕は考えてる」

「な、な、な、何ですか?理由って……も、もしかしてあたし何か変ですか!?異世界人を斬ったら呪われるとかですか!?」

あたしは自分の身体を色々調べるように手を忙しく動かす。

そんなあたしを見てメルフォスさんは苦笑を浮かべる

「違う。日和じゃなくて…ガルフェルド皇帝は黒呪を受けている…と聞いた事がある」
「こく…じゅ？」
「そう。黒の呪い」

あたしじゃなくて…皇帝が呪われてるんですか？

まぁ、普通に毒で殺されるような生活してそうでしたから、皇帝が呪われてると聞いてもあんまり不思議には思わないですけど……だけど…

「でもそれが…あたしに何の関係があるんでしょうか？」
「詳しい事はわからないんだけどね。それに日和が関係してるんじゃないかな？と僕は思うんだよ」

…そうしてメルフォスさんが指差したのは自分の目と髪。

この世界では珍しい黒目と黒髪。

「最初に日和と会った時には夜だったし実際は瞳の色の判別が出来なかった。光に当たると日和の瞳は茶色に変化するよね？その日の夜に部屋で日和の瞳が黒いのを見て実は驚いたんだ。日和には黒髪は非常に珍しいという話はしただろう？黒い瞳は…珍しいどころか僕は見た事が無かったんだよ」

「…え？」

…3年この世界で生活してたけど初耳だった。

確かにあたしの瞳は日の光にあたると茶色に見える。だけどそれは日本人的には珍しくも何とも無かったから別に何の疑問も持ってなかった。

「この村で生活する程度なら、気にする事はないと思って説明しなかったんだ。まさか僕らより先に皇帝と会ってるなんて思ってもみなかった」

うぅ…黙っていた事が今になって重大事件になってしまった。

でも、故意というより1ヶ月も経つとそんな事、忘れてしまっていたというのが実際なんですけど…

「瞳の色というのはね、その人の力や魔力の特性を強く表す場所なんだ。黄色であれば光の力が強い、赤色であれは火、その二つの力を宿す人はオレンジ色の瞳になる。そしてその加護を受けて生活している」

「…そうなんですか」

遥か昔に見た美術のカラー見本を頭に思い浮かべるけど…いまいちピンとこない

「白が全ての色に染まるのに対して、黒色は全ての色を飲み込む色。その力がどんな物なのか……はっきり言ってわからない」

「……わ、悪い力なんでしょうか？」

どうしても黒というイメージを悪く思ってしまうのは日本人だからだろう。

「わからない。誰も知らない未知なる力だと思う。そして皇帝の呪いの内容もわからないけど黒呪と呼ばれるぐらいだから、日和に固執する理由は…きっと黒の加護が関係してると思う。まぁ、これはあくまで僕の想像だけどね」

「黒の…加護」

…平凡な日々がどんどん遠くなってる気がするのはあたしだけですか？

22話　黒い謎解き（後書き）

すみません。少し更新が遅れました
早くストックの日々に戻れるよう頑張ります

23話　意外と図太い精神力でした

二人と話をしている間に結構な時間が過ぎていてあたしの体調の事もあって、後は明日にしようと言って二人は帰っていった。

お気遣いは嬉しいんですけどね、こんな状態で寝れる図太い神経してないんです…

ベッドに入って目を閉じてみても、あたしの頭の中は今日体験した事と今聞いた情報が錯綜してて、全く持って混乱状態のままで眠りなんて訪れてくれない。

だからと言って考えて何か解決があるわけもなく…

「…どうしろっていうの？」

黒の呪いとか言われても、全然ピンとこないし。こんなあたしが皇帝を助けて上げるなんておこがましいでしょ？

それにそんな事を期待されているのだったら帝都に行くのとか断固拒否したくなる。

黒の加護…っていうのも、どうみても暗黒なイメージしかないし、

そんな物受けた日には魔王になるしかないんじゃないですか！？

魔王決定ですか！？って不安にもなる

…あたしは元の世界に帰れないのなら、せめて平凡に暮らしたいだけなんだけど

何て無限ループな悩み

「…こうやって悩んでる…この状況が果てしなく面倒くさい」

…でもいくら行きたくないと言っても、もう一度城に戻って皇帝に会わなければいけないのが現実。

「…なら今ジタバタ考えても仕方ない。寝よう」

口に出してみると意外と実行できるみたいで、あたしは身体の疲れもあってそれから5分もしないうちに眠りに落ちたのだった

＊＊＊＊

目覚めるとすでに周りは明るくなっていて、すっきりした自分に思わず「自分が思うよりずっと神経が図太かったね」と突っ込むのを忘れない

今何時だろう？と、とりあえずベッドから起き上がって服装が昨日のままなのを苦笑する。昨日帰る時にライザさんに今日はゆっく

り休むように言われていたし、起きたら宿へ顔を出す約束だったから、身支度を整える時間はまだある

「お風呂入りたいな…」

服には付いてなくても、何だか嘔吐のにおいが微かに残っている気がする。

お風呂に入ったら少なくとも身体的にはすっきりするだろうし…

あたしは部屋の奥に設置した浴室に入ると、そこで魔法を唱えた。

この世界の魔法はどちらかというと精神的な物が多く、化学では説明出来ないような物も多いけど、あたしの魔法は基本元の世界の化学を基本にしている物が多い。

そんなやりかたは「はじめてのまほうのつかいかた」には載っていなかったし、思いっきり外法な気がするけど、使える物は使わないと損な気がするし、あたしには理論を説明出来るこのやり方が合ってる気がした。

例えばお湯にしても、この世界では川の水と火の魔石を使ってお湯を作る。

基本面倒くさがりなあたしはある程度の大気を手の中に集め、大気中に漂う水蒸気に圧力をかけて気体から液体へ変化させ、乾燥大気の酸素で小さな爆発を起こし熱を発生させお湯を作る。圧力バランスを沸点４０度で設定する事によって沸騰すると流れ出るようにした

外から見ると前にかざした手の間からお湯が吹き出ている形で、元の世界ではありえない事だと思う…多分この世界でもおかしいか

もしれない。

…楽チン便利です。
…え?昨日神様に誓った事?
ちゃんと自分で行ってるので昨日の誓いには当てはまらない事にしておきます…

ある程度お湯が溜まった状態になったら、着ていた物を脱ぎ捨てゆっくりお湯につかる

「いい気持ち~」

思わず鼻歌が出たけど、いかんせん壁が薄いのでちっちゃく歌う

この世界にはなかったのでポンプで浴槽のお湯を汲み上げるシャワーも作ってしまった。これはライザさんやミレーヌにも好評で感謝された。
なかなか快適なバスライフはあたしのこの世界に来てからの数少ない自慢だったりする

身体をすっきりさせて浴室から出たところで聞きなれた騒音が部屋に響き渡った

ばぁ~んっ!!!

今月16回目の玄関の破壊。

そして飛び込んできたミレーヌを抱きとめる。

「ひよぉぉぉぉ！！！！」

キチンと服を着ていてよかったと心の底から思ったのだった

23話　意外と図太い精神力でした（後書き）

今日まではストック無しだったので…更新遅れてしまいました。

明日からはまた12時更新に戻ります

24話　『ママ』ハードルを飛び越えろ

ライザさん宿にたどり着いたはいいけれど、あたしは今非常に困っていた
メルフォスさんとライザさんも固まっていて、その視線の先にあるのはあたしじゃなく…あたしの腰にへばりついてるもので…

「あの…こんにちは…」

ずるずると引きずるように店に入ったら、固まっていた二人がはっとなった

「何やってるんだいミレーヌ!!離れなっ!!」
「やだっ!!」
「……」

どうやら昨日のあたしの姿はかなりミレーヌに衝撃を与えてしまったらしく、先ほど浴室から出た瞬間にミレーヌに腰アタックをされ、そこから一切離れなくなってしまった

…こんなに怯えさせるなんて、あたしどんだけ酷い面してたんだ?

メルフォスさんも苦笑を浮かべながらミレーヌに手を差し出すが娘にきっと睨まれ、差し出した手をゆっくり下ろした。

「…み、ミレーヌ、ひよりが困っているよ?」
「…うっ。だってパパとママは昨日ひよりが起きてから話したじゃないっ!!!あたしだけお留守番だった!!」

あ～…そういえば昨夜はどこまでミレーヌに聞かせられる内容かわからなかったからメルフォスさんとライザさんと三人だけで話したからね…

思えば帰ってきて一番最初に顔見たのミレーヌだし、けたたましい叫び声を上げてた様な覚えがあるから。

…ミレーヌもかなり心配してくれてたんだよね…ちょっと反省。

あたしは張り付いたミレーヌの手をそっと腰から剥がしぎゅっと握りながら、前に立たせて辛うじて高い身長を少しだけ屈めて、ミレーヌの目をまっすぐ見て謝った

「ミレーヌ、心配かけてごめんね。もう大丈夫だから」

「うぅ……だって…ひより…すぐ近くに行くっていったのに、全然帰ってこないし…帰ってきたらあんなんで……死んじゃうかと…思ったんだもん…」

「うん…ごめん。ごめんなさい」

このミレーヌの姿を見て不謹慎だと思うけど、親家族以外からこんなに愛されてて凄く嬉しい。そう思うと自然と顔も緩んでしまう

「……何で笑ってるの？」

「ん？ミレーヌがこんなに心配してくれて嬉しいなぁって……ほんとの家族みたいだなぁって思って」

「ひよりっ！！ほんとの家族『みたい』だなんて…まだそんな事言ってるのかい！？あんた達は正真正銘あたしの娘だっ！！」

ライザさんに怒りながら言われたけど、くすぐったくってやっぱり笑みしか出なかった

「ありがとう…ライザさん」
「ママとお呼びっ！」
「はいっ！！」

あまりのライザさんの勢いに思わず直立姿勢になった…敬礼をしなかったのを褒めて欲しい。

…ただママってライザさん、肝っ玉母さん風なんでどう考えても…おか……ま、まぁそれは置いといて、色んな物を差し引いても、あたし自身その言い方慣れてないんで、非常に抵抗があるんですけど…

「マ…」

ライザさんがじっとこっちを見てる

「ま……お母さん」

すいません。
このライン限界です。
２５歳の今から『ママ』呼びは色々キツいです。

ライザさんは片眉を上げたものの納得顔だったから…ひとまずクリアという事で…

…横のメルフォスさんが期待を込めてこちらを見ているのは気のせいですよね？

「え〜っと…」

色々思案の結果、スルーで！

メルフォスさん、ごめんなさい。

「お父さん」のハードルは「ママ」より高そうです。

元の世界でも、このお年頃って父親に対してって色々あるんですよ…

がっくり項垂れる美形…しかし美形は何しても絵になる。

横で「ひよがお姉さんになった！！」と喜んでるミレーヌと会わせると「喜びと悲しみ」ってタイトルで絵が描けそうだし、確実に売れるね。

…そんな輪の中に自分が居れる幸せ。

いつかは元の世界に帰りたいからと思っていても…やっぱり一人は寂しかった。

だからふとした事で一人ぼっちだと感じるこの世界で、メルフォスさん一家はあたしが勝手に心の底から安心出来る唯一の場所だと思ってた。

こっちが勝手に伸ばしていた手を…しっかり掴んでくれる嬉しさは言葉に出来ない

でも、今から自分が言おうとしている言葉が…せっかく手に入れたものを手放す事になるんじゃないかって怖い。

「…ひよ?どうしたの?」

急に深刻そうな顔で黙り込んだあたしにミレーヌが声をかけてくる

「あたし…」

「さぁミレーヌ!これから少し忙しくなるぞっ!」

あたしの声をかき消すようにメルフォスさんがミレーヌに笑いかける

「え?どうして?」

「ひよは来年から魔術学院に通う事になったんだ。だから皆で帝都に引っ越すぞ!」

「…そんなっ!!あたし一人で」

あたしの為だけに今までの物を捨てて帝都に行かせるなんて…

「馬鹿をお言いでないよっ!!帝都なんてこっから遠い物騒な所に可愛い娘を一人で行かせられるわけないだろうが!」

「だって…ここから3ヶ月もかかる遠い所なのに…全寮制だって聞いたし、あたしだったら転移魔法で一気に帰って来れるから…」

「いいんだよひより。もぅそろそろ戻ろうかってライザとも話してたところだからね」

…戻る?

「あぁ、ひよりには言ってなかったけど、あたしも旦那も元は帝都出身の人間なんだ。…ちょっと事情があってね。ミレーヌが産まれてからこっちに引っ越してきたんだよ」

…事情？

「帝都に家もあるんだけど、今まで面倒で戻らなかっただけだからね」

「…家の状態を確かめに行かなくちゃいけないねぇ」

…帝都に家？

「…あたしもひよと一緒に魔術学院行ける？」

「…え！？」

じっと考え込んでいたミレーヌが口にした言葉にあたしはぎょっとする

いやいや！！ミレーヌ！あんなところ行くもんじゃないよ…

「そうだな…ひよりも通う事だし、ミレーヌにも魔力あるし…受験してみるか？」

「うんっ！！」

え～～～！！！！！

あたしの脳みそは急展開についていけず、その間にメルフォス一家のお引っ越し話はどんどん進行していった

２４話　『ママ』ハードルを飛び越えろ（後書き）

一日のユニークが９０００を越えました

自分の話をたくさんの人が見て下さっているのが信じられないです

ほんとにありがとうございます

25話　平民12歳と貴族12歳の間は『スッピン25歳』でした

簡単に引っ越しが決まってしまい、宿は最後のお客さんが旅立たれてから臨時休業になった。もう再開する気もないようなんだけど、この宿を村の他の人に譲るみたいで、その人がすぐに営業出来るように配慮して『臨時』をつけたらしい。

ライザさん…もといライザ母さんとミレーヌは近所の挨拶周りの事を相談していて、あたしはメルフォスさんと雑談をしている状況で…

…あの城での深刻さは何だったんだろうって感じ。

そんなメルフォスさんとの雑談の中で話題と言えばやっぱり城での事になる

「あの…あたしが12歳とかやっぱり無理があると思うんですけど…」

「あ～そうでもないよ。城とか魔術学院って貴族のお嬢ちゃんが多いから。みんな10歳ぐらいで社交界デビューしてる子達がほとんどだし、作法・マナーは完璧で化粧とかもバッチリだからね。一般の12歳だと考えると逆に驚くと思うよ」

そういえばあたし…この世界に来た時はさすがに出勤モードだったから多少のメイクはしてたけど、次の日からは見事なまでのスッピンでした。

12歳の子供でも化粧をバッチリこなす世界…つまり、スッピンなあたしは12歳で十分通用するって事ですか?

…いや、あたしもメイクが面倒くさいとか…そんな事は無いですよ？

ただ社会的常識とかが無い世界だと、別にスッピンでいても何ら不便でもなかったんで…そもそも皮膚が弱いし、この三年ファンデーションと無縁の生活でお手入れだけをしてたら何だかお肌のハリも少し戻った気もします。

「…そんな状況の中にあたしが入ったら逆に凄く浮いちゃうんじゃないんですかね？」

「ミレーヌもいるから」

…ミレーヌはスッピンでも、絵のような美しさだから多分化粧とか関係ない気がします

「それに少数だけど受験組の子は平民の子が多いから、その子達はきっとひよに近い感じだと思うよ？」

…でもきっとその子達よりは確実におばさんですよね？

どちらにしてもえらく不思議な存在になる事は間違いなく…

「これで実年齢バレたら魔術学院通わなくていいとかにならないですかね？」

「きっと即、城入りだと思うけど」

う～ですよね～～～～。

つまりどんなに浮いていようと１２歳を貫かなくてはならない訳で…

精神的にキツい…

「ただ城でも信用出来る人には全てとは言わないけど、本当の事を話した方がいいかもしれないね」

「…信用出来る人？」

「例えば宰相のシュビとか…、筆頭医術長のシーとかね？」

…宰相ってそんな名前だったっけ？

後、筆頭医術長の人は会ってないからよくわからないけど……

…今、会話の内容よりもすっごく疑問が浮かんできたんですけど…

「あの…メルフォスさんって、何でそんなに城の事とか詳しいんですか？」

だって黒呪なんて話は宰相からも全くされなかったし、という事は宰相自身が知らないか外部に洩らせない内容な可能性が高いのにこの人は知っていたし…

「あれ？言わなかったっけ？僕、元々城で働いてたんだよ」

…聞いてないです！！

こんな側に手配書を何とかしてくれそうな人がいたなんて！！！

こんな事なら素直にメルフォスさんに手配書を渡した方がややこしい状況にならずに済んだんじゃ…

あたしはちょっとした事実に茫然としながらも…済んでしまった

事は仕方ないと諦める
こういう切り替えは昔から早かったのだ。

「…ちなみに、どんなお仕事をされてたんですか？」
「そんな大した事してないよ」

苦笑の表情を浮かべて言うメルフォスさんの横からライザ母さんの呆れた声が重なる

「筆頭団長だったくせに、よく言うよ…」

…団長？

『フレー！フレー！』とか……なわけないですよね？

「き、騎士だったんですか？」
「あ～昔の話だから」
「格好良かったんだよ。白の鎧が似合う団長なんて後にも先にもこの人だけだからね」

はい…そこには激しく同意します

「皇帝の黒の鎧と、団長の白の鎧が対になっててね。ほんと絵みたいな光景だったよ。…まぁ、それを辞めさせたのはあたしなんだけどね」

少し暗くなったライザ母さんを凄い勢いでメルフォスさんが抱きしめる

「…ライザ。そんな事まだ気にしてるの？」

「……」

え～…抱き合う二人を見て、両親のラブシーンに立ち会った気まずさを今感じてます。

このままラブラブ一直線な二人を前にどうしようか迷っていると、その状態はあたしだけじゃないみたいで、呆れた目で二人を見るミレーヌと目が合った

お互い同時に視線で店の外を指した時には思わず二人ともぷっと吹き出してしまったが、ラブラブの二人はそれに気付く事もなく、あたし達は静かに店の外に出たのだった

笑いながら外に出ると、身体を伸ばしながらミレーヌがあたしに話しかけてくる

「あ～！！やっぱひよがお姉ちゃんで嬉しい！」

「？」

「だって両親があの状態でもあたしの状況わかってくれる人居なかったんだもん。今まではあたしを忘れてる両親にちょっとムカついたけど、ひよが居てくれて今日初めて純粋に両親の仲が良くてよかった！って思える」

お互いしか見えてない両親に対して…確かに一人であの状況はちょっと辛いかもね。

あたしの元の世界の両親もあんな風に仲が良かったけど、兄弟が居たから別になんともなかったんだって今ちょっと思った

「役に立って良かったよ」

「……ほんとにひよがお姉ちゃんで嬉しい」

あたしの目下の悩みは……この子に実は同い年で学院に通う事をどうやって説明すればいいのかという事に切り替わったのだった

２５話　平民１２歳と貴族１２歳の間は『スッピン２５歳』でした（後書き）

またまた出てきた１２歳疑惑ですが。

この世界の１２歳の外見年齢が上だと思って頂ければと思ってます

最近ちょくちょくメッセージを頂けて嬉しいです
ダイレクトに感想を頂けるというの何か別の感動ですね

ほんとうにありがとうございます

26話　基本を学び？に胸高鳴る

結構な時間が過ぎてラブラブな二人が落ち着いた後、向かいの家で過ごしていたあたし達を迎えに来て…落ち着いてさらにハートを飛ばし続けていた二人にあたし達は呆れを通り越して尊敬の眼差しを送り、どうにか帝都の家を見に行く事になりました。

…どうにかって何が？

「なんと言っても10年も空けていた家だったから風通しはもちろんの事、住める状態なのかもわからないからね」
「そうだねぇ～帝都で店も開きたいし、店舗の下見もしたいね」
「君の料理なら帝都の看板店になる事間違いないよ」
「やだよ…あんた…」

…どうしてくれよう、このメロドラマ。
家族新入生のあたしにこれの打破は難しいですが…

「……いちゃつくなら自分の家帰れ」

予想外なところから打破が入りました。
ひゅ～って吹雪く絶対零度なミレーヌの一言。
か、関係ないあたしまで凍りつきそうです

「…ご、ごめん。ミレーヌ」
「み、ミレーヌ…あんたって怒ると怖すぎるんだよっ！！」

ラブラブムードも何処へやら、二人もミレーヌの絶対零度な怒りに凍えてる

「…ならいちゃつくのは自分のテリトリーだけにしなよ」

「「…はい」」

「あ、あ、あ、あの…おおお、お取り込み中申し訳ないんですけど、へ、部屋が…」

どもっているのは決してこの雰囲気でなっているわけじゃなく…

普通に寒いんです!!!がちがち唇が震えてます!!!

部屋が凍ってきてるんです……南極状態です。

そんな中に薄着一枚でいるってもう自殺な意気じゃないですか？

しかも何であたしだけが震えてて、当の本人達はケロっとしてるんですか!?

「「「……あ」」」

視線が一気にあたしに集中する。

「やだっ!!どうしよう!!!」

ミレーヌはパニック状態になったのか部屋の凍化が一気に進んでいく。

…やっぱりこれ、ミレーヌの魔力だったのか。

ミレーヌの瞳は青いけど、白がかなり混じった淡い色。つまり氷属性で…

美女に氷って…雪女じゃん…。

しかし、このままじゃやばいなぁ。

…頭の中で「眠るなー！」って定番の台詞が聞こえてくるし、寒くて思考力がどんどん奪われてくし…うぅー

「ミレーヌは落ち着きなさい！ひよりは自分の周りに壁を張るんだ」

「…かかか？」

メルフォスさんに言われるけど、そんな魔法使った事ないし要領がわからない

寒さで言葉がまともに出てこなくなってきたので、手を顔の前で横に振って出来ない事を伝えるとライザ母さんがあたしを抱きこんでくれる

すると今までの寒さが嘘みたいに、普通の状態に戻った

「…ら、ら、ら、ライザ母さんって、魔法使えたんですか？」

「まさかっ！あたしじゃないよっ」

…ということは？

ライザ母さんの後ろを見るとメルフォスさんがライザ母さんに触れていて全部まとめて壁というものをかけているらしい

…身体が暖かくなると思考力も戻ってきた。

ずっとライザ母さんに抱えられ、このままというわけにもいかないので…

寒さを緩和させるには…確か空気の流れを止めるだけで熱伝導率が下がって断熱効果があったはず…

「えっと…こうすれば」

自分の身体から５ｃｍ離れた部分の空気を固定するように魔法を発動させる。

…上手くいったかな？

恐々とライザ母さんの身体から離れてみても、凍えるような寒さを感じる事は無かった

「おぉ！成功した」
「ひよ！！ごめんね」

あたしが耐寒魔法を考えている間にメルフォスさんに説得されたのかミレーヌは落ち着いたようで申し訳なさそうに部屋の隅でちっちゃくなっている。それと同時に部屋の氷も無くなって元の状態に戻った。

「びっくりした。魔力って魔法形態にしなくても発動するんだ…」

ミレーヌがさっきの時点で魔法を発動した形跡は無いし、怒りの感情が抜けるとすぐに凍化が解除された事も驚きだった

そんなあたしの疑問に答えてくれたのはやっぱりメルフォスさん

「魔力っていうのは属性エネルギーの塊だからね。感情に左右される部分も大きいよ。ミレーヌは魔力が人並み以上だけどまだ扱い方が稚拙で感情に左右されやすい」

メルフォスさんから言われてさらにしゅんとなってしまうミレーヌ

つまりは説明を聞くと魔力は石油状態のようでそれだけで十分なエネルギー資源にもなりうるって事で、魔法は石油を精製してガソリンや石油製品にしているような物でより純粋なエネルギーを得る事が出来る…らしい。

そんな説明は「はじめてのまほうのつかいかた」には載ってなかったし…

…という事はあたしが最初にこの世界に来た時に発動した転送魔法は実は魔法じゃなくて属性魔力のせいだったりする？

だって、この世界に来てすぐなんて魔力が自分にあるなんて事も知らなかったわけだし……だけど殺されそうになって感情爆発は確かにあった。

…でも属性力が転移って…あたしどんな属性なのさ？

黒の加護の謎がますます深まっていく。

その辺りにあの『ぶよよん壁』をすり抜けるヒントがあるのかもしれない

何て考え事をしていたら、解除し忘れてたあたしの耐寒魔法をメルフォスさんが調べていたみたいで…

「……ひよりは魔力が凄くてもそれの扱い方が独特すぎる。基礎を知っておく事も大事だと思うから、やっぱり二人とも魔術学院に行く事は必須のようだね」

魔法基礎はもちろん大事だし、文字の習得もありがたい。
もし、黒の属性がこの世界に存在しない属性だとしても、その事自体を研究しやすいのも魔術学院だろうと思う
魔術学院！興味がわいてきた！！！

「……研究。ふふ…研究」

社会人になって久しく感じていなかった高揚感があたしを包む

ふふ…これでもあたし大学で研究者としては優秀だったんだよね～楽しみぃ～！！

日夜、顕微鏡に向かっていた日々を思い出しながら思わず口元がにんまりとする

「ミレーヌ！頑張ろうね！！」
「う、うん」

…自分が学院で１２歳扱いという事はすっぽり頭から抜けさっていた。

27話　不幸の手紙が届きました

メルフォスさんが家の様子を見る為に帝都に旅立って早1ヶ月。
最初はあたしの転送魔法で送っていこうと思ったのだけど、あたしの転送魔法の行き先が城内だけだと知ると、露骨に嫌そうに断られましたよ。

…一体メルフォスさんとお城ってどういう関係なのか…まぁ同じ立場だったらあたしでもきっと嫌な顔すると思うけど…

なので地道?よりは早い転送魔法を連続して使用する方法で帝都へ向かわれた。魔力の予備があった方がいいらしく、10個ほどあたしの魔石も持っていかれました

で、あたしの生活はあの日が嘘の様に特には変わってなかった。
毎日ライザ母さんの御飯も美味しい。
臨時休業中のライザ母さんの宿はすぐに引き継いでくれる人が見つかって、今は料理なんかの引き継ぎをしてる。あたしの道具屋も閉店したけど、ミレーヌと一緒に作業場と化してるのは変わらない。

だけど、今までと一つだけ違う事がある

「ねぇミレーヌ、精霊石の作り方って精霊取っ捕まえて何魔法だっけ?」
「え?…ちょっと待って…精霊取っ捕まえたら怒って作ってくれないって…」
「…え?じゃあ…取っ捕まえるのは?」
「それは使役魔法」

作業場の真ん中にどーんとでっかい机を置いて、その上は難しい本が積み上げられ、色々な言語の辞書が開かれたまま置かれ、紙が散乱し、溢れてる。…もちろんそんな中にある「はじめてのまほうのつかいかた」はかなり浮いている

もちろんそんな紙媒体に埋もれた状態のあたし達がしているのは『受験勉強』である

「ねえ、ひよ。製鉄って何だっけ？」
「鉄鉱石から不純物取り除く事」

あたしの頭はすでに臨海状態となっていて、記憶容量の空きなどすでに無い。元の知識で応用出来る事もあれば、全く一から覚えなくてはいけない事も山のようにある

「…駄目だ。あたし限界だ」

…使ってなかった脳みそは硬化がかなり進んでるらしい。

そんな限界状態のあたしが突っ伏した机に突然、魔力の渦が現れた

「…げ、何コレ？」
「あ…魔法便」
「まほうびん？…お湯が出るの？危なくない？」
「ち・が・う。魔法で送る手紙の事！さっき覚えたじゃん！！」

…駄目だ。もう1分前の事も記憶にございません
でも『まほうびん』と口で言われると『魔法瓶』変換なのはしょうがないと思うんだよ

「魔法の手紙ねぇ…」

そのやり取りをしている間に渦が小さくなったかと思うと、渦の真ん中から細長い筒が飛び出てきた。

「うぉっ！」

「…誰からだろ？パパかな？」

ミレーヌもかなり受験勉強で疲れているのか、あたしが驚いてるのは完璧スルーで出てきた筒を調べている

「あれ…ひよにだ…。リュージニアス…誰これ…」

「……」

……リュージニアス…どっかで聞いた事あるような？

とりあえずミレーヌから受け取った筒を開けてみると巻物状態の紙が出てきた

「よかった…読める」

書かれている文字が見慣れた文字だったのでちょっと安心した。

「え～っと…何々

あさみずへ

あさみずが帝都を後にして、早1ヶ月が経とうとしている。

今日、手配書の伝達鳥が戻り君の現在地がようやく特定出来た。

一向に戻る気配のない君に、私はすぐにでも迎えを送りたい

転送魔力が足りないのであれば、すぐに言ってくれ。それなりの者を送ろう

ガルフェルド皇帝
リュージニアス・クロムレス・レイ・ジェイライト・ローダスタ・ガルフェルド」

ちなみにあたしの語学力は上記を全てひらがなに変換したような文章だと思って頂きたい。
っていうかあの伝達鳥って今着いたの?どんだけの性能なのさ。
すっかり忘れてましたよ…あの時の追跡魔法の存在なんて…

すっかり忘れていたと言えば…そういえば皇帝ってそんな名前だったっけ?

「皇帝からだったよ」
「ここ、『こうてい』!?『こうてい』ってあの皇帝!?」

ミレーヌは思いっきり動揺してるのか、今にも椅子から落ちそうな勢いだ

「ミレーヌ危ないって…」
「何で皇帝がひよ迎えに来るの!?」

あ……ミレーヌに事情を話すのもすっかり忘れてましたよ

「あ〜…」
「…あの日に何かあったのね」

ミレーヌの言ってる『あの日』とはもちろんあたしが『帝都に行

った日』の事を指してるに違いなく…あの時の気分の悪さの理由は転移魔法だと説明はしたんだけど、その他の事は何だか流れで、説明しなくても引っ越し喜んでるし…とか思っちゃったんだよねぇ…

これはちょっぴり帝都に行ってきて皇帝と仲良くなっちゃった！とかで誤摩化せる事なのか…

「あはっ」

「……あたしが知らない事あるんだね」

「あはは……はぁ」

どこから説明したものか…

あたしは『黒呪』や『異世界の存在』というものを省いて出来る限りの事は話した。

「というわけで、皇帝とも知り合ったわけで…」

ミレーヌの目が爛々と輝いてるのに気付いたのは全部話し終わった後だった

「凄いっ！ラブね！ひよ、皇帝陛下に愛されてるのね！！」

……え？

「ひよはすごく愛されてるのね。たかが1ヶ月も離れていられないぐらいなんて、ひよにずっと側に居て欲しいのね。だから城に住めだなんて…物語みたいっ！！」

「いや…ち、違う」

…何だか違う盛り上がり方してませんか？お嬢さん！！

あ、あたしの話し方どこが間違った！？

「…何が違うの?この文面から見ても陛下はひよに会いたくて仕方ないんじゃない!」

あぁ…黒呪の事を話せないのがもどかしい。

「いや…だからね」

「あぁ!早速返事書かないとね!!ひよ魔法便の送り方わからないでしょう?あたしが代わりに送ってあげる!速便にしよう!すぐに迎えに来て下さい!!でいいよね?」

「やっ…ちょっ!!!」

「大丈夫!あたし魔法便は得意だからっ!!任せて!!」

違う〜〜〜〜!!!という訂正は一切聞いてもらえず、速便で「迎えに来て」と皇帝に返信されてしまった

やばい……迎えがやってくる

27話　不幸の手紙が届きました（後書き）

１００万ＰＶを越えました。
お気に入り登録ももうすぐ３０００件に達しそうです
心より感謝いたします。

28話　速便は速かった

なんとか魔法の渦に筒が飲み込まれるの阻止するべく差し出した手は見事に宙を舞った、あたしはそのままミレーヌを振り返りにっこり微笑む。

もちろんその笑顔とはミスマッチの、どでかい怒りマークが額には浮かんでいる

「あれ…ひよ」

「みれぇぇぬぅぅぅぅ」

笑顔とは真逆の地を這うような声を出した

「え?…あれ?もしかして…不味かった?」

ミレーヌは剣呑な空気を読んで椅子から立ち上がり、笑って誤摩化しながら扉へとちょっとずつ下がっていく

「えへ…えへへっ」

「もしかしてじゃなぁぁぁぁいっ!!!!」

…逃がすかっ!!!!

「しゃぁーーーっ!!!!いつも人の話はちゃんと聞けと言っているでしょうがっ!!」

「きゃーん!!!!」

…12歳の少女にマジ切れするのもどうかと思うが、あれによって自分の生活の危機を迎える事になると思えば、やはりここは怒っ

てしかるべきところだと判断する

フルフル震える子猫のようなミレーヌ。

「だって…だって…！！」

「だってじゃないっ！！玄関の事と言い、学習能力が低過ぎるっ！！」

そう、こういうミレーヌのところに多大な迷惑を被ったのは一度や二度では無い。例えば旅人の青年と笑いながら話しただけで『恋なのね！』と言って無理矢理デート紛いの物をさせられたり…

最終的にその青年はミレーヌに一目惚れしていた事が判明したが、彼はミレーヌにこっぴどく振られ、それどころか「ひよは遊びだったのね」などと言う彼にとっては意味不明な濡れ衣を着させられ、傷心のまま、また旅立っていった。

…つまりミレーヌの頭の中は常に乙女モードの花満開なのである。しかも他人限定で…

「言う事があるでしょうが！！！」

「ご、ご、ごめんなさぁーーーーい」

まぁ…頭の中が満開なだけで本人に悪意がないからいつもこれで許していたのだけれど…今回はいかんせんまずい。

…伝達鳥が着いてからの手紙までのスパンが短過ぎる事を考えると、あちらさん返信の手紙が着いてからすぐに行動を起こしかねない…しかも速便だし。

あたしどれだけ迎えを要望してんのさ…

あぁ…早1ヶ月って、まだ1ヶ月の間違いでしょうが！！
あたし色々片付ける事があるってあの時ちゃんと言ったよね？

もう少ししたらメルフォスさんが帰ってきて、そこから引っ越しするらしいから、それまで待ってて貰えるようにもう一度間違えましたぁって手紙を送り直そう。

「そうだっ！！そうしようっ！！よし、ミレーヌもう一度速便よろし…」

ピンポーン！

…元の世界から聞き慣れたあたしの作品『ドアベル1号』が作業場に鳴り響く

「……」

ピンポーン！ピンポーン！！

「……」

ピンポン！ピンポン！ピンポン！！

連続押し…まさかね…そんなまさかね…

「ひ、ひよ…お客さん？」

「しぃー！！！」

話しかけるミレーヌの口を思わず手で塞ぐ。

いやいや、一緒に『閉店』の看板出したじゃん…ライザ母さんだったらドアベルなんてならさずに入ってくるしさ…村人さん達もあたし達が受験勉強してるって知ってるから訪ねてなんて来ないしさ…後考えられる人なんて…ふふ…

あたしの勘違いで…このまま居留守で帰ってくれると非常に助かります

ドンドンドン！！

はい…玄関叩きだしたよ。

「あさみず！！居ないのか！？」

……はぃ？

「…出かけてるのか？……だがあの手紙は確かにこの座標から送

られてきたしな」

すみません。独り言が丸聞こえなんですけど…しかもこの声…心当たりがありすぎるんですけど…。しかも独り言はミレーヌにも聞こえたのか、あたしが塞いだ手の下で青くなって、必死に玄関を指差している

……ですよねぇ。きっとあたしの想像通りだよねぇ。

一先ず裏口から逃げる！それしかない！！

…て、あたしのお馬鹿！
お風呂の増築で裏口潰しちゃってるじゃん！

「…何だ？この玄関開くぞ…」
「しまっ！！」

しまった…今朝ミレーヌが玄関たたき壊したの、鍵直してなかった…

「失礼する…あさみず！！居たのか！！……何をやっている」
「……」

口を塞がれた美少女を連れて端っこに逃げるあたしは、絵づら的にどう見ても立てこもり犯でしかなく、駆け込んだ貴方はまさしく王子様。もちろん助けられる姫はミレーヌで犯人あたし…

……み、ミレーヌ連れて行ってくれないかな？

とりあえずミレーヌを前へさしだしてみる。

「……ひ、姫を帰します」
「ひっひよ！？」

ごめん。これで速便の件ちゃらにするから大人しく連れて行って貰って下さい

「あさみず…何を言っている」
「ですよねぇ～」

えぇ…わかってますよ。
わかってるんですけどね

その前にあたしはとぉぉっても聞きたい

…皇帝…何であなたがここにいるんですか？

28話　速便は速かった（後書き）

…何だか脳内のあらすじがどんどん膨れていって、えらく長い話になりそうな気がするのは…どうしたものでしょうか。

29話　口は災いの元？

本人はそうでも無いらしいが、あたしは皇帝がこの家に居る事にかなりの違和感を感じながらとりあえずお茶を入れる。ミレーヌは「お、お母さん呼んでくる！」って出て行ったまま帰ってこないしね…

「……」
「……」

空気が重い。
さっきから皇帝の顔筋は動くのを拒否してるのか、無表情のままだし…
ただ、あたしから何か話しかける気は毛頭無かったので、とりあえず皇帝と自分の前にお茶を置いた後、湯飲みのお茶を啜る。

…もちろんあたしの試作品32号『日本茶』ですが？

皇帝は目の前に置かれた湯飲みを少し不思議そうに、見様見真似でお茶を啜っている

「…苦いな」
「苦味が美味しいんです」
「そうか…」

…はい、会話終了。

あたしをすぐ帝都へ連れて行くのかと思いきや、皇帝が来た目的

がよくわかりません。

「…ここがあさみずの家なのか？」
「借家ですけど」
「そうか…」

…だから何なの？

一気に目的を伝えてくれれば、それに対応も出来るんですけど…

「ここにある物は全てあさみずが作ったのか？」
「……」
「そうか…」
「返事してないしっ！！！」

あ…しまった。
思いっきり突っ込んでしまった…あたしが顔を引きつらせるのを見て、それまで無表情だった皇帝の顔がゆっくりと微笑みを浮かべた

「…やっとこっちを向いた」
「え？」
「さっきからずっと俯いていただろう？」

そういえば皇帝が乗り込んできて全然彼と目を合わせて居なかったことを、指摘されて始めて気付いた

…だから、微笑まないで…
貴方の顔はあたしにとって毒なんですってば

「顔を見たかった。あさみずが実在している事を確かめたかった

んだ」

「……」

「あの日、再び私の元に訪れてくれた事を…」

…すみません。砂吐いていいですか？

そんな甘すぎる台詞は日本人には辛すぎます。

出身文化は気持ちを上手に隠す文化なんです！

…まぁ、黒呪の事を知った後なんで多少ましですけどね

「げ…現実ですよ」

あたしは出来れば夢の方が良かったです。

この世界に来た事自体夢だったらもっと良かったですけどね…

皇帝は何を思ったのか手を伸ばしてきた。

「んぎゃっ！！」

皇帝の手はあたしの手を包み込んで、それを自分の額に当てた

「…こ、皇帝」

「…本物だ。この1ヶ月あの日が夢だったらという恐怖に襲われていた」

「……」

ど、どんだけ黒呪って恐ろしい呪いなんでしょうか…

皇帝の話を聞けば聞くほどあたしにどうこう出来る代物じゃない気がします

ただ…皇帝の手が小刻みに震えてて、悪気があったわけじゃないですが、この1ヶ月皇帝へ連絡をしなかった罪悪感に切り刻まれてる自分がいたり…

「あのぉ…すみませんでした」
「…？」
「連絡…しなくて…ちょっと引越しやら受験勉強やらで…パニくってました」

う、嘘じゃない。
受験勉強も引越しもこれから本腰だけど……嘘ではない。と思う

「構わない。魔法便へ返事をくれただけで十分だ」

…魔法便はあたしが出したんじゃないです。
事故に近いものがあったんですけど

…真実より嘘の方が重要な事ってありますよね？

「ははは…」
「もぅ帝都に向かえるのか？それにしては…」

皇帝が部屋の中を見回すのを見て、彼の思考に同意する

「はい。まだ片付けが終わってないんです」
「…？」
「て、手紙を間違えてしまって。ほんとはもう少し待っていて下

さいと書いた物を送るはずだったんですが…ほ、保護者に向けて送る筈だった物を送ってしまいました」

あたしナイスフォロー！！

「…保護者？」

「はい。メルフォスさんという一家にあたしご厄介になってまして…」

「メルフォス！？」

皇帝が勢い良く立ち上がった拍子に机の湯飲みが倒れた

「あぁ！！」

お茶がかかった本人の皇帝はそんな事が気にならないほど、何か別の事に気を取られている。あたしはとりあえず台布巾でこぼれたお茶を拭き、皇帝には乾いたタオルを渡した

差し出されたタオルに皇帝ははっと自分を取り戻したらしく

「……ありがとう」

「いえ……どうかされたんですか？」

「メルフォスというのは、青髪の槍使いか？」

確かにメルフォスさんは青髪の美男子で、槍を使っているけど…

「だと思いますけど…」

「こんなところに居たのかっ！！！」

…あれ？

皇帝にメルフォスさんの事言っちゃいけなかったんですかね…？

メルフォスさん、皇帝のこの様子からして穏便に帝都から旅立った訳じゃ無さそうですね…道理で転移魔法の時にあんなに露骨に嫌がったはずだ…

「メルフォスは今どこに？」

「あのぉ…」

「教えてくれ！！」

「……」

これ以上墓穴を掘れないので、黙っていると皇帝はあたしのタオルを持ったまま表へ飛び出していった。

「えぇ！？」

追いかけて表へ出た時には魔力の歪だけがそこに存在していて…

「……あの人、あたし迎えに来たんじゃなかったの？」

メルフォスさんを捕獲しに皇帝が戻った事に間違いなく…

「しくじったぁ～」

頭を抱えてその場にしゃがむが、そんな事をしてる場合じゃなく…急いで向かいのライザ母さんの宿に駆け込むと、ミレーヌとお茶をしているライザ母さんに向って「少し帝都に行ってきます」と言い残して、すぐに転移魔法を発動させたのだった。

29話　口は災いの元？（後書き）

ひよ墓穴です。

30話　イベントはトラブルがいっぱい

転送サングラスを装着し、あたしはどこぞの族？って感じで転送ロードをかっ飛ばした。帝都であたしは皇帝の手配書のせいで有名人になってしまっているので、もしも何かあった時の為にとりあえず髪の色を変える魔法式をサングラスの魔石に追加する。

「ったく…また転移魔法で帝都に行くはめになるなんて…」

一度通った道は加速度も倍で、前回より早く魔障壁まで辿りついた。

「…あれ何で？」

魔障壁があるにはあるけど、前回開けた穴も目印もそのままの状態で…

「…？あんなに慌てて補修するように言ってたのにまだ直してないの？」

ま…あたし的にはわざわざ面倒な魔障壁を処理しなくてラッキーだけど

あたしはそのまま前回と同じようにゲートと化した場所を通過する。通過する際に認証システムの履歴を見てみると、何だかすさまじい人数が通過してるのを確認して顔が引きつってしまった…

…ここが悪用されてるとかないよね？

そして通過が完了した瞬間、強制的に転送ロードから引きずり出される感覚に思わず身を硬くする。

「なっ！？」

手が先に地上についてくれ、危うく無様に顔から落ちかけたのを助けてくれた。

…あ、あぶな。

バクバクする心臓を押さえながら、とりあえず辺りの様子を伺う。どうやら排出された所は何だか庭のようなところらしく…落下場所にはたくさんの人が居てその瞳が一気にあたしに注がれる。

「…え？」

パンパカパーン！！！

突然鳴り響くファンファーレに身体がびくっと反応する。そしてその驚きが収まらないうちに次々と鳴らされるクラッカーにあたしは紙の雨をもろに受ける

「なっ…何？」

「おめでとうございます！！貴方がファンシーゲートを通過された１００万人目のお客様です！」

…何ですと？

ふぁ、ファンシーゲート？

「記念品の贈呈。そして簡単な式をご用意していますのでこちらにどうぞ！！」

「いや…」

全然理解出来てないし、そもそもファンシーゲートって何！？

そのまま自分の落ちてきたところを見ると、そこにあったのはでっかいクマのぬいぐるみで…

「…確かにファンシー」

じゃなくて…もしかしてあたしがつけた目印の形がこうなったの！？

どうせすぐに撤去されるから適当にアップリケをつけちゃえ！って感じの魔法式だったのに…どうしてだかクマ飛び出しちゃってますよ？

どうみても周りにいるのは城に勤める人というより観光客風な人達ばかりで…

「……か、観光スポット？」

「はいっ！今帝都で噂のスポット、ファンシーゲートです！このまま城内の見学コースが一般的となっております」

さっきからあたしに話しかけてくれるのは、赤髪のとても綺麗なお姉さんで…

あぁ…適当に作った魔法式がありえない数の人の目に晒されている。

…さっきこのお姉さん１００万人とか言わなかった？

自分の魔法がいつのまにか観光スポットになっているなんて、これほど気まずい物は無い。

こんな事になるならもっとちゃんとした魔法式組むんだった…

もちろん後悔先に立たずで、今更どうしようも無いのはわかっている。

ただやっぱり式をちょっと修正されてるらしく、あたしがされたような強制排出なんて式はなかった筈なので…

「…お客様。魔法に酔われましたか？」

「あっ…」

ずっと黙ったままでいると心配してか、赤髪のお姉さんがしゃがんであたしの顔を覗き込んでくる。

サングラスのおかげで瞳の色を見られる事はないけど、あまりに近くに顔があったので飛び離れた。

「だっ大丈夫です！あ…あの、記念とか結構なんで…」

…自分が作った物に対してキリバンを踏んでしまうのは…そんなつもりはなくても詐欺っぽくて嫌だ。

あたしは近くにいた老夫婦の手を取ると、赤髪のお姉さんの前に突き出す

「こちらのご夫婦に移譲します」

「「おっお嬢さん！？」」

「よければここの記念に受け取って下さい」

「よろしいんですか？」

赤髪のお姉さんの問いかけににっこり微笑むとあたしはようやく立ち上がり、しきりにお礼をしてくれる老夫婦に見送られながらその場を後にした。

「……さて、どうしよう？」

ここは観光客も出入り出来るような区域らしいので、もちろん簡単に皇帝に会いに行くなんて出来ないだろう。

かといってこんなに人の多い場所で転移魔法を使うと人を巻き込む可能性も出てくる

「てっきり、また皇帝の寝室に出ると思ってた。考えが甘すぎるなあたし…」

とりあえず人の流れに沿って進む。

情報収集が大事なので周りの人の話に耳を傾けると、いつも庭園などは一般開放されているが、どうやら今日は1年に2度ある城内の開放日のようで、場所はかなり限定されているが一般人が城内に入れる日らしい。

「どうりでこの人数…」

まるで元の世界での有名な遊園地並みの混雑で、さっきから少しずつしか列が進まないし、警備員のような人が「きちんと列で並んで下さい」と声を何かで拡張して叫び続けている

そんな時、城内に音声が響き渡る

『迷子のご案内です。グエンタ地区よりお越しのザイファス様。お子様をこちらでお預かりしています。1階正面玄関受付までお越しください』

…迷子アナウンス。

一瞬自分の名前をアナウンスしてもらう事を考える。宰相あたりが来てくれると嬉しいんだけど…迷子は恥ずかしすぎる。

思考が葛藤している中、また音声が響き渡る

『迷子のご案内です。テリサン村からお越しのアサミズヒヨリ様、お連れ様が医療部にてお待ちです。至急お近くの警備員にご連絡ください』

…はい。あたし城でも迷子らしいです

３０話　イベントはトラブルがいっぱい（後書き）

土日はどうしても更新が遅れてしまいすみません。

閑話は明日かあさっての昼に更新します

31話　どきどき、イベントでの出会い

城内音声では簡単に警備員と言われましたが、さっきから声は確認出来るんですけど…姿が一向に見えないし、というか私今気づいたんですけど、この世界の平均身長よりかなりミニマムらしく、人混みに入ってしまうと周りを人の壁に覆われてしまって埋没。

「これはテリサン村では体験出来ない事だわ…」

…あえて好んで体験したいとも思わないんだけどね。人混み苦手だし…

「さ…酸素が薄い」

満員電車などでも身長が低いとどうしても澱んだ空気しか吸えなくて、あたしにとって出入り扉付近を死守するのは生死をかけた戦いだったりする。この状況はまさしく満員電車状態で…

ヤバイなぁ…酸欠になりそう。

とにかく人混みから離れようと動こうとするけど、自分の位置がきっちり固定されて前に進む以外全く動く事も出来ず。

「あの～!!横に行きたいんですけど!!」

と叫んでみるものの、この人混みでそれぞれの人が会話しているとあたしの声は聞こえないらしい…

魔法でぶっ飛ばしたい…なぁんて物騒な事が頭を過ぎるけど実行

はしませんよ？無差別殺人者なんかになりたくないですし…

「…困った」

困ったけれどどうする事も出来なさそうなので、人混みが途絶えるとこまで我慢するしかないか…と思ったらまた城内音声が流れる

『再度迷子のご案内です。テリサン村よりお越しのアサミズヒヨリ様。お連れ様が大変心配しております。大至急お近くの警備員までご連絡ください』

思わず怒りマークが顔に浮かぶ。

誰が音声を依頼したのかわからないけど、無事着いたらとりあえず一発殴る。

出来るもんならさっさとやってるっつうのっ！！！

ちょっとずつしか進まない列にイライラもＭＡＸになり、叫びだしそうになる寸前

「君、アサミズヒヨリっていうの？」

と隣にいる緑の髪を持った青年に話しかけられた。

「え？」

突然見ず知らずの相手に名前を言い当てられる事ほど怖い事はない。しかもその青年の容姿が長く黒い外套を羽織り、前髪で目がほとんど隠れている状態なので警戒心が倍増される。そんな相手は当然眉間に皺を寄せ見るしかなく、そんなあたしを見てその青年は苦

笑しながら

「城内音声が流れた途端に動きがそわそわし始めたから、そうかな？って思っただけなんだけど…」

と言った。

なるほど…確かにそう言われればそうだけど…

だからと言って単純に警戒心を解くほど世間知らずじゃない。黙って見つめていると青年は「まいったな…」と頭を掻いた。

「…あたしがアサミズヒヨリだったら何なんでしょう？」

「ん～お連れさんがかなり心配してるみたいだから、警備員を呼んであげるかな」

よし、良い人決定

「すみませんでした。お願いします、困ってたんです」

「よかった。じゃあ…」

青年はそう言うと「警備員さんお願いします」とぼそっと呟いた

「…い、今の何？」

「ん？警備員さん呼んだんだけど…それでよかったんだよね？」

「いやいや、ありえないぐらい呟きだったんですけど…」

そんな声で伝わるんだったらとっくの昔にあたしがやってるっつうの！

「あぁそういう事、警備員の位置は見えたからそこに魔法で音声を飛ばしたんだよ」
「魔法!?…という事はあなた魔法使い？」
「フロシェイド・ダイス・ビュートリア。魔術学院の研究員だ」
魔術学院って今度からあたし達が通う予定のところだよね…間違いなく。
つまり怪しい黒の外套は魔法衣らしい。
「…そんな人が何で城見学なんかに？」
「あぁ…俺、地方出身だからさ。魔術部には所属できないんで、就職活動を兼ねて城の部署見学」
…部署見学なら何もこんな日を選ばなくてもいいんじゃないでしょうか？と思わなくも無い…
けれど就活と言われると、自分の就職超氷河期時代の過去を思い出して寒くなるのでそれを現在経験している人にそんな突っ込みは出来ない。
面接１００社とか…あれは精神的にも体力的にもしんどかった。
それにしても、魔術部って地方からの人間が入れないんだ…。
特権階級の集団ってわけですか…やだやだ、そういうの。
そう思うと目の前のこの青年を心から応援したくなる。
「それは…大変ですね」
「ん～。まぁ別に観光も兼ねてだから…あ、警備員来た」
彼がそう言うと遠くの方からあたしを呼ぶ声が聞こえてくる。

それに合わせて人の混雑がモーゼの十戒のように開かれていってるらしく、警備員の頭があたしからでも見えた

「アサミズヒヨリ様～！！何処ですか～！！」

「警備員さ～ん！ここで～す！！」

緑の青年が大きく手を振ってくれて、それをすぐ見つけてくれたらしい警備員が「今そちらへ行きます！！」と返事をくれた。

「…色々ありがとうございました」

「いえいえ。それじゃね。アサミズちゃん」

そう言って緑の青年は先に進んでいった。

あたしは一礼してそれを見送り、こちらに向ってくる警備員さんを待つ。

…帝都であたしの名前を呼ぶ皇帝・宰相・エリルさん。そして４人目の人。

何だかちょっと不思議な雰囲気を持った人だったけど、いい人だった。

受験に合格して、もし次に会う事があればお礼をしなければ…と思う。

受験勉強で容量が少なくなった記憶の端に留めたところに警備員さんが到着した

31話　どきどき、イベントでの出会い（後書き）

今日で連載を初めて一ヶ月です
たくさんの方に読んで頂けて嬉しく感じています

本当にありがとうございます

３２話　ついてないのは皇帝のせいだ（前書き）

文章評価・ストーリー評価が１０００ｐｔを越えました
ほんとにありがとうございます

32話　ついてないのは皇帝のせいだ

人混みから出ると空気が美味しかった。
例え警備員さんに両腕を抱えられ人混みから出る姿が現行犯逮捕のようでも、それを見た人がひそひそ話していたとしても、この空気を吸えただけで良しとする。

まぁ…サングラスも悪役に一役買ってると思うけどね…

あたしはようやく色んな意味で自由になった身体を解す為に、思いっきり腕を伸ばして伸びた。

「う〜ん！！」
「アサミズ様、どうぞこちらへ」
「あぃ！ご、ゴホン。す…すみません」

思いっきり伸びているところに話しかけなくてもいいではないか…と思う。思わず変な声が出たのを咳で誤摩化したけどあまり効果は優れない…

警備員さんに前後を挟まれ取りあえず進むけれど、途中の今でさえ自分で元の場所に戻れと言われても絶対に出来ない自信がある。

こ、この城どんだけ広いの？

皇帝の部屋からガース国の使者の人がいた部屋までもかなり遠かった様に感じたのに、今歩いてる距離はそれとは比べ物にならない。
『関係者以外立入禁止』を何度潜れば目的地に着くのか解らず、そんなに医術部とは遠いものなんだろうか？とだんだん人の数が減

っていくのを見て、どうしても頭に不安が過る。

「あのぉ～後どれぐらいかかるんでしょうか？」
「申し訳ありません。もうすぐ医療部ですので…」
「はぃ……」

この会話が約１０分前。
いくらこの世界を3年しか知らなくても、周りに人が全く居なくなったら危険だって事ぐらいわかりますよ？ぇぇ、見事に居ませんよ？私たち以外。

「…貴方達ほんとに警備員ですか？」
「……」

…無視ですか。
怪しさ満開じゃないですか…

「…あのぉ、トイレ…」

言った瞬間に後ろの警備員から首に何かを突きつけられた感触は、トリップした日に味わったものと同じ感じで…ゆっくり突きつけられたそれに目をやる

「……やっぱり刃物」
「アサミズヒヨリさん。私たちと一緒に来て貰いましょうか？」

少しハスキーボイスなその声は、こんな時で無ければカッコいいと思える声で

「…惜しい。惜し過ぎる」

「アサミズヒヨリさん？」
「あ～もしかしてもしかしなくても…これって誘拐ですか？」

前の警備員が帽子と上着を脱ぎ捨てる。浅ましい笑みを浮かべてこちらを振り返る男はどうみても犯罪者だ。それに比べて後を振り返るといい声男も帽子と上着を同じ様に脱ぎ捨ててはいるけれど、全く印象が違う

うん…君は犯罪者っていうより、怪盗とかの方が似合いそうだ。

しかしこれって予知ですかね？対象があたしじゃないけど…マジで現行犯逮捕じゃん。

「…なぁ～んであたしなんですかねぇ」
「顔絵とはちょっと違うようだけど、君に手配書で結構な金額ついてるの知ってるよね？手配書は取り下げられたけど、君自身の価値は下がってないだろう？あの場内音声を聞けば大切にされてるのがわかるよ」

ん～、やっぱ聞けば聞く程いい声だわ。

しかし…色んな意味で皇帝、殺！
あたしが皇帝に呪音を送っている間に、いい声男が話を続ける

「それにしても、今日はそれでなくても犯罪発生率が高い日なのに大切にしてる割には一般人の中に警備も付けないで居るなんていい度胸してるよね？まぁ居るだけなら、黒い眼鏡と髪の違いで手配書の女だとは気付かないけど…」

…場内放送であたしの名前ばんばん言っちゃってたもんね～。し

かもこっちから助けて下さいとか言っちゃってるしね…もしかして…

「あの緑の髪の人もグル？」

「ゲヘヘ、違う違う。奴はほんとにたまたま側に居た警備員に声を掛けただけだろうよ。それが警備員に化けてた俺たちだったってのがお前の運のツキだったな。ゲヘヘ」

…前の奴には喋って欲しくないわ～。

別にあたし正義感とか強くないのに犯罪者しすぎてて今すぐ捕縛したくなる。

よし、呼び方『犯罪者』に決定！

『いい声男』と『犯罪者』…なんて凸凹コンビなんだ…犯罪者が哀れで泣けてくる。

しかし、それはそれ。これはこれ！

「あのさ～誘拐って弱い者を連れ去るから成り立つって知ってる？強い者を連れ去る時にはね、ちゃんとそれを動けなくする人質というものが必要なんだよ？」

「何言ってやがる…」

「だからこの状況だったらね。あたし自由に動けちゃうわけですよ。それはもう自由に！貴方達は少なくとも今すぐあたしを殺せないでしょう？」

「このクソ餓鬼が…」

犯罪者に睨まれるけど、魔法を使えるからか初めて皇帝に剣を向けられた時と違って今はあんまり恐怖を感じない。

「てめぇ…自分の立場がわかってねぇようだな。他にも金になるネタはたくさんあんだよ！！今すぐてめぇを殺したところで俺達は痛くも痒くもねぇんだよ！！！」

犯罪者は単純だ。
あたしに逆上していらない事をベラベラ喋ってくれる。

つまりあたし以外にも誘拐された子が居るって事で……果てしなく面倒な事に巻込まれた気がするけど、だからって関わっちゃったからには、ここで無視したら絶対後味悪くなるし…

「そうですか…なら」

しっかしほんとに皇帝絡みになるととことんついてない。

あたしはそう思いながら前後の二人組の横、１ｍ部分に固定した直径６０ｃｍの空気の塊を時速５０ｋｍでぶつけてやった。二人とも殺さない様に吹っ飛んだところを柔軟性をもたせた水の塊で受け止める。

原チャリに引かれたぐらいじゃ打ち所が悪くない限り死なないでしょう？

…腕の骨折ぐらいはいっちゃってるかもしれないけど…ね。

32話　ついてないのは皇帝のせいだ（後書き）

閑話をUPしています。

突然寒くなりましたね。皆さんお体は大丈夫ですか？
私は案の定、発熱しております（笑）

皆様お気をつけ下さい。

33話　名付けセンスは無いかもしれません

見事に悪者二人は「げはっ！」や「ぐっ！」という台詞とともに吹っ飛んであたしから離れてくれた。

『ワルピー』と名づけたこの魔法は、実は村に居た時に習得した物。

テリサン村＝辺鄙な村＝自然に溢れた場所だったので、村を出て少し歩くと森やらがたくさんあった。普段の注文ぐらいなら必要魔石は川で十分事足りるのだけど、稀に特別な物を依頼されると良質な魔石がいる事が多く、それの入手手段として森などに行かなくては行けなかった。森は良質な魔石がある反面、危険度も上がり魔獣なんかもたくさん居るので自然と身を守る術を学んでいったのだった。

最初のうちは出会っては逃げるを繰り返していたけど…これがかなりキツい。１時間以上逃げた事もあって、ずっとその間隠れては走るの繰り返し…あたしアスリートじゃないし２０歳越えた女に走り続ける事を求めるなんて何の拷問？ってその時に思った。

それを経験してから真剣に攻撃の仕方を考えた。

殺してしまえば単純なのかもしれない。だけど村を襲われたならまだしも、相手のテリトリーに入り込んでるのは自分なのだから無意味な殺生するのは嫌だった。

だから魔法を使って殺さなくてすむように、だけどそれなりに強力で、あたしがやったようにはわからなければなおよろし！でうま

れた魔法が『ワルピー』だった。

基本は昔、兄達が持ってたエアガンがふっと頭に浮かんで、それを参考に魔法式を組んでみたんだけど…魔法式に座標を組み込んだのが良かった。きっちり目標物に対して左右どちらか１ｍのところに球を固定する事が出来て、実践でも思いの外上手く使え、魔獣は相手の見えない攻撃に怯えて逃げていった

「いやぁ…まさか城でも役に立つなんてね。思わなかったわ」

それぞれ互い違いの方向に吹っ飛んだ二人は水に受け止められ、水は衝撃を緩和しつつはじけ飛びそこら中が水浸しになった。受け止めるものが水だったせいで二人も全身びしょ濡れになっている。

犯罪者は倒れたまま起き上がる様子は無かったけど胸の部分が上下に動いているから命に別状は無く気を失ってるだけに見えた

「……ってぇ」

いい声男はどうやら気を失ってはないけど、膝をついた状態で空気砲を受けた部分を手で押さえているからこちらに攻撃は出来なさそうだ。

「あ～ちょっと待っててね。気を失った方を先に診るから」

「……」

あたしはいい声男にそう言うと、犯罪者の方に近寄って首で彼の脈を取り、正常な事を確かめた。上着をめくって空気砲が当たった場所を確認したが、赤くなっているだけで骨折などは起こって無さ

そうだった。

「速度指定を原チャリで考えたのがまずかったかな…」

魔獣を気絶させた事はなかったのでちょっと心配だけど、すぐに治療すれば大丈夫だろうと思う。人に見つかるまでに動かれてもやっかいなので、両手両足を自分のベルトで結んでしまう。

捕縛の魔法とか覚えてたらいいんだけど、それは「はじめてのまほうのつかいかた」には載ってなかった…

「さて…これでよし！」

で、意識のある人の方ですけど…

視線を向けるといい声男はまだ苦しそうで無理矢理笑みを浮かべているものの、瞳はこっちを睨みつけている

先に『か弱い女の子』に刃物向けたのそっちでしょうが！

ちょ、ちょっと…か弱くなかっただけですけど？

あたしは犯罪者の側から立ち上がっていい声男の方に向かう。いい声男はさすがに警戒してるらしく、片足ついた状況でもじりじり下がってくが、さっきと変わらず少し笑みを浮かべた表情でこっちを見てる。

そして下がりながらもあたしに話しかける

「……今の衝撃、君の魔法？」

「……でしたら何です？」

「…何？今の衝撃。鉄ではねられたみたいなんだけど…」

「……」

そんな大げさな、鉄だったら死んでる…多分。
…まぁ速度上げたら空気砲でも内臓破裂とかで十分殺傷能力ありそうですけどね…

「俺とキッシュほんとに同時に吹っ飛んだよね？遠隔魔法を二人同時であんなに正確って…君よほどの使い手？魔術学院にそんな子いたっけ？少なくとも俺は聞いた事ないな」

…あの犯罪者の名前は『キッシュ』らしい

「へぇ～。あの男キッシュって言うんだ。フルネームは？」
「キリアード・メルドリアって俺は聞いてる」

なるほど、仲間のお名前をすぐに教えて下さるのなら…

「貴方お名前は？」
「……」

じぃーっと同じ笑みでこっちを見つめてくるけど、答える気は無いらしい。
あたしは相手にもわかるぐらいに大きく溜息をつくと、指で拳銃のポーズをとる。
そして指先にさっきと同じ『ワルピー』を今度は直径３ｃｍで作り、肩がぶつかる程度の速度で「バンッ！」という掛け声と一緒にいい声男の眉間に飛ばす

「っ！？」

突然眉間に衝撃を受けたいい声男は後に跳ねて尻餅をついた。その顔には驚愕が浮かんでいて、ようやく笑顔の仮面が剥がれ落ちま

したよ

「貴方のお名前は？」
「……ジョゼ」
「ジョゼねぇ。何でフルネームで教えて頂けないのかしら？」
「……」

怪しさＭＡＸなんですけどね…
警備員の時の身のこなし方もこの人の方がキッシュより全然キレイだったし…魔術学院の内情知ってるのも、もしかして…

「…貴族の坊ちゃんが誘拐犯の真似は頂けないわね」
「……っ」

さぁ～って洗いざらい白状してもらいましょうか！！

３４話　絶対絶命、これって走馬灯？

異変を感じ取ったのはまず身体だった。突然全身がぞわっと総毛立つ様な感覚、その正体を確認しようとした途端に突風に襲われる。

「なっ…！」

「ごめんね、アサミズちゃん」

突如空中に現れたのはさっきの緑の髪の男、確か名前はフロなんたら…だった。

彼はジョゼの横に降り立ち、彼を冷たい視線で一瞥すると、こっちに視線をやりながら、口で何かを詠唱し始めた。

一度、ニタリと笑みを浮かべ、あたしへ向かって手を掲げてくる。

…やばいっ！！攻撃される

あたしは咄嗟にとれる防御魔法なんてたかが知れていて、その瞬間に出たのは先日ミレーヌが暴走した時に発動させた空気を固定する魔法だった。

炎があたしを包む様にして襲ってくる。だが固定された空気は遮断の役割を果たしてくれたらしく多少の暑さは感じるものの炎が直接襲ってくる事は無かった

炎の壁からちらちらと見えるフロなんとかは腕を組みながら左手を口元に持っていった状態で親指の爪を噛んでいる。顔は笑みを浮かべて人を試すような感じ。

…いい人撤回。あいつ…気持ち悪い。

しばらくその状態で耐えると、炎の攻撃が止まった
フロなんとかは同じ状態で笑ってる。

「へぇ～やっぱり君…本物のアサミズヒヨリだったんだ」
「チ・ガ・イ・マ・ス」

こんな気持ち悪いやつに本名名乗るほど頭悪くない。
ただ相手も簡単に騙されるような奴じゃないのは確かで、それを聞いて笑みを深くした

それにしても…

「…あんた…やっぱこいつらの仲間だったのね」
「…僕がこいつらと？」

そう言うとフロなんとかはジョゼが手で庇っている場所を蹴りつけた。「ぐぅっ！」というううめき声をあげてジョゼが吹っ飛ばされ、壁に叩き付けられる。

「な…なにするのっ！！」
「どうして怒るのさ？君を襲ったやつらだよ？」
「……」

フロなんとかは『人』を攻撃するのに何の躊躇も無い。それどころか笑みを浮かべてその行為を楽しんでる。

…快楽殺人者。

浮かんだ考えに…尋常じゃない汗が身体から吹き出してるのがわかる。

さっきの炎の攻撃はかなりの炎の量だったのに、フロなんとかは平然と繰り出していた。つまり彼はかなり魔力を持った上級の魔法使いだと言う事がわかる。

…こんなやつにあたしのにわか魔法が通じると思えないんだけど。

考えろ…あたし。

どうすればこの状況を打開出来る？

視線を倒れている悪者二人に向ける

悪者助けるっていうのもなぁ…でも助けないと他の子の行方わかんないし。

…でも悪者って、目の前で笑ってるやつのがよっぽどやばいじゃん。あいつに比べたらキッシュもジョゼもおこちゃまな悪さだわよ…

とにかく何か思いつくまで時間を稼ぐしかない。

「…ど、どうしてこの場所がわかったの？」

「ふふ…ヒミツさ」

あの時確かに彼は人混みをそのまま進んであたしから離れていった。変な追跡魔法をかけられた感覚も無かったし、かなり移動したこの場所を特定するなんて、広範囲の捜索魔法みたいなものを使ったとしか考えられないけど…でもその中でもあたし達だけを特定出来る程の魔法なんて…

相手の力が測れないってこんなに恐怖なんだ…

「あの手配書の絵って白黒なのがネックだよね～。はっきり特徴がわからないじゃん」

「……何の話よ」

突然話題を変えられて思わず聞き返してしまった。

「『アサミズヒヨリ』を皇帝があんなにやっきになって捜すからさ…てっきりそうだと思ったのに」

確かに筆のような物で書かれたあたしの似顔絵は白黒だった。あたしは自分の髪が黒髪だからそれに対して違和感を持ってなかったけど、この世界の人なら黒髪に違和感を感じるんだし、白黒の絵からあたしの髪の色を別に連想してもおかしくはない

しかも今のあたしは茶髪だし…

「『黒の加護』っていうぐらいだから髪が黒いのかと思ったけど、君、薄い茶色の髪してるしさ～」

『黒の加護』

…また出てきた。

どうやらこの世界であたしが過ごすには切っても切り離せないワードらしいけど…全然わかんないし。

「…そんな加護知らないし」

「そうだよねぇ。君が『黒の加護』を受けた者なのか…わからないよねぇ。瞳を見たいけど…その色眼鏡が邪魔しちゃってくれてるし」

さんきゅ～サングラス！！！心底あたしは自分の発明に感謝した。

「…殺しちゃえば確認できるかなぁ？」

「こ…殺す！？」

フロなんとかはまだ笑っていたけど、さっきと違い目は剣呑な光りを宿してる。

あたしに近づくフロなんとかの足音が響き渡る。

え～っと…黒の加護って殺しちゃっていいんですか？

つまりこの世界にいるとあたし命狙われちゃうって事ですか？

…あたし絶対絶命な気がするんですけど。

笑いながらフロなんとかがあたしに向かって手を掲げる。

「さっきみたいに試すんじゃなくて、一瞬で殺してあげるから」

そういうとフロなんとかの周りに風が巻き起こる。どうみてもさっきの炎より強力そうなそれは彼の属性が風な事を物語っていて…

…こんな時って逆に冷静になるのかもね。

渦巻いた風が切り裂く刃となってあたしに降りかかる

やけにゆっくりとその現象を見たあたしが考えたのは

もしやこれって走馬灯？やばいじゃん…あたし死ぬの？

って事だった。

35話　期待を裏切らない存在

風の刃があたしを傷つける為に向ってくる。
それが眼前まで迫った時、相当な痛みを覚悟した

『魔式、3型発動「制圧領域　オールセーフティ」』

頭の中で勝手に鳴り響く声がする。
…そして自分の顔を通り抜けたのは心地良い風だった。

「…え？」

驚いてるのはフロなんとかも同じみたいで、その場の時が止まったみたいだった

「…アサミズちゃん。何したの？俺結構本気で君殺す気だったんだけど…やっぱり『黒の加護者』って君の事なのかな？」

そんなの聞かれてもあたしが一番わからないし、逆にこっちが聞きたいわっ！！

「アサミズちゃん。殺すの止めたげるから…俺と一緒に来る？」
「…謹んでお断りします」

あたしを捕獲しようと、段々近寄ってくるフロなんとかに『ワルピー』ぶつけて見るけど、そもそもこの魔法は奇襲攻撃だから効き目が絶大なだけで、特に風属性の人にはいとも簡単に弾き飛ばされてしまう

「くくっ君って面白いね。是非ともその頭、研究したい」

…それって結局殺される気が多々とするんですけど。

「大丈夫。痛くしないから」

…信用なりません。

「さっき助けてあげたじゃん」

えぇ…そしてその後、殺されかけましたからね。

「さっきの事は忘れてよ」

「忘れられるかっ！！！」

何て会話をしてる間にすぐ側までフロなんとかが来てて、あたしの頭の上で何か詠唱し始める。逃げようと思ってもさっきの攻撃で腰が抜けたらしく…いや殺されそうになったら普通抜けるでしょ？

とにかく動けない。

「ごめんね。暴れられると困るから、ちょっと縛らせてね」

「にゃぁ～っ！！！」

縛りとかこいつが言うと卑猥な言葉に変換されるんですけどっ！！

しかも何かにぎゅっと縛られてる感じがするのは捕縛魔法ですか！？

あ～連れてかれるの決定だな。

メルフォスさん…捜してくれるかな…。

ってあたしを城内音声で呼び出したのって結局誰だったんだろ？

あたしの身体が宙に浮いたと思ったら派手な音を立てて落ちた

えぇもちろんお尻を強打しましたよ？

「っっいぃった！！！」

「……ぐっ」

フロなんとかに文句を言ってやろうと顔を向けて更にびっくり。

一瞬でフロなんとかが傷だらけになっている。

「…あれ？」

「…よくもアサミズに刃を向けたな」

自分の背後から聞こえてきた声は、地を這う様な声であたしに向けられたものじゃなくても全身に鳥肌が立った。

怖々と後を振り向くとそこに立っていたのは皇帝と……赤毛を爆発させたお姉さんで

皇帝の手はフロなんとかに向けられ、そこから水の刃が飛んでいく。横の赤毛のお姉さんはあたしに近づいてきて「大丈夫？」と声をかけてくれ、身体の束縛を解いてくれた。

腰が抜けたのも直ったみたいで、動ける感じがする

急展開すぎて頭がついていきません

え～っと…あたしさっきまで死にかけて、連れてかれようとして

たよね？
で、宙に浮いて落ちたら皇帝がいた
なんて考えてたらフロなんとかの叫び声に思考をぶったきられた。
「ぐはぅっ！！」
…おぉ～い。と、吐血してますけど
し、死んじゃいませんか？このままじゃ…
しかも攻撃の手を緩めそうにない皇帝の手に、あたしは思わず飛び込んでしまった
「ススス、スト～～～～ップ！！！し、死んじゃうからっ！！」
「…止めるな。アサミズ」
「止めるでしょうっ！！普通！！」
目の前で殺人とかありえないし！
…いやあたしも殺されかかったんだけどさ…まぁそれは死ななかったからいいじゃないって感じで…
でも目の前で他人が殺されるのとかマジ勘弁してっ！！
あたしは平和な国の日本人なんですっ！！
「止めなくても大丈夫よ」
いやいやお姉さんっ！！
貴方は何故ここにいるんですか？
この人のストッパーじゃないんですか！？

「違うわよ。貴方が怪我を負ってるかもしれないから付いてきたの」

何故か心の声を読まれて返事される。

「怪我してるのあたしじゃなくてあたし以外の人なんですけど」

あたしは無傷。本人一番びっくりしてるけど無傷！

ちょっと今の落下でお尻が痛いだけだし…

「あなたじゃないならきちんと医療部の順番守らせるわよ」

えぇ～～～！？

壁に激突して頭から血を流してる人と、意識不明者と、吐血者ですけど！？

結構みんな重傷者だと思うんですけど！？

「…それにうちの治療はいらなさそうよ？」

赤毛のお姉さん微笑を浮かべてますけど…美人さんなのに頭の爆発でかなり損してるよね。いや、そんな事は今はどうでもよくて…

お姉さんの視線を辿るとさっきまで笑みを浮かべていたフロなんとかが苦しそうに、口の血を拭ってる。

「へぇ～もぅ表、制圧してきたんだ…。無駄に能力値高すぎ」

フロなんとかが皇帝に話しかけるけど、皇帝はそれに答える事なく、あたしを手にぶら下げたまま鋭い視線をフロなんとかに向け続

けてる

「何故、アサミズを狙う」
「そんなの、貴方が一番よくわかってるでしょう？」
「…知らんな」

あたしの事を話題にされてるけど、さっぱり意味不明ですけどねしかも「知らんな」までの一拍の間って知ってるっていってるようなもんじゃないですか？でも二人ともそんなやり取りはどうでもよさそうで…

わけもわからず気になってるのはあたしだけかっ！！！

「さすがに一人で皇帝と筆頭医相手って…ちょっとしんどい」

フロなんとかはそう言うと宙へ自分の身体を浮かべ、最後にニタリと笑う

「迎えに来るから、また会おうね。アサミズちゃん」

何て悪役真っ青な捨て台詞を残して来た時と同じ様に風に乗って消えた。皇帝も赤毛のお姉さんも深追いするつもりは無いのかそのまま見送った

「アサミズ…大丈夫か？」

手にぶら下がったままのあたしに皇帝が心配そうな眼差しを向けてくれる。

「いや…ほんとにあたしは平気なんだけど……って、あぁ～～～～っあの二人!!」

あたしは皇帝の手から降りて、慌てて自分を連れてきた悪者二人を確認する。

案の定ジョゼはフロなんとかが連れて行ったみたいで、壁に血だけを残して消えていた。

…キッシュは気を失ったままその場にいた。

「…あいつに聞いても何も出てこなさそうよね」

「……」

赤毛のお姉さんに激しく同意してしまう

キッシュ…貴方ってほんとに期待を裏切らない見事な捨て駒ぶりだわ。

35話　期待を裏切らない存在（後書き）

更新遅れましたが、ちょっとだけ長くなってます
次回には色んな理由が書けるといいなと思ってます

36話　メルフォス家の事情

皇帝から紹介された赤髪爆発の美人筆頭医は『シフォンレイ・クラスグリム』と名乗ってにっこりこちらに微笑んでくる。

「『シー』って呼ばれてるから」

「あ…はい」

…にっこり笑顔は２００点満点の美人さんなのに…もったいない。

「痛いところない？」などの優しい台詞を言いながら、怪我が無いかあたしの体を念入りに調べてくれるシーさんだったけど…

……でもねどうしてもあたしの目に赤髪が飛び込んでくるのよ。

そうしたらやっぱり気になる物は気になるし

…どうやったらこんなに髪が爆発するの？これはもしかしてわざとなの？

鳥でも飼っていそうな赤髪はどうやっても櫛なんて通らない。これは断言出来る！アフロみたいなお洒落な感じは一切ないので、やっぱり鳥の巣でしかなく…

…き、気になって仕方ない。

「……」

ただ…天パなどで実は触れてはならない部分だったりしたらそれはやっかいで…聞くにきけず、あたしは手をワキワキと動かすしかなかった。

「何?どうしたの?手に怪我でもあるの?」
「いやっ…これは……怪我とかじゃないんで…」

大慌てであたしが否定すると、シーさんはもう一度微笑んでくれた。そして皇帝に向かって「大丈夫」と合図をしている

「皇帝との話が終わったら、絶対医療部に寄ってね」

あたしの耳元でそう囁くとシーさんはキッシュの方へ向った。あたしと皇帝はシーさんがキッシュを診察しているのをただじっと見ていた。

「こっちも意識ないけど、大したことないわよ」

そう言うと彼女はやって来た警備兵に気を失ったキッシュを運ばせる手配をして、皇帝には「帰るわ」という言葉と、あたしにはウィンクを一つ残し颯爽と去っていった

そして警備兵がキッシュを連れて行った後、残されたのは皇帝とあたしなわけで…

「……」
「……」

この間は何なんでしょう…質問とか今していいんですかね?
…立ち話で聞いていいのかしら?

「あのぉ～」

黒呪の事とかメルフォスさんとのつながりとか、聞きたい事はいっぱいあるんで時間は有効に使いたんだけど…ただ質問ありすぎて何から聞けばいいのかわからないってのが正直な話で。

「……あっ」

そこで今一番重大な事を忘れてた事に気付いた

「あぁ～！！！！誘拐っ！！」

すっかり命の危険に遭って頭のすみっこに追いやってました！

ご、ごめんっ誘拐された子供達っ！！

あたしは皇帝に慌てて事情を説明すれば、呆れるような皇帝の視線に晒されて…

…あたし間違った説明しましたっけ？

「…落ち着け。すでに犯人は捕縛されて、子供は保護されてる」

「へ？」

「メルフォスが近衛を指揮して、全て解決ずみだ」

「め、メルフォスさん？」

そういえば…メルフォスさん。昔、騎士だったって言ってた。

家を見に来たついでに…騎士に再就職したって事？

え～…1人でテンパって空回りをしたのすんごい恥ずかしいんですけど…

「ブジニカイケツシテヨカッタデス」

ちゃんと心はこもってる！…はず

なら、別にそちらの心配はしなくて言い訳で…やっぱりこの時間、あたしの質疑応答タイムでいいんですかね？

「さっきは…アサミズを置いて戻ってしまってすまなかった」

「……」

と思ったらびっくり皇帝が話しかけてきた。

……そう言えばそんな事もあったな。

その後に起こった事の印象がきつ過ぎて、そんな話すっかり影が薄くなってるさ。

「メルフォスさんに用事だったんですか？」

「メルフォスは、ずっと城で捜していた人間だった。12年前に騎士団長を一枚の紙で突然辞め、それ以来行方不明だった」

「行方不明！？」

普通にテリサン村で『メルフォス』で生活してましたけど…あそこ、隣国との中継地点だった筈なのに、どんだけテリサン村って隠れ家なのよ？

…しかも皇帝の探し人が全員テリサン村に居たって……ウケる。

それにしても、突然紙切れ一枚置いて責任のある立場を辞めてしまう人と、あたしの知ってる責任感の強いメルフォスさんがどうも一致しない

「よっぽどの事があったんですかねぇ…」

例えばライザ母さんに『別れるっ！』って啖呵切られたりとか…いや「あたしのせいで辞めた」みたいな事を言ってたし…。

そんな事言われたら絶対メルフォスさん、すぐ仕事やめると思うわ……ライザ母さんが関わると責任感とか無いに等しいね、あの人。

半分冗談はさておき、この話の時には二人とも深刻そうな顔してたし…何か事件があった事はわかるけど、直接聞いて二人の傷を抉る事はしたくないし、保護者の就職先が決まって解決って事で…まぁ…いっか。

と勝手に自己完結してたら皇帝が話し出した。

「メルフォスが騎士団長を辞める一月前、帝都での暴動と国境付近の町が襲撃される事件が同時に起こった…私は暴動の鎮圧を指揮し、メルフォスには国境付近の警備の強化に遠征へ出た。しかし中々思うように警備体制が整わず、子を身ごもっていた奥方の産み月になっても帝都へ戻る事が出来なかったんだ。悪い事は重なって…奥方が切迫流産で母子共に命を失いかけた。かなり辺境地に居たメルフォスがその事を知ったのは帝都に戻ってからで、彼はその時、奥方の側に居てやれなかった自分を責めた」

ライザ母さんの「ほんと絵みたいな光景だったよ」と嬉しそうに語る顔と「辞めさせたのはあたしなんだけどね」と言った時の翳った顔の意味がわかった。

…ライザ母さんの誇りと罪悪感。

騎士団長であったメルフォスさんはライザ母さんにとって誇りだった。そして夫からその場所を奪ってしまった罪悪感。出産のトラブルなど自分でどうする事が出来なかったとしても、ライザ母さんの性格なら自分自身を責め続けただろう。

ただ想像だけど中身は、そんな事があったライザ母さんから離れるのをメルフォスさんが極端に嫌がり「仕事続けろ」とライザ母さんが制止するのも聞かず我侭を押し通して、騎士団に連れ戻されないようにライザ母さんが全快するまでに全部隠して田舎に引っ越したってのが妥当だと思うけど…ライザ母さんの事、狂愛だし…あの人。

…で、今度はメルフォスさんの罪悪感で戻る事になった

だってきっとテリサン村に居る限り、ライザ母さんは性格上「あたしが辞めさせてしまった」って表には出さないけど陰で自分を責め続ける筈だし、妻のそんな様子に気付かないメルフォスさんじゃないし…

あたしとミレーヌの事がいい切欠になったんだろう。

何てまたまた自分の考えに没頭してたら、皇帝の話は続いてて

「…最近、急激に帝都の治安が悪化しつつある。メルフォスが騎士団長に戻るだけで犯罪者へかなりの抑止力となるのは明確で、国としてはメルフォスが見つかったのなら元の立場に早急に戻ってもらう必要があった」

居るだけで抑止力って…どんだけメルフォスさんって最終兵器なんですか。

「はは…そんなにすごい人なんです…ね」

あの美人の微笑みが最終兵器だとは…家族の前でどんだけ猫被ってたんだよ…

「確か『微笑みの槍使い』とか呼ばれていたな…」

得てして戦闘名に柔らかな助詞がつく人間は碌なもんじゃない。

思わず笑顔が引きつってしまう。

「私の槍の師でもあるが。今回は見つけたはいいが、騎士団長へ戻る事は散々渋られた。下流騎士として働くなどとほざいていてな。帝都に来る家族の安全を考えろと言えば一発でやる気になったが…」

…あぁ、それはとてもメルフォスさんが言いそうです

家族ラブですから…っていうかライザ母さんラブ？

「まぁ…押し付けであれ何であれ、早々に職が見つかってようございました」

そう言うと皇帝が笑った。

何故笑われる…だって無職でライザ母さんの収入に頼って『ヒモ状態』とかありえませんから…日本人『働かざるもの食うべからず』ですから

ま、これで帝都に慌てて来たメルフォスさんの件は解決したので、帝都に来てから発生した問題について解決しましょうか…

「あの…ところで皇帝…黒の加護って何で…」

何ですか?と続けようとしたところを皇帝に手で口を塞がれた

「ふごー!ふごー!」

「静かに。黒については人に聞かれたくない。私の部屋へ場所を移そう」

いや、そんな理由は初めて知ったので!

人に聞かれたくないって言いますけど、さっきのフロなんとかは『黒の加護』って何度も連発してましたんで今更な気がしますけど?

あたしの怒りなんて何処吹く風のようで、突然皇帝はあたしを横抱きに抱え上げるとすたすたと歩きだした。

「あの…」

…あたし歩けますから。

そう言おうとしたら

「何も喋らないように」

横抱きだったのでお互いの鼻があたる位置で皇帝からそう言われてしまう。すっかり自分が12歳扱いだという事を忘れていたので…キスされるかと思ってしまったじゃないか

「ぐぅぅぅぅ…」

顔が赤くなってしまってるのが自分でもわかる。

だって、ほんとにすぐ目の前に美形男がいてキスされるかも！とか錯覚したらそりゃ赤くもなるでしょう！？

人の視線から逃げたいのと、赤い顔を隠したいのであたしは皇帝の胸に素直に隠れた

えぇもちろん口も貝のようにぴったりと閉じましたよ！

３６話　メルフォス家の事情（後書き）

すみません３６話かなり修正しました。

そしたら2話分ぐらいになってしまいまして…ほんとに申し訳ないです

37話　疑問、質問、回答、解放？

現在もうお馴染みとなった皇帝の私室には魔法壁が張られ、会話や空間自体が切り離された存在となっている。前には居た宰相の姿もない。

もちろんその魔障壁を張ったのは皇帝で、あたしを前回座ったソファに下ろすと、すぐにこれらの作業を行った。

そして作業が完成するとゆっくりとした動作であたしの前のソファに座った

「さて…これで他人に話しを聞かれる心配は無い」

…あたしと貴方も他人だと思うんですけど、なんて突っ込みは飲み込む

「その色眼鏡も外して大丈夫だ」

「あ…はい」

特に外すつもりも無かったのだけど、突っ込まれてしまうとかけておく理由もないので外すしかない。

サングラスを外すと、髪の色も元の黒髪に戻る。

「色眼鏡に魔法式を組み込んでいたのか？」

「えぇ。ここに魔石をはめ込んでるんで」

あたしはそう返事をしながら、サングラスの魔石を指差す

「なるほど耳飾の魔法式も自分で組んだ物だったのだな」
「…えぇ」

皇帝はあたしからサングラスを受け取ると、興味深げに色々触っている。

ただあたし的にはそんな小道具の事はどうでもいいんで、早く自分のモヤモヤを何とかしたいんですけど…

…しばらくは待ってみた…が、話が始まる気配すらない。
さて、どうする？

どうするも何も。始まらないなら、こちらから始めるしかないでしょう。

「…そんなに黒の加護ってやばい物なんですか？」
「いや…『黒の加護』自体は魔法を扱う人間にはそれなりに知られている物だ。城の書庫にも関連書物がたくさんあるぐらいにな。……だが、それを受ける人物が実在する事は絶対に知られてはいけない筈だった」
「え～…それってもしかしてもしかしなくても、あたしの事なんですかね」

皇帝に勘違いであって欲しいと期待の眼差しを向けるが、生暖かい目で返された。

しかし、帝都で手配書とか絶対に知られてはいけないなんて言ってる割にはやってる事が無茶苦茶なんですけど…

あたしの若干引いた様子に皇帝が苦笑する

「…言いたい事はわかる。だが、アサミズの身柄を確保し保護する事が最優先だった」
「…さっきみたいに身の危険があるからって事ですか？」
確かに実際、さっき殺されかけたんだし保護対象なのはわかる。
で、次の疑問が浮かぶ。
「なら、何であの時、事情話してくれなかったんですか？それにどうして素直にあたしをテリサン村に帰してくれたんですか？…あたしの変装解きましたよね？…これっておかしくないですか？」
どんどん溢れてくる疑問をそのまま皇帝にぶつける。
だってどう考えても皇帝の行動はあたしにとってはおかしい事ばかりだ
「事情をあの時話さなかったのは、君を混乱させない為だ。それでなくても手配書の件で犯罪者や何だと混乱していただろう。あの時に君は命の危険に晒されているなど正直に話して、不安を持たせたくなかった。テリサン村へ帰したのは君に冷静になってもらう為だ。すぐに迎えに行くつもりだったんだが、さっきも話した通り、ここ最近急激に帝都の治安が悪化して動く事が出来なかったんだ」
「……」
「後は…変装か…。アサミズは魔法使いは全て瞳の色で属性が決まる、という事は知っているか？」
あ～はいはい。メルフォスさんから聞いたやつね。
あたしは肯定の意味で、何度か頷いた

「ならば今のアサミズの瞳が黒の加護を表す物だという事はわかるな」

これまた頷いて了解する

「その瞳を誤魔化すのに黒髪は最良だ」

…なぜに黒髪で目の黒さが誤魔化せるの？

頭に疑問符をたくさん浮かべると皇帝が続きを説明してくれる

「黒髪はこの国ではかなり珍しいが。居ないわけじゃない。存在するが希少な物は人の視線が集まりやすい。それに比べて黒い瞳の人間は少なくともこの国には存在しない。人の意識で存在しない物は別の何かに摩り替えられる事が多い。黒髪と比べるとアサミズの瞳は日の光に当たると茶色に見える、ならば人は地の属性だと思いこむだろう。それが茶色の髪になると瞳の黒は強調される」

つまり、木を隠すには森の中って事ですか…

「テリサン村では普通にそれで生活してても…怪しまれませんでしたけど？」

「テリサン村はこの国の中でも辺境地だ。魔法を使える物も少なければ、知識がある者も少なかっただろう？」

「でも…ガース国の旅人とか…」

「…運がよかったとしか言いようが無いな。まぁ…何か問題があったとしても、メルフォスが解決していた筈だ」

…つまりは危険はいつでもすぐ側にあったわけですか。

平々凡々と暮らしていたと思ってた生活が、実は危険と隣り合わ

せだったなんて…

何てはた迷惑な力を持ってあたしはこの世界にきてしまったのだろう

「…黒の加護って一体、何なんですか？」

「それについては、まず私の体に触れて欲しい」

そう言うと、皇帝が上着をどんどん脱いでいく。

…え？

何で自分を解放しちゃってんの！？

全く意味がわかんないんですけどぉっ！？

37話　疑問、質問、回答、解放？（後書き）

３６話かなり訂正をいれました。
話の筋は変わってませんが、内容は2倍の長さになってます。

ちょっとずつ黒の加護の事を解き明かします

今回はヒヨリの疑問、解決編でした。

38話　今月の特集『皇帝のセミヌード』はいけるっしょ！

突然脱ぎだした皇帝に対し、どこをどう突っ込んだらいいのかも解らず、途方に暮れているあたし。だけどしっかりと「見た目細いのに、意外に筋肉ついてるな…」なぁんて観察してしまうあたり…気付かなかったけど日本で流行の腐女子要素も持ってたんですかね…あたし。

「…細マッチョか」
「？細…何だ？」
「いえ…こちらの話なんで…」
「……」

しかし、美形男は何も着なくてもかっちょええのぉ～。
テリサン村では見た事なかったけど、女性雑誌とかこの国には無いのかな？
皇帝のセミヌード特集とか絶対売れると思うんだけど…

あ～…その前に購入者全員不敬罪で捕まるか…

なんて事を考えていたら…ガン見しすぎました。
え～皇帝の顔が何気に赤いのは気のせいですかね？

…不埒な女ですみません

「…で、突然何で脱ぐんですか？」

「…私の身体には黒の紋章がある」
「黒の…紋章？」

確かメルフォスさんの話では皇帝は『黒呪』をその身体に宿してるって言ってたけど…黒の紋章というのが、それなんですかね？

「ここだ…」

そう言って皇帝は自分の胸に手をあて、胸の上で拳を握りしめ目を閉じた。

そして目を開けるとあたしに向かって手を差し出してくる

…嫌な予感。
大抵こういう時の予感は当るよね。

「触れてくれ」
「……」

ん～。これは究極のセクハラなんですかね？

「……それは…ちょっと」

ごめん被りたい。
あたしは別に皇帝の『黒呪』も説明されればいいだけで…別に実証とかいらないんで
しかも呪いに触れるって自分も呪われそうでやだし……もしあたしに解除の力があったとしても現時点では無いわけだし、触れる意味ないじゃん。

「…アサミズが触れてくれれば紋章の力が解放される」
「…の、呪いが解けるって事ですか？」
「呪い？……何の事だ」
「え…だって、紋章って『黒呪』なんでしょう？」
「バカなっ！！紋章が呪いだなどと…」
「え？」

…違うんですか？

…なら、黒の紋章って何なんですかね？

っていうか、この行動、後でも良くないですか？

「せ、説明を先にして貰えませんか？」
「いいから、触れ！」

そう言うと皇帝は半ば強引にあたしの手を掴んで、自分の胸に押しあてた

「いやぁ…だ…？」

手を取られた瞬間にあたしの叫びが響き渡ったけど、触れた皇帝の胸から信じられないぐらいの魔法の力が溢れ出してきて、あたしの中にどんどん吸収されていく

「な…何なの！？」
「……ぐっ」

『契約』『共有』『魔式解放』や聞き取れない数多くの言葉があ

たしの頭に響く。まるで頭をかき回された状態で、思わず立っていられなくなってその場に膝をついた。

ようやくその状態から解放され、慌てて皇帝を見ると彼も同じ状況だったのか倒れてはいないもののこめかみを抑え苦痛に満ちた表情をしている

「…こ、皇帝？」

「大丈夫だ」

そして皇帝の胸を見て驚いた。そこにはまるで紋章のような、魔法式のような、摩訶不思議な模様が広がっている。

そんな物はさっきまで無かった。ガン見したのだから断言出来る。

「そ…それ…何？」

皇帝は愛おしそうに胸にあるそれに触れた。

「黒の紋章…やっと戻った」

「やっと…戻った？」

…この図はどうみても『皇帝再び呪われる』でしょう？

呪われてるのが嬉しいなんて…どんなマゾ男なんですか？

若干引いた視線を皇帝に向けていると、それに気付いたのか皇帝があたしに向かって膝をついた、そしてあたしの前で……頭を下げた

「アサミズ、礼を言う」

「……いえ、役に立ってよかったです」

「…アサミズが黒の加護を受ける者だと証明された。これより黒に関して全ての記憶を渡そう」

皇帝はそう言うと、あたしの額に手を翳す。

そして『魔式　α型発動『視覚領域　記憶解放』』と聞き覚えのあるフレーズの魔式を唱える

「黒とは白以外と決して混じる事なく、全ての力をその身に取り込む事が出来る。そしてその力で、この世を支えている黒の支柱。黒の加護とはその支柱の力を扱える者の事を指す。そして黒の紋章は加護を受ける者の守人だ。さぁ…支柱の記憶を辿ってくるんだ」

皇帝がそう言うのがどこか遠くの方で聞こえた。

39話　記憶のカケラ

優しく頬を撫でる風に目を開けると大きな樹の前に立っていて、足下は少し泥濘み膝までの草が生い茂っている。それは見渡す限り続いて…さっきまで城の皇帝の部屋にいた筈のあたしは溜息をついた

…またわけのわからないまま変なとこにいるんですけど?
皇帝が黒の加護の説明を何か言ってた気がするけど…後半良く覚えてない。

「どこなんですかね〜ここは?」

何だろう?
こういう事も2度目となると意外と耐性がつくらしい。

皇帝が言ってた魔式が関係してるのかも知れないけど、確かめようにも本人居ないし…
ここの人に確かめようにも周りに人っ子一人居ないし…

あたしは目を閉じてもう一度溜息をつく。身体を反転させ背中を目の前の大樹に凭れかけさせ、皇帝が言っていた魔式を何となく口ずさむ

「魔式　α型発動『視覚領域　記憶解放』」
『…アサミズヒヨリ。黒と白の加護を纏いし者』
「はっはいぃ?」

突然聞こえた声に、あたしは大樹から身を起こし辺りを確認するけれど、目視出来る範囲に人影は見当たらない。
すると背中の大樹から大きな魔力が近づき、あたしの身体をすり抜けた。すり抜けた大きな魔力は光り輝くと一度小さく集約され、再び大きくなった時にはあたしがよく知る形になっていた

「な、夏生(なつお)？」

その姿はどうみてもあたしが愛していた『夏生(なつお)』だった。

「どうして？だって、な…夏生はあたしが就職する前に…死んじゃったのに…」

だけどどう見てもそれは夏生の姿をしていて、あたしをまっすぐ見つめてくる。
あたしは自分の見ているものが信じられず、消えてしまうのが怖くて手も伸ばせない

『…アサミズヒヨリ？』

更に驚愕な事が起こった。

「な…夏生が喋ったっ！？」
『…これは喋らないの？』
「だ、だって…」

…だって犬だし。

夏だったから、夏生と名付けたあたしが一番最初に拾った犬。
その犬が喋ってる姿は１８年一緒にいて、もちろん一度も見た事

がなかった。

『これは夏生って言うんだ？君の中で一番心を許せるものの姿を形どったんだけど…』

えぇ…そりゃ夏生相手には色々人には言えないような事も言いましたよ？

言いましたけど…一番心を許せるものが犬って…どうなんでしょうね？

しかもすでに当犬は他界して、更にあたしは別世界に居るのに未だ現役で心を許せるトップってどう言う事なんでしょう…

『遠い目をしてるとこ悪いけど、君がここに居られる時間には制限があるから戻ってきて』

「制限？」

『そう、ここに居られるのは黒の紋章を持つ者、つまり君をここへ飛ばした皇帝の魔力が保つ間だけ、つまりそんなに長くないから簡潔にちゃちゃっとしてしまおうね』

…何だかノリが異様に軽く感じるのはあたしだけ？

しかも…見た目犬がそう言ってるのだから…どうなのよ？

とりあえずあたしは「はい…」と返事するしかなかった

『ではまずこの世界の仕組みから…君が居た世界をＡとして今君が居る世界をＢとする』

「ちょっと待ったぁ！！」

すんごいさり気なくあたしが居た世界とか言いましたけど…それ

ってもちろん日本の事ですよね？

「あ…あの、貴方誰なんですか？」

確実に夏生ではないですよね？

『…そこから？』

若干嫌な顔しましたよね？犬の顔なんでわからないと思ったら大間違いですよ？

あたしと夏生の付合いですから嫌な顔ぐらいすぐわかります！

『僕は黒の支柱って呼ばれている。名前は夏生でいいよ』

黒の支柱…そういえばそんな事を遠くの方で皇帝が言ってましたね。

夏生でいいって…適当だな…おぃ。

『話を戻すよ。ＡとＢの世界を君は別の異世界だと考えてるようだけど…実際はちょっと違う。君たちが地球と呼んでいるＡの中にアナストリアも在るし、君が今居るＢのアナストリアという中に地球も在る』

…いや、意味がよくわかんないんですけど？

しかも…犬が難しい言葉喋ってるから余計に意味わかんなくなる。

現実に私の世界にはガルフェルドなんて国は無かったし…無かったはず？

『並行世界って言えば納得する？Ａは白の支柱が支えてる世界。

Bは僕、黒の支柱が支えてる世界。Aは世界を白の加護で形成しているし、Bは黒の加護で形成している』

「ま…魔法なんて元の世界ではありませんでしたけど？」

『簡単に説明すると、君の世界は『縦×横×高さ』の3次元が基礎になってる。僕の世界は『物質×生命×力』が3源力が基礎になってるんだ』

「物質だって3次元の理に入ってますよ。何なんですかその基礎は…」

『だから…同じ物質でも、その3次元の法則にあてはめる事自体が白の加護なんだよ…』

……自分の考えの根底が覆されて、オーバーヒートです

はい、敢えてさっきはスルーしましたけど…

何かね、黒の他にも増えてるんですよ…自分のオプションが…

白の加護って…何？

39話　記憶のカケラ（後書き）

今回はかなり説明モードです
後2回ぐらいはこんな感じっぽいです
ただヒヨリの謎は解けると思います

４０話　使えないハイスペック

犬の夏生からの説明を受け、あたしの元の世界と今居る世界が同時に存在していて、つまり本の中とか、まるっきりファンタジーなぶっとんだ世界に来た事で無い事はわかったけど…

『それにしてもさぁ、本来ならこの二つの世界を行き来する事は不可能な筈なんだよね。どうして君はこっちに来ちゃったのかな？』

「…はい？」

…それをあたしに聞きますか？

『黒と白の加護を手にした超ハイスペックな人間なんてどの世界探しても君しかいないし』

犬に前脚で指されながらウィンクされても意味不明だし…しかもあたし珍獣決定？

『君自身で壁を越えたとしか思えないんだよね』

誰がわざと異世界に行きたいなんて願うかっ！！

あたしはちょっと怒り口調で返事した。

「じゃあ…あたしのそのハイスペックな能力使って元の世界に戻れますかね？」

『あ、それは現状、無理な感じ』

はい即答。
だったらそんなハイスペックいらね～！！！

『だから君がどうやってこの世界に来たか聞いてるんだよ。君が世界渡った原因が解らない事には解決も出来ない。つまり黒の支柱の僕だけの域を越えてる』
「……使えない」
『うわっ！さっき助けてあげたのに！』
「…？」

夏生が怒りながらさっきあたしがフロなんとかに風魔法で殺されかけた所を助けた説明をしてくれる。その説明を自棄半分で聞きながら、夏生の尻尾を見て

犬が怒る時って尻尾がぴんって立つんだよね～見た目を借りてるだけでもそれは一緒なのか…

なんて関係の無い事を考えてしまう事自体すでに自棄半分どころか完全なる現実逃避…

「でも黒の支柱の世界でどうして黒の加護を使える人間がいないんですか？」
『あのね…大きい力というのは受入れるのにそれなりの器が必要なの。僕と同じかそれ以上のね』
「…居ないんですか？そういう人」
『居たら黒の加護を持つ人間がもっといるんじゃない？』

…つまり居ないって事ね

『ちなみに白の加護と同時に黒の加護も、とかって僕も無理だか

ら』

「……」

…その先は考えたくない、考えないぞぉ～！！

『とにかく君って前例も0だし、全てにおいて未知数なわけ』

どんだけ規格外なのさ…

『で、こっからは僕の推測で、君はこちらの世界の魔力も半端ないほど持ってるけど、今はこの世界の魔法や黒の加護をきちんと使えてない。だからもしかして黒の加護をきちんと扱える様になったら、白の加護と連動させて向こうの世界に帰れるかもしれない』

「つまり『魔式、3型発動「制圧領域　オールセーフティ」』を扱えるようになれって事？」

『…黒の加護がそれだけしか無いみたいな言い方止めてくれる？』

魔式を単調なリズムで言うと夏生が片方の口角だけ上げて返事する。そんな引きつりながら返事するのを見て、ほんとの夏生には無かった人間のような感情表現が面白い。

おっと大事な先生になる人を怒らせるのは得策では無いし…

あたしはへへっと笑って誤摩化す

『後は君がこの世界に来た原因を解明する事かな』

…それが解ったら苦労しないし。何か結局この夏生の話聞いてもあたしがこの世界に居る理由とかわかんないし、珍獣扱いだし…

『とにかく黒の紋章の元で、魔法の基礎を習っておいで。後の話はそれからだ』

「えぇ～！！！何かぱぱっと教えてくれる魔法とかないの！？」

『あのね…この世界の人間は皆、生まれついた加護を持っていてもそれを扱える様にきちんと勉強と訓練を重ねる。君も才能があってもちゃんと手順を踏むしかない』

やっぱり…魔術学院に通わなきゃならないんですね…

がっくり落ち込んでいる所にさらに夏生が爆弾を投下する

『ところでさ、ありえないぐらい随分サバを読んだり嘘ついたみたいだけど…』

「うっ……」

何故そんな痛いところをつくのだろうこの犬は。

…今更絡まった誤解をどうやってほぐせと言うんだ

『別に魔術学院に年齢制限ないんだし、色々早めに訂正しておいた方がいいと思うよ？』

「…そうなの？」

『黒の加護を持つ者は利用価値が高いし、さっきみたいに命狙われたりするかもしれないからね』

「だ、大丈夫。そこんとこは、ばれないように隠すから」

カラコン入れて、髪の色変えればなんとかなるでしょう！

カラコン作らないと駄目だけど…それは白の加護でなんとかなりそうな気がするし…

『まぁ…それならいいけどさ。さて…そろそろ黒の紋章使いの魔

力が切れる。それじゃあ、勉強頑張って！』

「…よくわかんなかったけど…またね夏生」

そういうと目の前の視界がぐらりと揺れて、無数の光に襲われ目を閉じる。

そして起きたら皇帝が目の前にいた。

41話　カミングアウトは寝室で

覗き込んでる皇帝の後に見えるのは天蓋、そして背中の柔らかい感触。

やばいわ…このベッド。

寝心地サイコーだわ…出来ればもう一度今度は意識飛ばすとかじゃなくて、ちゃんとした眠りに入ってその心地を堪能したい。

上掛の下に潜り込もうとするあたしを皇帝の手が阻止する。

必死に上掛を死守するあたしとそれを剥ぎ取ろうとする皇帝。

…言葉だけだとエロさ満天だけど、実際には朝の母親と子供以外の何でもない図

「こ、らっ！起きろ！！」

「い～や～だぁ～」

あたしは決めたっ！何が何でも、もう一度寝る！

ここ最近受験勉強で睡眠時間減らしてたし、今睡眠を貪らなくていつ貪る！！

皇帝の質問とか後で結構。

…黒の支柱、つまり夏生と話して結局わかった事って、元の世界に戻るには自分が頑張れって事で、それより変に自分がハイスペックな珍獣だってわかって軽いショックを受けただけだった気がする

「あたしは傷心中です、デリケートなんです。そっとしておいて

下さい」

皇帝の手が突然止まった……もちろんお互い全力で引き合ってた力を突然一方だけが抜いた場合に起こる事はもう一方の力だけが残る事で…

あたしは見事にベッド上部に頭を強打した。

「っぐぅ!?」

「す、すまないっ!!」

いや…もうそんな言葉に反応出来る痛みじゃないです。目から星どころか大きな花火が打ち上がってまた何処かに行きかけましたから、とりあえず後頭部を抑えてのたうち回るのは許して下さい

「のぉぉぉぉ〜っ!!」

「す、すまなかった…ア、アサミズ大丈夫か?そうだっ!シーだ!医者を呼ぼう!」

オロオロする皇帝に構ってられない痛みだったんですけど…医者という言葉に思わずベッドから離れようとする皇帝の腕を思いっきり掴んだ。そしてドスの聞いた声を発しながら皇帝を睨みつけた

「げっごう”でず」

朝の親子の図から頭部強打とか恥ずかしすぎる……しかもここ、よくよく考えたら皇帝のベッドだし…

頭の花火ついでに先日ここに乗り込んで来たエリルさんの鬼の形相も襲って来た。皇帝のベッドに寝てる姿とか見られたら確実に殺

られる気がする。それでなくても命の危険があるのにこれ以上命の危険を増やしてどうするのさ

グッバイ最高ベッド。最高の寝心地をありがとう。

「お、お”ぎま”ずがら”…」

頭を抑えて起き上がろうとするあたしを今度は皇帝が抑えつける

「悪かった…寝ていろ。このままでも話は出来る」

いやいや…眠れない快適（皇帝の）ベッドに固定とか一番最悪なパターンなんですけどっ!!それなら断然、隣の部屋のソファが希望なんでっ!!

「いいです!!起きますっ!!」

「しかし…」

「起きたいんですっ!!起きるの希望です!」

とりあえず片手を上げてもうアピールしてみる。

「…大丈夫なのか?」

痛む後頭部より、事件が起きる方が断然厄介なのであたしはにっこり皇帝に笑いかける

「寝ぼけてたみたいですから!頭打って目が覚めました」

「そうか…」

そう言って皇帝が確認の為にあたしの後頭部を触る。

「っんにゃ～～～～～～！！！！」

見事に１００連発ぐらいのスターマインが打ち上がりました

＊＊＊

さっき紹介され別れた筈のシーさんがベッドの上で三角座りしたあたしの後頭部に柔らかい綿のようなもので薬を塗ってくれる。あの叫びの後、あたしは悶絶して皇帝が慌ててシーさんを呼び出し、そして今に至ります。

「…すみません。お手数おかけしまして」

「いえいえ……ぷふっ」

どうみても皇帝の寝室でベッドの上で後頭部をトントンされる図は笑いを誘う。

「……シー、笑うな」

皇帝に言われて必死で堪えるシーさんの手元が小刻みに震えてる。

「駄目っ！もう限界っ！！あはっはっはっはっ！！！」

盛大に笑い出したシーさんに、あたしは他人事だったらあたしも笑うのに…と引きつった笑顔を返すしか無く…

「あははっ！！ごめっアサミズちゃん！でも皇帝の寝室で後頭部打撲ってありえないし！！あははっ！！しかも結構強打！」
「はは…」

はい、色気なんてあったもんじゃないです。

「シー…いい加減にしろ」
「はいはい。あ～楽しかった。単なる打撲で頭の中に損傷は無さそうだけど、今日と明日に吐き気なんか感じたらすぐにあたしのところにきてね」
「…了解です」

この人達の見解は１２歳とは言え、本来２５歳の大人が寝室で打撲ってどうよ？泣きたくなってくるわっ！！

「シー、手当てが済んだら出てけ」
「ったく、こんな幼子になにしたのよ？皇帝様は？」
「なっ！？ち、違う！！断じて違うっ！！」

…幼子？それってあたしの事？

「まさかリュージュがそんなロリ好きだったなんて…ショックだわ…」

目の前の二人はまだロリだの子供だの言い争ってるんだけど…もしかしてこれってサバを訂正する絶好のチャンス？
そのまま突っ走る気でいたけど…黒の支柱にも訂正した方がって言われたし、メルフォスさん達にも信頼出来る人には言った方がいいって言われたしなぁ…

それに皇帝の黒の紋章って黒の加護者を守る人だって言ってたし、バレても怒られないよね？最悪怒られても今ならハイスペック持ちだし、白黒の加護者だし…罰せられたとしてもなんとかなると思うし……言っちゃうか。

「だから！！違うと言ってるだろうっ！！こんなお子ちゃまにそんな事するか！！お前の頭の中の方がおかしいだろうがっ！！」

皇帝の台詞にあたしの片眉がくいっと上がる

こんなお子ちゃま…？

あ～何かその台詞、気持ちいい程古傷を抉るんですけど。
昔言われた事あるんだよねぇ～元カレに

『お前見た目そこそこ可愛いけどさ、一緒に歩いてるとお子ちゃま連れてるみたいなんだわ。悪いこんなつもりじゃなかったんだけど別れて』

…えぇ、一方的に告ってきた相手と付合ったら、こっちがさんざんな振られ方して傷つきましたよ。どうせあたしは見た目お子ちゃまですからね。

でも中身は立派な大人なんで、しっかり仕返ししてやりましたけど？何か？

「あの～」

あたしの声なんて聞こえてないのか二人の争いはヒートアップし

ていく。
どっかで見た光景だって思ったらこれって宰相と皇帝でもやってなかった？
ここの上層部はこういう人を無視して言い争うのが好きなのか？
あたしはあの時と同じ様に大きく息を吸い込むと二人の声をかき消すぐらいに大声で叫んだ
「お子ちゃま談義に花を咲かせてるとこすみませんけどっ！！あたしほんとは２５歳なんで、その話題関係ないんですけどっ！！」
…あぁ…叫んだら頭に響く。
ぴたっと止まった二人がぎぎぎっと音が出そうな感じでこっちを振り向く。先に立ちなおったのは皇帝みたいで
「に…じゅう…ご？」
「はい、見た目こんなですけど成人してるんで」
「だが…あの時は、１２歳だと…」
「そう言ったのは皇帝であたしじゃないです。あの場で訂正出来なかったあたしも悪いんですけど…まぁ今訂正出来て良かったです」
…それにしても二人ともすごい驚きようなんですけど。
１２歳って言った時よりも確実に驚かれてるよね。
そ～んなにあたし２５歳に見えないですかね？

あぁ、何か今日は色々ハートブレイクだわ…

42話　黒の凸凹

年齢のカミングアウトという暴挙に出たあたしに待っていたのは、罪に問われるなどでは無く、どうやったらこんな体型を保てるの？と医学的に疑問を持った医師の身体測定という名の超セクハラ、「生命の神秘だわ…」と聞こえた呟きには思わず右手が出そうになったけど、キラキラした瞳でこちら見つめる姿に心が萎えた。

「残念っ！！タイムリミットだわ」

心底残念そうに言った医師に対し、あたしはガッツポーズを捧げよう。

あたし頑張ったよ！よく耐えた！よくやった自分！！

「まだまだ色々知りたいけど！でも…嫌われたくないし我慢するわっ！」

ぐぇ…これ以上って何する気？精神的疲労が半端ないんですけど…嫌われたくないというか…もうすでにあたしの中で要注意人物決定ですけどね。

「それじゃリュージュ。あたしこれから手術だから、これ以上アサミズちゃんに傷つくらないでよ！ほんっとに怒るからね！！」

「するかっ！！！」

「アサミズちゃん！！『またね！！』」

医師は皇帝の言葉を受けながらも微笑んで、あたしに手を振って去っていった。『またね』部分の強調は無かった事にして貰いたい…心からそう願います。

…で感じる視線。その方向に目を向けるとじっとりこっちを見つめる皇帝と目が合った……何か言いたげ？

「…何ですか？」

「年齢の他は……信じていいのか？」

…はい、選択の時が参りました。ここで全部話すべきか否か。困った…なんせ会うの3回目だし、ずっと一緒に居てくれたメルフォスさん一家みたいに全部信じるとは思えないんだよねぇ…現に城内でさっき襲われてるしさ。

「…嘘はついてます。でもその内容を話せる程、私は貴方の事を知らないので…」

「……」

後頭部の痛みが気になりながらも、さらに気になるのは目の前にどんよりと座る皇帝…はっきり言って鬱陶しい。「私は信用されてないのだな…」とかぶつぶつ呟くの止めて頂きたいんですけど。

「あたしは…信用って築くものだと思うんです。あたしと皇帝の間にそんな時間は無かったんで…」

というかこの世界に来て一番初めに剣を突きつけてきた人をどうやって信用しろと？出会いは殺されかけて最悪、2回目も手配書の件でこっち縮こまりっぱなしだし、3回目はあたしを迎えに来たと言いながらあたし置いて帰って、追いかけて来たら殺されかけたし……

あ、あたし殺されかけまくってんじゃん……これ信用とか以前の問題じゃね？

あたしが回想でこれは無理でしょ！とか思ってると、皇帝がぼそぼそ喋り出す

「…黒の紋章使いは、全身全霊をかけて黒の加護者を守る使命を持っている。私は君を守りたいんだ」

「…待って下さい。一国の王様が一人を守るとか駄目でしょ。ザッ博愛精神ですよ？別に精神的にはメルフォスさん一家に守られてますし、実力行使的にもこちらの魔法覚えたらなんとかなりそうですし、守ってもらわ…」

途端に捨てられた仔犬の目をする皇帝に、続く言葉が詰まってしまう

皇帝はあたしと目が合うとその目を伏せ、紋章がある部分の服をぎゅっと掴んだ。

「私は…産まれた時からこの紋章と共にあった。それは皇帝になる前からずっとだ…ずっと今までに現れた事の無い黒の加護者を夢に見て来て…やっと目の前に現れてくれたのに皇帝だからと…」

…いや、それ完璧呪いだし、『黒呪』ってあながち嘘じゃないわ。

『黒の紋章使いだから黒の加護者を守らなくちゃいけない』

これって小さい子供に『使命』という刷り込み教育するようなもんでしょう？例え黒の紋章使いである事によって何らかのオプションを手に入れていたとしても…この考えは受入れられない。

使命とか運命とか…自分自身以外の手で左右される人生なんてあっていい筈がないっ！

そう！いい筈がない！あたしだって勝手にこの世界に飛ばされていい筈がないっ！！

…こほん。話がずれたけど、つまりこの皇帝はその刷り込み教育によって黒の加護者が出現すると自動的にそれの保護者にならざるをえない立場にいるってわけよね？

「…アサミズ」
「…でもそれってあたしじゃなくてもいいんですよね？」
「アサミズ？」

だって黒の加護者であれば誰でもいいのであって、あたしである必要は無い。

「……そんな呪い…あたしが解いてあげます」

そんなものに捕われてたら、この人の一生勝手にあたしに捧げられてしまうし、そんなのごめん被りたい。自分だけでも精一杯なのに人の一生背負わされるなんて無理に決まってる。

「呪いなんかじゃないと言ってるだろう」
「……」

いえ、正しくそれは呪いです『黒呪』です。しかも双方にとってのね。

紋章の件は黒の支柱に言えば何とかなるような気がする、でも黒の支柱に会うにはあたしがこの世界の魔法を覚えるという課題をク

リアしなくちゃいけない。

「よしっ！とりあえず目先の目標見つかった。あたし頑張って魔法覚えます」

「…ならば私はアサミズの信頼を得られるように努力しよう」

こうして思惑の違う、黒の凸凹コンビ？は出来上がった

４２話　黒の凸凹（後書き）

たくさんの方に読んで頂いて嬉しいです。
ｔｗｉｔｔｅｒのなろう読んだの感想も拝見しています。

心から感謝を込めて
ありがとうございます。

活動報告を使い出しました
とりあえず私のイメージ画を載せていく予定です。
自分の中のイメージが壊れる！という方は無視して下さい

というわけで今回は閑話ではなくイメージ画で…

４３話　天性のスターに凡人の気持ちは届かない（前書き）

評価ポイントが１０，０００ｐｔを越えました

読者の皆様がいて下さっての作品だと思っています

ありがとうございました

４３話　天性のスターに凡人の気持ちは届かない

全身全霊であたしを保護したい皇帝と、それを断固拒否するあたし。もちろん話し合いは平行線に決まってて…

「後見人にはメルフォス一家がなってくれるって言ってるからそれでいいでしょうがっ！！」

え？敬語はどこいったんだって？

そんなものはこの台詞を１０回ぐらい言ったところで消えて無くなりましたよ。

「だから何故だ？メルフォスの立場は今はすでに帝国騎士団長だぞ。それならば皇帝の私と立場はそう違わない。ならば私でもいいではないかっ！！」

皇帝の言い分に思わず頭を抱えたくなる。さっきからこの会話を繰り返してるけど、一向に相手が折れない。

あのさ…この国の一番偉い人と２番か３番じゃ全然違うし、皇帝の後見なんていう、どこぞの葵の印籠みたいな物を持って魔術学院入学してみなさいよ…どうなるかなんて一目瞭然すぎるでしょ？

心の底から平凡に暮らしたいあたしにとって、それは拷問に近い状況を生み出すって事を何故この人は理解してくれないんだろう…あ、あれか？産まれた時から人の視線のど真ん中に居た人にはこの話は理解し難い事なんだろうか？厄介だ…厄介すぎる。

あたし的にメルフォスさんの後見であれば、多少のやっかみは受けるかもしれないけど全然ましって感じだと思う。それにミレーヌも一緒に入学予定だし、実子と後見だったらどうみても注目される

のは実子であって、上手くやれば後見なんておまけみたいな扱いしかされない筈。

…全然ミレーヌを人身御供にしようなんて考えてないですよ？ただ彼女よりはちょっと長い年生きてるってだけです。何かあったら義姉としてちゃんと守りますし…もちろん影からですけどね…というわけで

「私の都合もメルフォスさんの後見の方がいいんです」

「だが…アサミズは手配書で私の探し人だと少なくとも帝都ではかなり知られている。先ほどのように、いつどんな危険が舞い込むかわからない。私の後見であれば少なくとも多少は牽制になる筈だ」

誰のせいじゃ～～っ！！！と叫びたいのを飲み込んで、にっこり微笑んであたしの対策を説明する。

「もちろん面が割れてるのは百も承知してるんで、それなりの対策は考えてます。っていうか髪と瞳と化粧すれば、大抵の人には気付かれないでしょうし」

これでも『２５歳』ある程度化粧での化け方だって覚えてるし、髪ももっと念入りにカラコンだって製作しちゃって変装モード完璧にするしさ。そんなあたしの変装を見破る人なんて皆無だと思うわけよ

あ…眼鏡っ子とかもいけるか？三つ編みお下げで黒の法衣なんてきた日にゃ……どこぞのコスプレ大会。

自分の考えが暴走してると、皇帝がむくれた感じの声で思考を遮断してくれた

「私は髪の違いでも気付いたぞ…」
「そんなのは黒の加護者ぞっこんラブなだけです」

はい、ずばっと切り捨てます。だって刷り込み教育は危険ですからねっ！！
ずぅ～んと落ち込む皇帝の傷なんて舐めてやりませんから、これも黒の加護者ぞっこんラブからの脱却、第一歩です。

…ってぞっこんラブっていつの言葉だよ。完全なる死語を生き返らせてしまった…。

「それにあたしの完璧な変装を見破るような輩は皇帝の後見なんて痛くも痒くも無い人達でしょうから、皇帝の後見におまけでついてくる余計な輩の方が断然迷惑です」
「……」

追い討ちをかけた第二歩目はかなり効いてるようで、潤んだ目が今にも泣きそうな感じ。イケメンは何でも絵になりますね～って傍から見てる分にはいいんですけど、当事者のあたしにとってはいい大人がそんな事をして…としか感じず、せめて捨て犬程度の目で勘弁して下さいと切に願います。あたしの「いい大人が…」視線を感じ取ったのか、少し皇帝は顔を引き締めるとあたしに問いかけてくる

「…ならば、アサミズは私に何をして欲しい？」
「『国の為』にも関わらないで頂けるのが一番かと…」

残酷な事を言ってるのかもしれないけど、あたしの側にいるとこの人は刷り込み教育が発揮されてしまうのだから、離れているのがこの国の為。

…それがあたしの為だなんて、そんなおこがましい事微塵も感じてませんよ！

「…無理だ。それならば…アサミズを城に閉じ込めてしまう」

「はぃ？」

…なぜいきなり監禁発言？

しかもどうして危ない発言をした人が顔を背けて苦しそうな顔をするのさ…

「国の為と言うならば…アサミズを城に閉じ込め、私の目に届くところに置いておかなくては完全には国政に集中出来ない」

待て待て待て～！！！怖いっ！！その発言盲目過ぎて怖い！！

あたしが無言で皇帝の危険発言にどう対処していいのか頭がフル回転している間も皇帝は言葉を続ける

「…そんな事は出来ない事もわかっている。だが、これでもかなり譲歩してるんだ…。全く関わるななど…言わないでくれ」

ですよね～我慢はよくない！

ストレスは溜め込むと大爆発起こしますからねっ！この場合どうみても大爆発の被害はあたしだけにくるようですし、そんな大爆発、対応出来る自信ないですからっ！！

「じゃ、じゃあ！こうしましょう！！」

とりあえず何も思いついてないけど…思いついたフリをした。

…いや、だって皇帝の顔見てると今にも大爆発起こしそうなんですもん。

43話　天性のスターに凡人の気持ちは届かない（後書き）

どんどん皇帝がヘタレになっていくのを止められません。

…ヘタレなのは日和の前だけなのですが、日和視点だとこうなってしまうのでしょうね…

４４話　駆け引きに爆弾は重要です

さて…今とても困った状況にいます。期待を込めた目で見つめてくる皇帝の視線に焼き殺されそうです。その場しのぎの言葉って駄目ですね…「こうしましょう」の『こ』の字も思い浮かびません…

「あぁのぉ…」

どうする？どうやってこの難局を乗り越える？

…とにかく接点はひたすら少なく、それでもこの黒の加護者ぞっこんラブを納得させる方法は…

「あっ！」

そうだっ！あれにしようっ！！

ただ下手に話すと全く受け入れて貰えない危険性があるし…あたしは思いついた事をどうやって皇帝に伝えるか言葉をゆっくり選ぶ

「あの…皇帝」

「何だ？私に何をして欲しい？」

どうやって相手を納得させるかはここからすでに戦いは始まってる。

頑張れあたしの営業魂っ！！

「出会いが出会いだったので、今のままでは…いくら皇帝が側にいてもあたしが信頼出来るようになるとは思えないんです」

「……それで？」

「私の故郷には毎月手紙を書く事を条件に学校へ行く事を支援し

て頂くというシステムがあるんです。だからそれにちなんで私毎月皇帝にお手紙書きますので、ひっそりこっそり陰から支援して頂くというのはいかがなものかと…これならば私も故郷であった事なので受け入れやすいですし…貴方の事もわかるのではないでしょうか？」

…えぇ、これはもちろんあの有名な童話ですよ。勝手にシステム化したのはご愛嬌です。これならば皇帝との接点は最低限、支援というのもこちらに不足がなければ受け取らなくて済む話

「…陰から？」

「はいっ！陰からでお願いします！皇帝が表立って身内でもない一個人に肩入れするのはやはり色んな方面から見てもどうかと思いますので…」

沈黙の時間…皇帝は顎に手をあてて何かを考えてる。あたしは心の中で両手を組んで祈りを捧げた…無宗教だけど、この世界に神様がいるのならあたしの願いを聞き入れて！！

「そのシステムは…アサミズに会うことは出来ないのか？」

「え？……あの…その…」

一切会えないとか返事したら、全部却下されそうだし…ここは秘儀『営業駆け引き』

「一切会えないわけでは無いです。ただ本来支援されてる人は支援者の顔は知らないシステムですから、他の人にばれてはいけないシステムなので、会う機会があっても見知らぬ人のように接すると思います」

「見知らぬ人…」

あぁ…やばい…皇帝の気持ちが否定に向ってるのが手に取るようにわかる。

「で、でも！あたしと皇帝は見知らぬ人じゃないですし、秘密裏に会うのなんかどうでしょう！ほらっ！紋章使いと加護者の二人だけの秘密とかいいじゃないですかっ！」

「紋章使いと加護者の秘密…」

よかった…かなり肯定に気持ちが戻ってきたぞ…最後のもう一押し！

だけどその前に確認しなくちゃいけない事がある

「ところで全然別の話なんですけど、魔術学校って入学資格っどんな感じなんですか」

「魔術学校のか？…確か貴族は魔力を持つものであれば簡単な実技テストだけで優先的に入学出来る。そして枠は少ないが平民からも筆記試験と実技で入学することが出来る筈だ」

「年齢制限は？」

「特には設けていない。魔力は血の系統によるものが多いからな、必然的に貴族に集中している。故に平民で魔力の才能を持つもの自体が希少だ。貴族は１０歳前後で入学するのが普通だが、平民枠は子供から大人まで幅広い」

よしよし。あたしの期待通り。

夏生から年齢制限が無いって聞いて、それなら実力社会なんじゃないのか？ってちょっと思ったのよね…

「平民が試験を受ける時って後見っているんですか？」

「いや、さっきも言ったとおり平民の中で魔力を持ってる事が稀

だからな、平民クラスは実力世界だ」
「平民クラス？」
「あぁ。貴族と平民では魔術学院の中でもクラスが分かれる」
なるほど…なるほど。
「あのぉ～もしメルフォスさんの後見で入学するとなると、貴族扱いなんですかね？」
「もちろんだ。メルフォスはグライバール侯爵家の者だからな」
…おぉ！ある程度予想はしてたけどメルフォスさんはやっぱり貴族様だったんだ。しかも確か侯爵って上位の家柄じゃなかったっけ？という事はミレーヌとは貴族クラスか…う～ん。これはメルフォスさんの後見人程度でも注目される事になっちゃいそうだ。ミレーヌと別れるのは寂しいけど仕方ない
え？何でかって？そりゃもちろん
「あたしメルフォスさんの後見もお断りして、平民で一般受験しますから」
ま、その為に試験勉強して来たんだし…ミレーヌの試験勉強は全く無意味だったけど…
「メルフォスさんが貴族だって事を知らなかったので身元引受人をお願いしましたけど、皇帝の後見もお断りした以上、彼の後見も受けないっていう方が平等ですよね」
「ちょっ、ちょっと待て！アサミズ！！」
「あたし頑張りますから、これであたしの話受け入れて貰えますよね？」

とにかくあたしは平穏な日々を過ごしたい。それはテリサン村でも魔術学院でも一緒。

で…最後に爆弾を投下します

「受け入れてもらえないと、あたし学校には行かないで修行の旅に出ますから。お手紙どころか居場所さえご連絡出来ないかもしれません」

「っ！？」

にっこり笑って皇帝を見ると、彼の背後に白旗が見えました。

とりあえず一勝。『脱・黒の加護者ぞっこんラブ』も三歩ぐらい進んだ気がします

４５話　『今更』な事は危険分子を含んでます（前書き）

逆ユーザーお気に入りが１００件になりました。
アクセス数も２００万ＰＶと４０万ユニークとなりました
心から感謝いたします

４５話　『今更』な事は危険分子を含んでます

してやったりでにこやかに笑うあたしと引きつった顔の皇帝。何か喋ろうとしては言葉を飲み込んでる姿は哀れかもしれない。

でもあたしも引き下がるつもりも無い。何と言っても未来がかかってますからっ！！

「…わかった。そのシステムを受入れよう」

よしっ！！あたしは心の中でガッツポーツを決めた。

これが営業先なら営業成績上がるのになぁ…なんてちょっと郷愁にかられて、どんな郷愁だよっ！って自分で突っ込んでしまう悲しさ…。

「ありがとうございます！」

自分が喜ぶ事をされたらきちんと相手にその気持ちを伝える！これ重要！

言葉にしないと伝わらない事って多いし、どんなに身近な人でも大事だとあたしは思ってる！お礼と一緒にしたのは綺麗なお辞儀。まぁこれは営業の必須アイテム。会釈１５度、敬礼３０度、最敬礼は４５度！こういう時自分にはしっかり社会人が身に付いてるって思うのよね。

今はお礼だから敬礼３０度！

言葉と一緒に下げた頭の向こうではっと息を呑む音が聞こえた

「皇帝？」

何だろう？疑問に思って皇帝を見ると少し驚いた顔

「こういう姿を見ると…やはりアサミズは成人してるのだなと感じさせられる」

ん？褒めてるようで何気に失礼？

思わず口元を引きつらせながら返事してしまう

「こんなの貴族社会だったら、礼儀で当たり前なんじゃないんですか？」

「あぁ…女性は少し形は違うがな。だが礼儀で習った事とは言え、子供では形ばかりのものがほとんどだ。作法の仕草に気持ちを載せる事が出来るのはやはりある程度の年齢を重ねていなければ出来ないものさ」

「…皇帝も大変ですね」

…なるほどね。皇帝ともなればそれだけたくさんの人に傅かれてるだろうし、礼儀一つで相手を判断する事もあるんだろうね。

う～ん。初めて目の前の人が皇帝なんだって感じた。

「アサミズの礼は…とても暖かいな」

…礼に暖かいとかあるんですか？言ってる意味がわからないんですけど…

あたしの怪訝な様子を見て皇帝が苦笑する。

「…上辺だけの感謝など…冷たいものだ」
「あ…なるほど」

確かにさっきのありがとうには、ちゃんと感謝をぎゅうぎゅうに詰め込めましたから！それにしても、あたし『皇帝』自体を呼び名みたいに使ってますけど…皇帝ってこの国で一番偉い人なんだよねぇ～…ってしみじみ思っちゃったけどさ

「はは…」

やな事に気付いてしまった。
あたし…そもそもの礼儀がなっちゃいないんですけど…？

「…アサミズ？」

よくよく考えたら『皇帝』って呼び捨てるの果てしなく失礼じゃない？
普通『陛下』だったり、『皇帝陛下』だったり…名前は…何だっけ？まぁ…『～様』だったり…やばい…汗出て来た

『皇帝陛下』と呼ぶべきか…『陛下』と呼ぶべきか…

「アサミズ…様子が変だぞ」
「こ……」

「皇帝…」と言いかけた口を慌てて両手で塞ぐ。

のぉ～～～！！返事も出来ないっ！！

「アサミズ…どうした？」

あたしは口を抑えながら首を小刻みに左右に振る。いや…だって何て呼んでいいかわかんないんです。パニックです！
取りあえずバクバクする心臓を抑えて、呼吸を整える
落ち着けあたし…。何でこうなった？

思い出せあたし…最初はちゃんと呼んでた……多分…。
そうだっ！ちゃんと『陛下』って呼んでたよ！あたしっ！

「へ、陛下…」
「……」

そう呼んだ途端に皇帝の眉が吊り上がった…。
えぇっ！？どうして怒るの？

…ど、どもったのが悪かった？

「陛下…」

いやぁ～！！冷気が漂ってます！ミレーヌと同じ現象なんですけどっ！！
慌てて対処の魔法を発動させたけど、それも気に入らないのかどんどん部屋が氷ついてく…

え～この防護魔法どれぐらいまで保つんですかね？

いくら空気を固定して熱を遮断してるとは言え、限界があるのは確実で…早くこの状況を打破しなくてはならないのだけど、全くもって皇帝が怒る理由がわからない。

…つまりそう言う場合は…

「どうして怒ってるんですかぁ！！！」

と本人に聞くのが一番です。

「何故怒ってるか…と聞くのか？」

地を這うような声で返事されても、死を目前に控えた人間には効きませんよ…多分

おぅ吹雪まで出てきましたよっ！！すごいなっおいっ！イリュージョンじゃん！！

「だってわかんないですからっ！！」

確実にこのままだと普通に死にますから…必死です

部屋で遭難しそうですっ！！

「……どうして……」

「……はぃぃ？」

今や雪が暴雪と化したせいで、上手く皇帝の言葉が聞き取れない。

「皇帝っ！！！死ぬからっ！！！！！死んじゃうからっ！！！」

必死に叫んだ言葉が皇帝に届いたのか、それまでの景色が嘘のよ

うに元の状態に戻った。最初はあまりの変化にあたしはただ茫然としてしまったけど……だんだん浮かんできたのは怒りで…

あたしは拳を握ると皇帝の頭に思いっきり落とした

「っく!!」

「バカかっ!!!殺す気かっ!!守護者が守る人殺してどうすんのよっ!!」

……あたし今思いっきり殴ったんですけど、何でこの人笑ってるんですかね?

ドMですか?この人…

「……良かった」

ふわりと微笑む姿は美形だけに美しく…頭に置いた手が邪魔だけど、それには文句は言えない。それにしてもやっぱり発言も変なんですけど…頭叩いておかしくなりました?

「…良かったって何がよ?」

「すまない。今まで…気軽に皇帝と呼ばれていたのに…突然…『陛下』だなんて…壁を作られて…暴走した」

…はぃ?

つまり…あたしがただ『陛下』と呼んだから暴走した…と?

「ど…どんだけ危険分子なんですか…。他にも起爆スイッチあっ

たら前もって教えといて下さいよ」
「…普段はこんな事はない。アサミズだけだ…」
「…はい？」
「アサミズに関してだけは…理性が保てない」

あたし自身が起爆スイッチかよっ！！
きっと…これも全て『黒呪』のせいに違いなく。

あたしは心の中で『絶対呪いを解く！』と念のように唱える

それにしても…さっきは勢いでまた『皇帝』と言ってしまったけど、そのまま呼び続けるのは礼儀に反すると自覚してしまった以上出来そうにない。

でも…変に『陛下』とかで呼ぶと、どんな起爆スイッチが潜んでるかわからないし…

……

「あの…皇帝と呼ぶのは失礼ですので…」

やばい…ちょっとでも敬語を使おうもんなら…起爆だ…。

「もっと親しく呼びたいな！…な、な、何て呼べばいい？」

おぉ…ほんとに嬉しそうだよ。仔犬みたい…ちょっと可愛い…。

絆されるなっ！待てあたしっ！！
この可愛さの両隣は起爆スイッチだからっ！危ないからっ！！

「出来るなら名前で呼んでほしい」
「名前？」
「ああ」

……名前。
えぇ…名前お伺いしましたよね？お伺いした事は覚えてます…。
やたら長い名前だったなぁ～って記憶の底にありましたよ…。

「なまえ…」

あぁ…期待を込めた仔犬の視線
必死に記憶を遡るあたしの頭に要注意人物の医者が出て来た

『じゃあね、リュージュ』

彼女が言った言葉が蘇る。

「リュー…ジュ？」

その言葉をあたしが言った途端、皇帝リュージュの顔が今までの笑顔など比べ物にならないぐらいの満開の花が咲いた。
この顔だけできっと何人もの人が跪くに違いない。

び…美形って凄い。

「アサミズに…名前を呼ばれるのはこうも嬉しいものなのだな…」

きた～っ！！！

お医者様！要注意人物だけどありがとう！！

今日の教訓、『今更』な事はきちんと相手に確認しましょう。

４５話　『今更』な事は危険分子を含んでます（後書き）

少し長いです。
ようやく日和に皇帝を名前で呼ばせる事に成功しました
活動報告でラフ画その２『皇帝』を載せました

46話　怪しい入学願書

皇帝、もといリュージュと無事和解？をして、メルフォスさんの無事も確認して帝都から村に戻って1週間後その通知は自宅に魔法便で届いた。

「あ…来た」

魔力の渦からでかい箱が出てくる。

やたらめったら豪華な箱に入ったそれは、待ちわびていないようで待ちわびたもの［帝国魔術学院　入学願書］と箱の上部に記載されてる。必死にメルフォスさん一家も説得して、平民として願書を出す事に納得してもらってようやく手に入れたもの。実はミレーヌにはまだ内緒だったりするけれど…

「…にしてもでかいな」

願書って…紙なんじゃないの？何でこんなでかいの？なんて考えたけど…このままにしててもしょうがないし、とりあえず開けてみる事にした。ゆっくり開いた箱の中身を見て思わず一度閉じてしまった。

「……？」

あたしの目がおかしいの？だけどどう見ても箱の中に入ってたのは…確認する為にもう一度箱を開いてみる。やっぱり箱の殆どを占めてるのは真っ白な卵。きちんとスタンド見たいな物に支えられてるから転倒はしなさそうだけど…何故、願書に卵？

「え～…っと？」

卵の横に申し訳なさそうに封筒が挟まれていて、多分この卵の説明もそれに書いてありそうなんだけど、取ろうとしたらどうやっても卵に手があたってしまう。

「とりあえず…卵を避難させちゃおうか…」

資料の確認はその後でもいいわけで、卵も試験に関わる物なんだろうし…傷つければそれだけで試験に落ちてしまう可能性もあるのだから。あたしは慎重に手を卵に伸ばしてそっとそれに触れた。卵に見えたそれの感触は想像していた物と全然違って、まるで柔らかいゴムのような感触だった。そして触れた途端、その部分から魔力が掃除機のように大量に吸収されていく

「うひゃぁっ！！！」

慌てて手を離そうとしたけど全く離れず、まるで触れた部分が吸盤のようになってる。無理をすれば簡単に壊れそうなそれに為す術もなくただ魔力が流れ込んでいくのを見守るしかなかった…

「…ん～どうする？」

このまま魔力吸い取られて死んじゃう？…なんて考えたりもしたんだけど、悲しいかなあたしの魔力は無尽蔵にあるらしく…身体は全然平気。中腰という無力な体勢のまま、卵の方から離れてくれるのを待つしか無い。

そのまま5分経過。

「……どうしろっての？コレ…さすがに腰が辛い」

白い卵が何だかグレーに色付いてきたのは気のせい？
説明を記載されてるであろう願書を取ろうにも両手が吸着された状態ではそれも叶わず
ただ時間だけが１０分・３０分・１時間と過ぎていく。腰が悲鳴を上げ始めた頃、卵にはっきりとした変化が出始め、ほのかな色合いだったグレーはいつの間にか銀の卵と化してる。

…魔力を使って鉱物を作る卵？

卵が鈍く光って硬度が増してきてる気がするし、これが実技試験と言われるとなるほどと思う。思うけどさ！せめて触れないように卵を覆うとかして送ろうよっ！と相手はいないけど文句を言いたくなる。

「…誰かぁ～せめて椅子を下さ～い」

あたしのわずかな願いは空を舞い、腰が限界を越え一歩も動けない状況になった段階でようやく卵が手から離れた。時間にして3時間半。今や輝かしく硬い銀の卵となった物体が目の前に鎮座している。とりあえず箱から出して机に置いてみたけど意外と重さもあった。

「……」

もしかして実技試験で目の前で錬成しなきゃならない物だったら、あたしすでに失格？

「と、とにかく説明書…」

あたしは箱に残った封筒を開けると、とりあえず流し見で卵の説明が書かれた物を探した。

「［同封の魔魂について］…これかな？」

『魔魂』って、また物騒な名前だし…と心の中でビビりつつ、説明書を開く。そして書かれた内容に目が点になった。

『魔魂の取り扱い方』

魔魂は魔力を持った者の魔を吸い取りそれを聖獣化するものである。学院での授業に聖獣を使役する授業があります。聖獣化するには膨大な魔力を必要とする為、魔魂への魔力の注入作業は日々行って下さい。柔らかい表皮が魔力によって硬化していく様子をレポートにて提出。課題とします。一日の魔力注入量は魔魂自体が注入者の体調によって調整しますので魔力を吸いつくされる事はありません

注意）万が一にも聖獣化する事は無いと思われますが、硬度が金属程度になると孵化が始まります。

主な聖獣化例　主に鳥型、猫型、鼠型が多い。魔力によって大型が生まれる場合もあるが、めったにない特異例である

「硬度が…金属？」

あたしは恐る恐る目の前にある卵を側にあった金属棒で軽く叩いてみる。響く音は正しく『カーンカーン』という高い金属音。

「…まさかね？だって万が一にも無いって書いてあるし…」

…ただこういう時、頭に過るのは自分の『無駄』なハイスペック。

目の前の金属が揺れ始めたのは…誰も居ないけれど誰かが机を揺らしたのだと思いたい

46話　怪しい入学願書（後書き）

この話から第二章の扱いになります。

第二章は魔術学院編です

よろしくお願いします

47話　こんなん出ましたけど…

揺れ動く物体を手で触れるわけにもいかず…とりあえず手近にあった願書が送られてきた箱を逆さにして被せてみた。…別に臭い物には蓋をしろではないけれど、一旦視界からアウトさせて落ち着きたい。

「さて…どうしよう」

カタカタなる目の前の箱はちょっとでも振動を与えると割れ始めそうな気配で…っていうかむしろそれを望んでそうな感じがする。

「割って！割って！」…みたいな？

…このまま試験に持っていくか？とも考えたけど、そんな事をすれば折角手に入れた平凡な日々が粉々に砕け散りそうだし…まぁそれよりもこれを帝都まで割らずに持って運ぶ自信も無い。

「…お願いします。出来る限り小さいモノが産まれてくれますように」

『パンパン』と特に神様に祈るわけでもないのに柏手を打ってしまうのは…やはり日本人の性っぽいなどと考えつつ、運ぶにしてもデカイ生物を運ぶのは色んな意味で困るからとか、大型が生まれる可能性とかいらないんでとか、生まれてしまうのは止めようがなさげですから出来る限りコンパクトに生まれて頂けたら、何て自分勝手な事はしっかりお願いする。…でも出来ればもう少し生まれるのを待って頂けたら尚嬉しいです。

しかし…八方塞がりとは強制的に解決される物で…

ドガァァァァン！！！！

吹き飛ぶ玄関扉、それは机に見事にヒットしてくれた。待ってましたとばかりに弾け飛ぶ空箱、そこから赤く煌めく煙のような霧が舞い広がり、その向こうに憤怒の形相なミレーヌが立っている姿はまるで美しい地獄の絵図で…美人がキレると怖さ倍増だってこの時まで知らなかった。

「あれ…」

何気にあたし色んな意味でピンチかも知れない。

「ひぃぃぃよぉぉぉおりぃぃぃぃぃ」

ミレーヌはドスン…ドスン…と聞こえて来そうなぐらいにゆっくりと歩み、地を這う声を出しながらあたしを睨みつけてくる。

「どぉぃぅこぉとぉかぁせぇつぅめぇしぃてぇくぅれぇなぁいぃぃぃ？」

「ひぃぃ」

スピードが上がり駆け寄って来たミレーヌにあたしは思わず防御の姿勢をとってしまう…つまりあれです。片足上げて猿のように手をコの字にするあれです。

でも何時までたっても想像した衝撃はやってこなくて…ちらっと薄目を開けてミレーヌに視線をやると、そこには今までの憤怒が嘘のように消え去ったミレーヌがハラハラと涙を流して立っていた。

「み、ミレーヌ？」

「っひっく……ひっく…どう…して？どうして…ヒヨリと一緒に…受験出来ないの」

もちろんこの瞬間に、大人の自分が罪悪感にメッタ打ちにされましたよ？でも同時にきゅ～んとなったのも事実です。あぁ…どうしてくれようこの義妹可愛過ぎる…

…自分でいっぱいいっぱいで義妹の事を蔑ろにしてごめんよ。メルフォスさんとは帝国でライザ母さんとは戻って来てからいっぱい話し合いましたよ。ちゃんと君の事も含めてね。

「あのね、ミレーヌ…」

それからあたしはメルフォスさんとライザ母さんと相談した事をミレーヌに伝えた。

テリサン村には子供がいない。子供を持つ者はどうしても帝都よりの街に引っ越し、いつのまにかこの村は大人だけの村となった。そんな中で育ったミレーヌには友達がいなかった。３年前にあたしが来て一番喜んだのはミレーヌ。友達が出来たとはしゃいでたのを覚えてる。

…だけどあたしは中身は大人。どうやっても１２歳にはなれないのだ。だからミレーヌには同じ年頃の友達を作るべきだと思った。一緒に平民クラスに入るのは簡単だけど…平民クラスは年齢制限のない無法地帯。それでは今までの村の扱いと同じになってしまう可

能性が高かった。それに比べて貴族クラスは１０歳から１２歳の子供の集団。ミレーヌにとって初めての社会生活をおくるのにベストな環境だと思った。同世代の子達とこ社会生活から学ぶ事は意外と多いし、将来の糧になる。侯爵の血筋なら敬遠される事はあっても…ミレーヌの実力だったら直接いじめられる事も無いはず。

「親から離れて生活が始まるのは皆一緒。頑張ってみる気ない？」

貴族クラスに私がいるとミレーヌはあたしから離れない…それでは意味が無いのだ。厳しい事かもしれないけど…きっとミレーヌの心の強さがあれば先に楽しみが待ってるはず。…もし無理なら平民クラスに転入させてしまえばいいとか簡単にメルフォスさんが言ってたのもあって、あたし達はこの選択をしたのだと…

「…だけどね、ミレーヌの気持ちが一番大事だから。今からでも充分に間に合うよ？どうする？あたしと一緒に平民クラス受ける？」

「…ううん。あたし…頑張ってみる。貴族のお嬢様になんか負けない…それにヒヨリに会いたい時にはいつでも会えるんでしょう？」

「そりゃ同じ学院だもん！大丈夫でしょ？」

「ヒヨリっ！！義姉さんっ！！大好きっ！！」

ミレーヌがあたしに飛びついてくるのをしっかりと受け止める。メルフォスさんとライザ母さん、そしてあたしの気持ちをしっかりと受け止めてくれた彼女は素直で強いと思う

「お互い頑張ろう。で、嫌な事があったら今までみたいに愚痴を言い合おうね」

「うんっ！！」

キラキラ輝くミレーヌの笑顔を見てあたしも釣られて笑顔になっ

たけど、次の瞬間にピシッと固まった。

［主(あるじ)…話は終わりましたか？」

ミレーヌの背後にふよふよと浮かぶ冷蔵庫サイズの濃いぃ紅色の犬？っていうより狼？……しかもどう見ても両目の他に額にも目がありますよね？背中にでっかい翼まで生えてますけど…

「……あ、聖獣」

すっかり忘れてましたけど、そういえば…卵どうなった？って目の前にこれが生まれてるって事は…

［…我は魔魂より生まれし、主に使えし者。主、私に名を授けて下さい」

…やっぱり。ミレーヌが「何？」と振り向こうとするけど…とりあえず胸に抑え込む。だってこれを見たらさすがに普通に卒倒するでしょ。あたしだって食われるんじゃないかって内心ビビりまくってるし…

「あのさ…名前の前に…もう少し、サイズ小ちゃくならない？」

［…これでも充分小さいです…主が私が生まれる時に願った事で身体を変化させる力が備わりました。この５０倍ぐらいがわたしの魔力でいうと標準サイズです」

「ごっ……」

取りあえず絶句。

５０倍って…村壊滅するし…聖獣っていうよりモンスターでしょ…それ…

［主…ヒドい…］

「あ？」

どでかい尻尾が後脚の間に収納されるのを見て、犬属性だと確信する。というか何であたしが頭で考えた事に反応するの？

［主の心の声……外に漏れてます］

おっと動揺で、自分が喋ってる事にも気付かなかったよ…

［…この姿ではご満足頂けない様なので］

聖獣はそう言うと、自分の身体を回転させた。翼からでる風力で部屋の物がひっちゃかめっちゃかになったけど…まぁ…いい。そして現れたのは人の頭ぐらいのサイズで同じ姿をしていたが、耳と尻尾と目（額以外）がやたらとでかくなっていて、その耳にはたくさんの耳飾りがついていた…

「…これまた…デコラティブね…」

［魔力を散らさなくてはならなかったので…でもコレが限界です…これ以上は魔力を圧縮する事が出来ません。この姿もずっと維持するのは正直ツライです］

…正直可愛い。紅い身体はビロードみたいに見えるし…触り心地良さそうだ。これならミレーヌも大丈夫だと思って暴れまくっていたミレーヌを解放する。

「ぷはっ！！もぅ！！死ぬかと思ったっ！！」

そして振り返って固まる事5秒…

「何コレ！！可愛いっ！！！！」

「なっ…ちょっ…と、主！！！」

ん～美少女と愛玩犬が戯れる図…素晴らしい、目の保養だ。これだけで聖獣グッジョブと思ってしまうあたしはやっぱり現金なやつらしい…

48話　安らぎ

その後も「可愛い～！」の一言で、ひたすらミレーヌは聖獣を弄びまくり、いささか腕の中の聖獣がぐったりし始めた。ミレーヌはもともと素直なのとまだまだ子供なんでしょうね…さっきまで泣いてたのに今はもう満開の笑顔、気持ちの転換が早くて羨ましい限りです。大人になると…ねちっこくなるからなぁ…あ、それはあたしだけか？

［…主、もう限界です］

腕の中の聖獣はそう言うと…ミレーヌから飛び降り少し離れたところで、また身体を一回転させる。そして姿が現れた時と同じ冷蔵庫サイズになった…

「あ……」

「……」

やばい…。やっぱり元の姿は恐ろしいのかミレーヌが聖獣を見て固まってる。

「こ…こら、聖獣…」

早くちっこい姿に戻って…と言いかけた時に横から正しく黄色い声援が飛んで来た

「かっこいい～～～！！！！変身も出来るのねっ！！！」

ミレーヌは何の迷いも無しに冷蔵庫サイズの狼に飛びついている…。え～っと…初めに小ちゃいサイズを見たのが良かったのか、それとも全然冷蔵庫のサイズでもおっけーだったのかよくわからないけど…ま、怯えてないから…いっか。

「モフモフ～！！！すごく気持ちいいっ！！！ヒヨっ来て！凄く気持ちいいよっ！！」

ミレーヌが聖獣の首元にスリスリと顔を近づけるのを見て…あたしも釣られてとりあえず後から抱きついてみた。すると紅い毛は想像通り高級ビロードのような感触で…こいつ狩人に狙われて皮剥がれちゃうんじゃないか！？って心配してしまうほど気持ちよかった。

［あ、主！？］

「お前…ほんと気持ちいいね…」

「でしょう！」

ミレーヌを全面に、あたしを背後に抱っこした状態で聖獣は身動きが取れず固まっているが、尻尾は左右にパタパタと揺れていたのでご機嫌な感じではあると思う。大きさを元に戻した事が良かったのかさっきほどのぐったり感は消えてるみたい。あ…どうしよう…良からぬ事を考えてしまった…でも思いついたら…どうしても実践してみたくなるのは科学者の血で…

「ねぇ…あと2倍ぐらいの大きさになれる？」

［もちろん出来ますが？］

「……」

背後から期待を込めた目で聖獣を見つめると…聖獣は大きく息を吸い込み、あたしとミレーヌに自分から離れるように言い、そして

そのまま大きく一回転しようとして飛び上がると轟音を立てて天井を突き破った。慌てて着地した時にはすでに身体は2倍のサイズになっており、着地先の机を粉砕した。咄嗟の判断でこの家全部とあたしとミレーヌを空気の膜で覆ったのは良い判断だったとあたしは自分を褒める。お陰で轟音は外部には漏れなかっただろうし、あたしとミレーヌも埃などを被らずに済んだ。

あたしの「あ…」とミレーヌの「きゃぁ！」は同時に発せられて…

［…あの…主］

あたし達の声に恐縮した冷蔵庫サイズから2倍へと変化した紅い狼は、しっかりと尻尾が身体に収納されてる。まぁ…この惨状を理解しているからだと思うけど……でも実験っていつでも最初は失敗するものよね？あたしは天井が落ちて屋根と梁だけになった上部を見ながら苦笑する。そりゃこのサイズを普通の家の中で変身させちゃ駄目だわ

…怒らないのかって？だって変化してって言ったの自分だから。…天井は魔法で簡単に直せるし。しかもどうせ玄関はミレーヌに吹っ飛ばされてる状態で、聖獣が回転する度に起こる凄い風で家の中の物は既にめちゃくちゃですし…開き直った感じで怒りなんてわいて来ない。

ただ埃っぽいのは嫌なので、窓を開けて中の空気を外の物と入れ替える。そしてようやく部屋の空気が綺麗になった状態で、あたしはワクワクしながらくるっと聖獣に振り返った。いよいよ想像してた物に出会える。

「あのさ…横になってくれる？」

［…？］

あたしが聖獣にそう言うと、聖獣は怒られると思ったのかちょっとびくつきながらも横に寝そべった。…これよ。これを求めていたのよっ！！

「ミレーヌ、おいで」

「え？ヒヨ？」

「一緒に寝よ！」

笑いながらそう言ってあたしは横に立っていたミレーヌの手を掴むと、聖獣のお腹に飛びついた。聖獣のお腹は柔らかい布団のようで、肌触りは高級ビロードなのだから文句無しに気持ちいい

［！？］

「やっぱり…想像した通り、コレ気持ちよすぎる…」

「ほんとだね……」

一瞬で眠りに落ちそうなあたし達を察したのか、聖獣は丸くなって包み込むような形を取ってくれた。…素晴らしい。素晴らしいよ、聖獣君。

微睡んだ状態で隣を見ると、泣き疲れた事もあったのかミレーヌはすっかり寝息を立てていた。でも…ほんとに気持ちいいな。人肌じゃないけど…有機物の温もりに包まれるというのはこんなに安心感を与えてくれるんだって初めて理解した気がする。

［主…後で名前つけて下さいね……］

そんな囁きを眠る前に聞いた気がしたけど、ごめーんすっかり忘れてた～っと思いながら忘却の彼方、夢の世界へあたしは旅立った。

48話　安らぎ（後書き）

１０万文字を越えてＰｉｃｋ　Ｕｐ!に載る事が出来ました。

読み専だった時にトップページに載る作品を見て『すごい』と思っていました

自分で書き始めてからは『いつか!』と目標でした

すべてはこの作品を読んで下さっている皆様のおかげだと思います

心より感謝申し上げます

ありがとうございます!!

49話　小春日和

すっかり本気寝をしてしまった…気付いたら窓からの光がすっかり夕暮れ色になっていてびびった。横を見るとまだミレーヌは夢の中らしく、すやすや寝息を立てている。

「ん～！よく寝た！！」

そう言いながら身体を起こして伸ばすと、こちらをじっと見つめる聖獣と目があった…

「あ……」
［お目覚めですか？主］
「…はい」

よく考えたらあたしら爆寝したからいいけれど…この聖獣ずっとこの体勢で支えてくれてたんだよね。

「ご、ごめんね。身体痛くない？」
［？］
「いや…あたしが寝てる間、ずっとこの姿勢だったんでしょう？」
［あぁ…別に大丈夫ですよ？主が私の身体で安心出来るのは嬉しい事です］

…何ていい子なんだ。こっちを見つめる聖獣に向かってあたしは手招きをして呼び寄せる。最初はきょとんとした顔の聖獣だったけど、意味がわかったのか頭をあたしの側まで持って来た。…さすが頭だけでもデカイ。

［…主？］

あたしはその頭にぎゅっと抱きつくと頭頂部を力一杯撫でた。

「…ありがとね」

［主…］

大きな尻尾がふわふわと揺れて心地のいい風が部屋に舞う。

「もうちょっとだけ頑張ってくれる？もうすぐ夕食の時間だし、ミレーヌも起きると思うから」

［はい］

その間はあたしもまだこの感触を楽しませて貰おうと、もう一度元の場所に横になる。

［あの…主、名前をそろそろ…］

あぁ…また忘れてた。っていうか忘れてたかったというか…名付けセンス０のあたしにとって名付け程悩まされる事は無く…キラキラと希望に満ちた視線からすっとそらした視線は宙をさまよう。

「名前ねぇ…」

頭の中に浮かんでくる動物の名前と言えば『ゴン』や『太郎』、『次郎』、『セバスチャン』、『ゴロー』…いかんせん紅い狼には似合わない。そんな悩めるあたしの頭にふっと言葉のフレーズが浮かぶ。

『小春日和』

たまたま浮かんだその言葉だったけど、何だか暖かい寝床は『穏やかで暖かい天候のこと』という意味がぴったりな気がするし、それに今はちょうど11月。あたしの聖獣だし…全てがぴったりあてはまる気がした

「コハルにしよっか…」

あたしはぼそっと呟いた後に聖獣に視線を戻す…そして固まった。え〜…っと、あたし何をとち狂ったんだろうね?この紅い狼のどの辺が『コハル』なの?『切り裂きジャック』の方が似合いそうな風体に何故『コハル』?これはあたしのオバカっぷりが如実に現れすぎてて痛い、痛すぎる。

「あの…ちょっと…やめ」

[コハル……嬉しいです。主]

やっと貰えた名前に感無量なのかニパッと開けた口に食されそうで怖いし、尻尾が尋常じゃなく揺れてるのを見てしまうと……今更、見た目エグイから訂正なんて出来ない。

[コハル…コハル…]

そう何度も言葉を繰り返す紅い狼は…見た目はまぁ置いといて、行動は可愛い。

「気に入って貰えて……よかった」

まぁ…見た目もずっと一緒にいれば慣れるでしょ。小ちゃいバー

ジョンのコハルは充分『コハル』で通用するし…喜んでるし…ま、いっか。

［主…名前を呼んで頂けますか？］
「…ん？あぁ…コハル」
［……ありがとうございます。主］

コハルの尻尾風圧が強かったのか横で寝ていたミレーヌがむくっと起きた。

「おはよう、ミレーヌ」
「…んぅ、ヒヨ…おはよう？今何時ぃ？」
「もうちょっとしたら給仕の時間」
「あぁ…そっか、獣ちゃんのお腹が気持ち良くて寝ちゃったんだ…」

意外と寝起きのいいミレーヌは「おはよっ獣ちゃん！」とあたしを乗り越えてコハルに挨拶をしている。獣ちゃん…そう言えば…ミレーヌの名付けセンスはいかほどの物なんだろう？コハルへの若干の抵抗が残るあたしとしては最後にちょっとだけ足掻いてみたい…

「ねぇ…ミレーヌ。ミレーヌだったらこの獣になんて名前付ける？」
「…？あたしが付けるとしたら？」

ミレーヌはコハルの顔に抱きつきながら、う～んと唸っている。
やっぱり…12歳には名付けは早過ぎましたか…

「そうだなぁ…見た目カッコいいし、ヴァルフレームとか…ネヴィルグレス…ヴィヴィアレムとかでもいいかも…」

……カッコいいじゃん。しかも紅い狼にすっごく合ってるし…っていうか何気にミレーヌ名付けセンス神レベルじゃないですか。

えぇ…お姉さんは自分の名付けレベルの不甲斐なさに…かなり凹みました。

一応じとっとコハルに視線を向けてみる。

「…コハル」

[はい主]

「え～この子『コハル』って言うの？」

てっきり似合わないと言う言葉が続くのかと思ったのに…

「いいなぁ…言葉が…ヒヨと同じ香りがする」

ミレーヌは自分で言った名前候補などすっかり忘れて「コハル、いい名前ね！羨ましいぞぉ！」とコハルの頭を撫でている。撫でられたコハルも嬉しそうに尻尾を振っている。そんな二人を見てしまうと…名前の変更など言い出せるわけもなく…。

小春日和はコハルとヒヨリになり、紅い狼は正式に、聖獣『コハル』となりました

４９話　小春日和（後書き）

お気に入り登録が４０００件を越えました

何気なく初めてしまった小説に、こんなにたくさんの方が読者となって下さって私はとても幸せ者だと思います

読んで下さった方一人一人に、心より感謝申し上げます。

これからもどうぞよろしくお願いします。

５０話　お受験戦争、勃発

ミレーヌは宿の給仕の為、あの後すぐに家に戻っていった。冷蔵庫サイズに戻ったコハルはベッドに腰掛けたあたしの足元で丸くなっている。そんなあたしの手元にあるのはコハルと一緒に送られてきた入学試験説明書。最初のページには帝国魔術学院学長の挨拶。そして２ページからは試験の日時や注意事項などの記載がしてあった。

「試験は…１２月の２週目か…」

今は１１月の２週目、試験まで後一ヶ月という事になる。合格者発表が次の週で魔法便での入学通知と魔術学院正門付近での発表があるらしい。貴族受験者は面接だけ。平民受験者は面接、筆記、実技の３試験があるらしい。やっぱ貴族様はすごい優遇だな…

貴族クラスは２０名クラスを１０クラス２００名の合格者に対し、平民は４０名クラスを２クラス、計８０名。そんな結構過酷な平民受験とはいえど、受験者数は毎年増加傾向にあるらしく去年の合格倍率は３０倍と書いてある。なので単純計算でも２４００人ほどの受験者がいるらしい…どんな人気学校なの？って突っ込みたくなるけど『帝国』と名の付く学校なのだから、あたしの世界で言う国立なんだろうし、魔術の最高峰という事は、「東の〇大、西の〇大」って感じのようで…

はい…受かる気がしないです。

この学校入学だけで、平民的には超エリートですよね？

そしてやはり平民クラスは年齢制限がないらしく、魔力重視の実力世界のようだ。合格ラインが３試験の合計で５００満点中４５０

点…しかも合格者多数の場合は抽選ありらしい。

「…お受験戦争じゃん」

あたしは3ページ目にして挫折しそうな心を奮い立たせて、次のページに移った。そしてそこに載っていたのは

「……何コレ？」

どうみても筆記の試験問題が記載されている。一瞬カンニング？もしかして皇帝が裏から手を回したのかって焦ったけど、どうやら違うらしい

「え～っと、下記の試験問題を別紙答案に答え、入試日に提出？」

何ソレ？これを前もって記入して試験日に提出すればいいの？それって試験じゃなくてレポートじゃん…。あたしはそう思いながら問題をさらっと読んだ。

「あ～そういう事か…」

問題を読んでから答案用紙に触れ、その紙に隠して記された魔法陣を読み取る。そこには答案用紙に名前を書いた者以外の解答を拒否する魔法と、特殊な魔法の仕掛けがいくつも施されていた。

つまりあたしが想像していた『単なる』筆記試験では無く、これもあくまで『魔法』の筆記試験だという事。例えば一問目の問題は「ここに火系魔法を記載しなさい」これだけならば単なる筆記試験だが、ここからの但し書きが要注意なのである。

『但し、記載の火系魔法を発動させる為の魔法陣も同様に記し、発動可能にする事』

そう、つまりここに記す魔法は自分の魔力レベルにあった物しか記せず、名前だけを知ってる高度魔法などは記しても点は貰えないという事。つまり調べて自分が発動出来る魔法を書きなさいって事。紙自体の隠し魔法陣によって、記された魔法陣が１０分の１ぐらいの力で仮発動出来る仕掛けになっている。

そしてその記された魔法レベルによって点数が決まるらしい。

こんな感じの問題が各属性ごとに複数あり、ようはこの答案用紙を見ただけで解答者の属性がわかり、魔力の強さも調べる事が出来るようになっている

「…なるほど。これは考えられてるわ…」

とりあえず試験は明日以降にする事にして、説明書の続きを読む。次の記載は面接と実技試験についてだったけど、これは面接内で実技試験も行われるらしく、実技は自分の属性魔法の一番得意とする物を面接官に披露すればよいらしい。面接については、魔法を習う上での心構えから将来像についてまで面接官によって質疑応答は様々らしい。

「まぁ、ここまでは何とかなるにしても…最後のこれをどうするかなのよね」

最後に魔魂のレポート提出について。これについてはレポートを作れるほどの観察内容なんて無かったし、そもそも魔魂に触った時点からの経過なんて少ししかない。

「すでに今はコハルになっちゃってるしね…」

そういえば…あたしが試験落ちたらコハルって返さなくちゃいけないのかな?足元で丸くなって幸せそうに眠るコハルを見ると…もし落ちた時には申し訳ないけど皇帝に頼んでコハルだけは手に入れられるようにしよう!と思ってしまう。

「一ヶ月か…」

試験の段階ですでに問題が山積みだけど、この問題をクリアする事も自分が元の世界に戻る事が出来る第一歩だと思う。そう思えば頑張ろうって力も涌いてくる…はず。

「でも最悪、浪人してもライザ母さんの店で働きながらまた受験すればいいし…遠回りかもしれないけど勉強だって帝都に行けば独学で多少は出来るだろうしね」

国立に2浪ぐらいして入学。うん、この方があたしっぽい気がする

「それにしても魔魂がなぁ…」

あたしは大きくため息を吐くと、コハルの頭を撫でてやった。

５０話　お受験戦争、勃発（後書き）

今、章の分け方・各タイトルを悩んでいます

以前の風邪からこじらせた気管支炎が未だに直りません。
夜中に身体が温まると咳が止まらないのは中々つらいです
寒くなって参りましたので、皆様も風邪に気をつけて下さい

51話　プチ旅しましょう！

実は今、空を飛んでいます。夢の世界なんかじゃありませんよ。リアルですリアル！コハルの背中に乗って大空に舞い上がってます…昔アニメで空を自由に駆け巡るとか憧れた事もありましたけどね…実際は恐怖のみです。だって落ちたら確実死にますから…すぐ横に雲らしき小さな水の集団があるとこを見ると上空２０００Ｍぐらいですよね？スカイダイビングの高さを装備無し、丸裸状態で飛行とかってありえないですから…唯一の救いはコハルの背中に埋もれてるので寒さだけは緩和されてる事ぐらいですよ…

「…何でこうなった？」

コハルの毛に埋もれながら記憶を辿ると思い出すのは今朝の事。前日に仮修理した玄関をきちんと直して、コハルに破壊された天井部分も補修魔法を完了した後にお茶をしながら休憩してる時だった。それは何気なくあたしがコハルに聞いた言葉が事の発端だった。

＊＊＊

日本茶を啜りながら側にいるコハルに視線を向けると、身体を舐めて綺麗にする作業に没頭していた。それを見ながらこういう仕草は猫系だよな～なんて思う。見た目狼なのに…でも聖獣はあたしの魔力であって…純粋な獣ってわけじゃないだろうし…ってそこがよくわからないんだよね…。

「あのさ…魔魂ってそもそも何なの？」

［魔魂…ですか？］

コハルが毛繕いを止めてあたしに視線を向けてくる。

「うん…ただ気になって、人が作ったものなの？」

もし人が作ったものであればあたしの無駄なハイスペックで作り出せるかもしれない。という事はもう一つ魔魂を作ってそれでレポートを書けばとりあえず悩みは解決しそうなのだけど…というのは表向きの理由で、単に魔力を吸収して獣を産み出す卵はあたしの研究心をガンガンに揺さぶってくれたので研究したい！っていうのが本音だったりする。残念な事にコハルは気付いたらすでにカチコチの銀色の卵だったので、最初の状態すらまともに見れなかったのだ。そうなると疑問を解くためには魔魂自体のコハルに質問するのが一番だと思ったのだけど…

［いえ、魔魂は大地の力が溢れる場所に自然に生まれる魔力の結晶です。そのまま自然に放置された状態だと魔獣となり、人の魔力が加わると知識が同時に込められ聖獣となります］

「え…じゃあ…自然にゴロゴロしてるって事？」

［ゴロゴロはしてませんが…、例えば私は火山で生まれました］

「か…ざん？」

火山と言われるとどうしても頭の中にど～んど～んと岩が飛んでる噴火状態を想像してしまうのだけど…無理無理そんな場所にいけるわけない。

「…そんな危険な場所にある魔魂をどうやって捕獲するの？」

［別に噴火の有無は関係有りませんから。それよりも長年の過酷な環境によって炎の力が凝縮された場所に、魔魂は生まれます。水系ですと海の大渦地帯や、大滝壺。風系ならば風の止まぬ絶壁や竜

巻地帯。土系は強力な磁力地帯。氷系は氷山。簡単に言うとこんな感じでしょうか。魔魂専門のハンターがいまして、それによって各場所の魔魂が捕獲されるというわけです」

「…なるほど。つまりコハルは火系の聖獣なわけね」

まぁ…体の色からしても水では無いと想像はしていたけれど。

「はい。そのはずなんですが…ただ主からの魔力は複数の属性が流れ込んできましたので…完璧な火系というわけでは無く、水も変な感じでは使えそうです…」

「変な感じ？」

「はい…例えば…」

コハルはそう言うと大きく息を吸い込むと、口を閉じ二回ほど咀嚼の動作をする。そして再び開けた口から小さな丸い水の塊が飛び出し、壁に当たった。壁から湯気が立ち上ってる様子からして飛び出した物はお湯らしい。

「…お湯？」

「…よくわかりませんが、吸い込んだ息から水を作り出す事が出来る様です。ただどうしても吐き出す時には炎と一緒なので温度が上昇するようですが…」

自分でもなぜそんな事が出来るのかよくわかっていないのか、不思議そうにこちらを見つめるコハルにあたしは顔を引きつらせてしまう。大気中の物質から水を作り出す。つまりコハルの口の中で、化学反応が起こってるわけで…ごめんねコハル。それは多分思いっきりあたしの元の世界、つまり白の加護の分野だと思うわ…。

「ま…いんじゃない？便利で…」

笑って誤摩化すけど…つまり、あたしから産み出された聖獣はやっぱりハイスペックな有り得ない状況になるという事がコハルで証明されたわけで…そんなレポート提出出来るわけもないし…だからといって魔魂を取りにいくとか無理だし…

「…魔魂のレポート、どうしようかな…」

課題提出が出来なければ確実に試験落ちるよね？…どうしよう。諦める？「自力で受かる！」とかあんなに皇帝に大見得切ったのに？う～んと頭を抱えるあたしを不憫に思ったのかコハルがあたしの腕を鼻先でつついてきて言った

［主、実は少し離れていますが、行けない距離では無い所に魔力が溜まる気配があります。そこなら魔魂がある可能性がありますが…。私の翼ならそんなに時間もかからないと思いますし行きますか？］

「え？そうなの？」

［はい。どういった系統の魔魂かはわかりませんが…］

…ほんの少しの望みでもそれを手に出来る可能性があるなら懸けてみるしか無い。あたしはコハルの頭を撫でて「お願い」と言った。

＊＊＊

…そして現在に至る。

「コハルぅぅぅ～まだまだ遠いのぉ？」

ビョウビョウと風の音が鳴る中で思いっきりコハルに向けて叫ぶ。

凄いスピードで雲を抜けるので開けた口の中に水分が入ってくる。

［いえ、もう見えてきました］

「え？そうなの？」

下を見るのは怖いけど…ちらっと覗くとどうみてもそこには緑の絨毯が広がっていて単なる平原と思われ、どう見ても過酷な環境には見えなかった。

「…魔魂がありそうに見えないけど」

［主、前方です］

…前方？コハルに言われて前方を見てあたしは固まった。どう見ても前方には雲しかない。ただその雲があたし達の位置よりさらに高く昇っているのを見て嫌な予感がした

「…あれ？」

［はい。あの前方の雲から魔力が滞る気配がします］

でしょうね～。

どうみてもあの雲『積乱雲』ですから…

52話　聖獣ランド開園？

コハルに示された雲は巨大であたし達より遥か高くそびえ立ち、稲光が消える事なく走っている。どう考えても雷属性の魔魂に違いなく…ヤバい感じがプンプンする。

「あのさ、まさかあの雲に突入とかしないよね」

［……］

…返事がないんですけど、しかもさりげなく近寄っていってない？稲光って近くで見てもとっても綺麗とか言ってる場合じゃないから！

「…死んじゃうからさ…普通に雷ヒットって死んじゃうから」

［大丈夫です。さすがに雲の中には入りません。出来る限り近づいてそこから魔力を照射し魔魂を引き寄せます」

…早く言ってよ。凄くビビったんですよ？

「魔魂て魔力に近寄ってくるの？」

［はい。魔力は魔魂にとっての極上のエサですから」

直接エサだと言われたわけじゃないけれど…複雑な気分なんですけど。

それにしても雲に近づくだけで放電なんかがありそうだし…防御しておくにこした事はない。確か空気って絶縁体になったはずだから、断熱壁魔法の応用で、水分とか不純物を除けば絶縁体になるはず。後は絶縁耐力がだいたい１ｍｍで３０００ボルトだったから１

０ｃｍぐらいの厚みにしておけば大丈夫だと思う。

あたしはコハルの背中で詠唱を始め、自分とコハルの周りに魔法を展開させる

［主？］

「一応、電気対策しといた」

［ありがとうございます。ではいきます］

そう言うとコハルはゆっくりとしたスピードで積乱雲に近づく。絶縁体は上手くいっているようで稲光は相変わらず見えるが、今のところこちらに向かって放電が起こる気配は無い。それにしても、ほんと雷って危険さえなけりゃ綺麗だよね～こんな間近で雷が見れる日が来るなんて思いもしなかったわ。

積乱雲のかなり側まで近づいたところでコハルが止まった

［主、ここから魔力を放出して下さい］

…はい？魔力の放出ってあたしがやるの？

［ここならば内部の魔魂にも届くはずです］

だから…それを魔力だけの放出なんてやった事が無いあたしがやるの？

「え～っと無理」

［主？何か気に障る事が？］

「気に障るとかじゃなくて、やった事ない」

［……］

止まる時間。稲光の音だけが空間を支配する

「ごめんね。出来の悪い主で」

［いえ…そこに考えが至らなかった私が悪いです。主は普段でも微力ですが魔力が体から放出されているので……」

「…え？そうなの？」

あたし魔力垂れ流しなわけ？どんだけ魔力有り余ってるのさ…シュンとしてしまったコハルに対して少し可哀想だったので、ちょっとふざけた口調で話しかける

「もしかして手をかざすだけで出来ちゃったりしてねー」

ただここまで来てそのまま帰るのももったいないので…なんて軽い気持ちであたしはモーゼの十戒のごとくコハルの背中に立ち上がり、「いってらっしゃい！」と言う台詞とともに手を積乱雲に向けてかかげてみた。

「きゃぁっ！！！」

［主っ！！」

手をかざした瞬間、光が目の前で弾け積乱雲に向かって手から何かが放出される。それは雲を一瞬で突き抜けたようで一筋だけぽっかり雲が無くなり向こう側が見えた。そして雲の中のその筋にコハルの魔魂と似た物が積乱雲の上部から降りてくる。

「え？」

［主…魔魂です］

「……」

魔魂は複数あり、筋を通ってこちらに向かってくる。卵なのに何だか幼い子が集団下校してる姿に見えるのが不思議…。

「…あ、あんなにたくさん聖獣いらないけど…」

全部孵化させたら聖獣ランドとかできそうじゃない?その前にあれ全部にあたしの魔力吸われるとか…無理でしょう…さすがに。

［大丈夫です。必要分だけ私の体内に取り込みます。後はこの場に残しておけば元の場所に戻ります］

「たたっ食べるの!?」

頭の中で共食いを想像してしまった。

［違います。魔魂同士であれば体内は保管場所となるんです］

「凄いね。コハル」

［主の方が凄いです］

…うん。それはもうこの世界に来てから色んな人にウンザリするほど聞かされてきたから、そんなうっとりした顔で見つめられても…。

「一個でいいよ…」

［しかし雷属性の魔魂は貴重ですので、ストックしておくと後でハンターとして結構高値で売る事が出来ますが…］

…売るねぇ。駄目だ、一度幼稚園児に見えたものを売るなんて出来ない。

「ううん、一個でいい。…でもあたしが触ると聖獣化しちゃうからコハル保管でお願いします」
［わかりました。どれにしますか？］

列をなしてこちらに向かってくる魔魂を見て、何だか一つを選ぶのも可哀想な気がするけど…全部は養えないのだから、心を鬼にして…一つを選ぶ。そう思って探したら魔魂の列から少し遅れて動きがぎこちない一回り小さな魔魂があった。

…どうみてもあれ弱そうに見える。ここに放置すればいずれ魔獣になる筈で…弱そうなのは…淘汰されちゃう可能性が高い

「…コハル。あれ、あの一番後のちっこいの」
［あれですか？あれは…もしかして劣性魔魂かもしれませんよ］
「いいよ、馬鹿な子ほど可愛い」
［わかりました］

そういうとコハルはあたしが指した魔魂を引き寄せ、大きく開いた口で飲みこむ。コハルが傷つくから口にはしないけどね…見た目どうみても共食いです。

無事にコハルの体に魔魂が落ち着いたのか、コハルは次に尻尾で大きな風を起こし残りの魔魂を積乱雲へと戻した。そして体を積乱雲から反転させると羽根を動かし始めた

［では、戻り……］

しかしコハルは途中で言葉を止め、素早く向き直った体をまた積乱雲に向けた。そして耳を色々な方角に動かし何かを確認している

「コハル？どうしたの？」

［どうやら……一部の魔魂の魔獣化が始まっていたようです］
「え？」
［すみません…主。来ますっ！！］

そのコハルの言葉と同時に落雷がこちらに向かってきた。絶縁体の壁によって直撃は免れたが衝撃はかなりのもので、コハルごと５ｍほど後方へ弾き飛ばされる。

そしてあたしでも聞こえる咆哮が空に響き渡った。

52話　聖獣ランド開園？（後書き）

活動報告にてラフ画、筆頭医シーを掲載しました

53話　初めての戦闘…そして（前書き）

後半、R15的残酷な文章があります。
ご注意下さい

53話　初めての戦闘…そして

途切れる事のない大音量の咆哮は周辺の大気を震わせ、こちらには大きな音の波となって押し寄せた。あたしはとっさに断熱壁を絶縁膜の外側に築き、空気を固定する事によって音の波を受け止めたが、咆哮と同時に積乱雲から次々と襲ってくる雷撃に断熱壁が弾け飛ぶ。何度も断熱壁を繰り返し作り出して対応するが、内側の絶縁膜も少しずつだが確実に削られていく。そんな中、コハルが口の中に炎を溜める姿が視界に入って慌てた

「コハル、マテッ！！」

あたしの叫びにコハルの動きがぴたっと止まる。

［主？］

あたしは詠唱を続けながら、コハルに叫ぶ。

「炎は駄目！！とにかく羽根を広げずにあたしの足場を保つよう努力！！」

［わかりました］

属性攻撃を止められたコハルは、なるべくあたしが揺れないように空中停止に近い状態を保つように意識を集中する。積乱雲に対して部分的に炎の攻撃をすると周りの空気が暖められてしまい、その熱によって上昇気流が生まれればさらに急激に積乱雲を成長させてしまう可能性がある。だからといって積乱雲を全て消し去る様な炎の攻撃は周辺への影響が大きすぎてとても指示出来る事じゃない。

「…少なくとも炎と積乱雲って相性最悪だわ」

［主…］

…まだまだあたしの魔力は余裕そうだし壁を作り続ける事は出来そうだけど、このままじゃ同じ事の繰り返しなだけで解決には至らない。逃げる事も考えたけど、この雷撃はあたし達を逃がすつもりなんてなさそうだし…という事は問題は積乱雲よりそれに隠れて攻撃してくる雷獣なわけで…

「ねぇコハル。積乱雲の中の雷獣の位置ってわかる？」

［はっきりとした位置は難しいですが、咆哮が放たれてる先ならばおおよそ…］

「ならそこに思いっきり風ぶち込んで」

隠れてばっかいないで、いい加減姿を見せなっての。一瞬でも姿が見えれば捕まえる…そして引きずり出す。

［主…いきます！］

言葉と同時にコハルの尻尾が大きく揺れ、そこから生まれた突風が積乱雲へと渦になって向かう。風が突き抜けた先に見えたのは頭に鋭い角がある白く輝く馬がこちらへ金の瞳を向けていた。

「ユ…ユニコーン」

あたしは伝説上の動物が目の前に現れた事に少なからず動揺した。積乱雲に守られたように立つ姿は神秘的で一瞬今が戦闘中である事を忘れさせられた。

［主っ！！雷獣のチャームに惑わされないで下さいっ！！］
「チャー…あっ！！」

コハルの言葉にハッと自分を取り戻すとあたしは慌てて雷獣に対して空間固定の魔法をかける。これでユニコーンは動けなくなったはず…、しかし予想に反してユニコーンは前脚でその魔法を叩き割った。

「いやぁっ！！」

力技で無理に破られた魔法の衝撃は術者に返ってくるらしく、あたしの体が衝撃に悲鳴を上げる。

［主っ！！！］

コハルがあたしに気を取られてる隙に、また積乱雲の中に隠れられると思ったらユニコーンは雲から飛び出しこちらに一目散に駆けてくる。かなり離れた位置にいたはずのユニコーンはあっという間に近距離まで近づくと先程と同じ様にあたしの魔法壁を叩き割ろうと前脚を高く掲げた。

［主！！しっかり掴まってて下さいっ！！］
「コハル！魔法壁消すから、どこでもいいから避けてっ！！」

あたしは衝撃を受けない為に魔法壁を消しさり、ユニコーンの衝撃に備える。ユニコーンの前脚の攻撃はコハルが旋回する事によって避けられたが、その反動であたしはコハルの背中から落下してしまった

「いやぁぁぁ！！」

［主ぃ！！］

コハルが助ける為にこちらへ向かってくるのが見えるが、それよりも早いスピードで雷獣があたしに向かってくる。

ドクンッ…

『魔式、２型発動「空間制圧　フリーフォール」』

前回と同じく頭の中に声が響き、その途端体が魔力に包まれ降下が止まる。しかし止まったが故にユニコーンが鋭い角をあたしに向け一直線に向かってくる。後から追いかける状態なので前方にあたしもいる為、コハルは炎などの攻撃を繰り出す事が出来ない。

串刺しになりそうな予感に今度はただ無意識に魔法式が自分の中に組み立てられる。周辺大気を自分の手に纏わせ湿度を凍らせ槍化させ、そしてそれをそのまま真っ直ぐ向かってくるユニコーンに向けた。当然勢いを付けてこちらに向かうユニコーンがそれに対応出来るわけがなく

手に伝わる肉を断つ感触。初めてのその感触は、想像を絶するぐらいに生々しくあたしに衝撃を与える。

「あ……」

あたしのその言葉と一緒にユニコーンの断末魔が響き渡り、白く流れ出る体液が氷の槍を伝ってあたしの腕へと流れる。

「……いやぁっ！！」

あたしはそれを氷の槍ごとユニコーンを自分から振り払った。ユニコーンの体はあたしの横を力を無くし落下していく。それを側に来たコハルが炎に包む光景を見ていた。

［主…大丈夫ですか？」

「コハル……」

優しくあたしを包み込んでくれるコハルの暖かさに張りつめた何かが切れ、コハルの背に降りた途端にあたしは意識を失った。

53話　初めての戦闘…そして（後書き）

私的にはエグイ表現方法だったのですが…大丈夫でしょうか？

54話　ドロドロしたモノ

目を覚ましてもまだコハルの背中の上で仰向けに寝ていた、どうやらあたしが普通に眠れるほどのサイズになっているらしい。気を失っていたのは数分だったようで、空が高く見えるのはコハルが地上に近い位置で飛行してくれてるからだろう。幾分ぼんやりとした頭を動かして確認しても、見渡す限り続く晴天から積乱雲からはかなり離れた場所に今自分がいるのだとわかる

［主、起きられましたか？もし気分が悪ければ一度降りますが…］

あたしが動く気配を察したのかコハルが話しかけてくる。心配そうな声色を安心させるように寝返ってうつ伏せになるとその身体に顔をこすり付ける

「大丈夫。このまま家に戻ろう」

［わかりました。もうすぐ民家がありますので、サイズを少し小さくしても大丈夫ですか？］

「うん…。もう平気」

本来なら獣の香りがしそうなコハルの身体は、あたしの魔力から生まれただけあって自分の香りと変わらない。毛に包まれると自分の布団の中のような感覚になる。あたしはコハルに気付かれないようにそっと自分の右手に視線を向けた。あの時槍を伝って流れてきた白い液体はコハルが綺麗にしてくれたのか、今は手には何も付着していない。だけどあたしの目にはいつの間にか白い液体が血へと変化し、べっとり濡れてる気がした。

…初めて命を奪った。

別にこの世界では何でも無い事。この３年の間に森なんかで何度も魔獣に対してきた。魔獣に村を襲撃された時には警備であるメルフォスさん達が身体を血で汚して帰ってきたのだって普通に見てきた。だけどそんな魔獣を森で遭遇した時には「殺すのは可哀相だから」と魔法を使って自分が逃げるか、相手を逃走させるようにばかり仕向けてきた。メルフォスさんに聞くと１０年前までは国家間の戦争も日常だったという話も聞いた。そういう事が日常的に起こる世界だって頭では理解していた。

…でも、ほんとに頭の中だけだ。

どこか映画のワンシーンのように思っていた世界。『映画に出演している』自分自身もどこかそんな感覚でずっと生活してきたのかもしれない。どこかのアトラクションの中にでもいるような感覚で魔法を使い、自分の能力が高い事も物語の主人公なのだから迷惑だけど当たり前のように受け止めてきた。城で襲われた時だって殺されると思ったら助けられて…その時だって本音ではここで死ねばゲームのように元の世界に帰れるかも知れないと思ってた。

…だけどこれは現実。

あたしは食牛がいる事を理解していても、自分が食す肉はパック

だと思っている平和ボケした日本人だった。ぎゅっと握った右手には肉を断つ感触が残っている気がする。料理なんかじゃない…命を奪う行為。

［主、体のサイズを変える為に一度地上に降ります］
「あ…うん」

コハルの言葉に思考が戻されたが、一度深みにはまった考えは留まる事を知らない。コハルの背から降りて地上に足を付けたらどっと疲れが襲って来てふらついた。

［主、大丈夫ですか？］
「う、うん。ごめん。ちょっと空にいすぎたのかも…少し歩いてもいい？」
［はい。でしたら私はちびサイズに戻りましょう］

そういってコハルは回転すると人の頭サイズになってあたしの横にふわふわ浮いている。もうすぐ民家だとコハルが言っていたけど、目視出来るところにそれらしい建物は無い。ただ広がる草原にどちらの方向へ向かえばいいのかわからず立ち止まってしまう。

「コハル…どっちに向かえばいいのかな？」
［こちらです。先をいきますので…］
「ありがと」

コハルが飛ぶというよりふよふよと漂うといった形の方で前方を進んでくれる。その後を着いて歩きながらやはり右手に視線を向けてしまう。「仕方がなかった」と言い訳をする自分、大きな力を持っているくせに殺す事しか出来なかった自分。

「はぁ…」
［主…］

あたしの溜息に振り返るコハルの目は不安そうに瞳を揺らしているが、そんな瞳にさせてしまっていてもフォローする言葉が見つからない。大丈夫だと声をかけてもそれが真実でない事はお互いにわかる。この世界に居る限りはいつかは乗り越えなくてはならない壁なのだと思う…だけど正直辛い。

「…凹むわ」

また大きく溜息を吐こうとしたあたしの目の前に最近見慣れた魔力の渦が突然現れた。
ただ魔法便とは思えない魔力の渦にコハルが冷蔵庫の大きさになって尻尾を立て警戒する。

［主…どうか私の後へ…］

魔力の渦から足が出たと思ったらあっという間に人が立っていた。
グルルと威嚇をするコハルの後に下がっていたあたしはその姿を見て茫然としてしまう

「……え？」
「…ん？ここは…アサミズの家ではないのか？」
［…主…知ってる方ですか？］

コハルは警戒を解かず威嚇だけを止め、あたしへと質問してくる。

「知ってるも何も……」

目の前に立つリュージュを見て思った事が、ただの平原に立っていても皇帝は皇帝の貫禄を持ってるって凄いな…なんてくだらない事だった

５４話　ドロドロしたモノ（後書き）

２６０万ＰＶ＆５０万ユニークありがとうございます

心より感謝いたします

55話　…チキンハートですから

何でここにいるのか何てどうでも良かった…。

ただそこにいてくれるだけで…良かった

リュージュの姿を見たら目に涙が浮かんで、込み上げてくる嗚咽をひたすら我慢した。黒の守護者って事でがんじがらめってる頼っちゃいけない人なんだけど、今はあたしの力を知っててすぐ側にいてくれる存在が凄く有り難く嬉しかった

「…ぅっ…く」

立ち止まったまま下を向いて涙を我慢してるあたしをリュージュが何も言わずそっと胸に引き寄せてくれる。その途端、涙の決壊が壊れて溢れてきた。泣き声はいつか叫び声のようになってあたしはリュージュの背中にしがみついた。

そんなあたしにリュージュは「間に合わなくてすまないかった」と謝りながら背中をずっとさすっていてくれた。

ずっとそのまま泣き続け涙が収まってしゃっくりに変わる頃、どれぐらい泣いたのか…泣きついたリュージュの服の濡れ具合からもかなり泣いた事がわかる。

思いっきり泣くというのはカタルシス効果だっけ?頭がちょっとぼーっとするけど…でもすっきりした。

ただ落ち着いてくるとリュージュの背中をがっちり掴んでるあたしがどうみても抱きついてる現状に顔が蒼くなる

「ご…ごめん。リュージュありがとう」

あたしから抱きついてる状況に…とりあえず目が見れない。感謝の言葉と一緒に背中に回していた手をリュージュの胸に押しあてそっと距離を取ろうとしたが、今度はあたしの背中に手を回していたリュージュが離してくれなかった。

……どうすれば？

ちょっとドキドキしてしまう自分が嫌だ。

いや…抱きついてたのはあたしなんですけどね…。現金な物でさっきまでどん底で落ち込んでたくせに……切り替わりの早さに自分でも呆れる。

「…何があったか話せるか？」

そんなあたしの混乱を知ってか知らずかリュージュが頭上からいい声で話しかけてくるし、このままで話せと……いや、普通ならドキドキのトキメキモードなんでしょうけど、この人黒の守護者だし…ね。ドキドキしてるあたしのチキンハートを弄ばないで欲しいっていうか…

「話すので……離してもらっていいですか？」

「……大丈夫なのか？」

「はい。…ちょっと動揺してただけですから」

ようやく緩んだリュージュの腕から秒単位の素早さで飛び出ると、リュージュの顔の片眉が上がるのが見えた。はい…言いたい事はわかります。胸をお借りしといてその態度は無いと仰りたいんですよね？とても感謝してるんです！でもね…でも私…チキンハートなん

です。引きつったあたしの笑みを見てリュージュは言葉を紡ごうと開けた口を一度閉じ、ふぅっと溜息を吐いた後、明らかにわかるように別の言葉をあたしに問いかけた。

「で、何があった？」

「あ…の、初めて魔獣を…」

続きを口にするのはやっぱり抵抗があって、あたしは大きく息を吸った

「殺し…ました」

「襲われたのかっ！？」

リュージュの想像より大きな反応に思わず身体がびくつく。そしてリュージュが慌てた様にあたしの身体をべたべたと触って来た…

…心配してるんだろうと我慢したけど…

…とりあえず手刀をリュージュの頭に落とした

「…ぐ…ぅっ」

「……触りすぎ、セクハラです」

…放置してたらどこまで触ってるんでしょうね…まったく。

「……怪我は……無いんだな？」

「あったらもっと悶えてると思います。あたし痛いの我慢出来ない子なんで」

「そうか…なら良かった。でもなぜ魔獣に襲われるような事になったんだ？」

「正確には襲われたわけじゃなく、巣穴を突いたのはあたしです。

魔魂が必要だったんで、近くにあるって聞いて取りにいったんです」

襲われたのなら殺した罪悪感は少なかったのかもしれない…仕掛けたのもこっちなら最後に殺したのもこっちなのでより罪の意識が増長されてる。

「魔魂？なぜそんな物を？」

「入学試験に必要だったんで…」

「それなら問題と一緒に送られたはずだが……あの紅い魔獣は何だ？」

いつの間にか少し離れた場所で大人しく座って待っていたコハルにようやくリュージュは気付いたらしく…

「あ、紹介します。…コハルおいで」

あたしが呼ぶと反応したコハルは尻尾を振ってこちらに歩いてくる。ちなみにサイズは冷蔵庫サイズなのでトコトコというよりのそのそという歩み音のが近い。コハルはあたしの側まで来ると、先程までと同じようにお座りの形をとる

「コハル？」

名前を聞いて引きつった顔のリュージュを見て『ですよね～』と同調するのはコハルを傷つけそうなので心の中だけにしておく。

「はい。試験の魔魂から生まれたあたしの聖獣らしいです」

あたしがそう言いながらコハルの頭を撫でると、コハルもあたしを心配してくれていたので嬉しそうに頭をあたしの身体にすりつけ

てくる。

「…確か試験書類の配布は昨日だったはずだが…」
「ええ。昨日届きました」
「……一日で生まれたのか？」
「正確には３時間半です」

愕然とするリュージュにやっぱり自分は規格外なんだなぁと改めて思いながらも、コハルは可愛いので全く後悔はしてない。
ショックから立ち直ったリュージュが納得したように頷く

「…それで魔魂が必要だったのか」
「そうなんです」
「だが、この辺に火山や火系の地帯は無かったはずだが…」
「え？送られる魔魂の属性って決まってるの？」

それは初耳。ランダムで色んな魔魂が送られてるのかと思った…

「火系の魔魂が一番入手がしやすいからな。一番最初に学院の生徒が手にする魔魂は全て火系と決まっている。ただ他の属性の人間には火系魔魂は孵す事が出来ないから入学時点で各魔魂に交換される。火系魔魂に各属性の魔力を注ぐという事も資料としての価値があるからな…レポートとして提出させそれを資料として使っているようだ」

なるほどね…つまり一挙両得ってやつですか…

「…でもそれって…火属性の生徒の方が先に魔力を注入出来て得って事になるんじゃ」
「火系魔魂は他の属性の魔魂より孵化が遅いんだ……遅いはずな

んだ……」

出たよ。あたしのハイスペック……ちょっと落ち込んでるリュージュは見なかった事にしよう

「まぁ…アサミズが特別なのは…わかっているからな…」

「すみません……ってちょっと待って…」

じゃあ…あたしが取って来た雷属性の魔魂って……無意味。

「アサミズっ！？」

ショックで倒れそうになった。

「じゃあ…何の為にあたしはあの雷獣を殺しちゃったの…」

「ら、雷獣と戦ったのか！？」

また涙が出そうになるのを必死に我慢しながら、事の経緯をリュージュに話して聞かせた。話終わるとリュージュがあたしの頭を手で軽く撫でながら「頑張ったな」と言ってくれた

「ただ…厳密に言うとそれは殺したわけじゃない」

「…え？」

…殺したわけじゃない？

「コハル…だったか？聖獣によってとどめをさされた魔獣は魔力となって分散するだけだ…また時間が立てば、魔魂の形となるだろう」

「人にとどめをさされた場合が魔獣にとっての死であって、魔獣

からは魔力を宿した部位が手に入る」

つまり…コハルが助けてくれたって事？

「…コハル？」

［主はあの積乱雲を消し去る力をお持ちですのに、それをしないという事は穏便に事を済ませたいという事だと解釈しましたので…ただあの魔獣はやっかいだったので炎で焼きましたが…］

うん。そんな力が自分にある事なんて知らなかったし方法も全然わからないけどね…コハルはあたし以上にあたしの事わかってるんだってびっくりした。それにあたしの聖獣はあたしの意識下にある『殺したくない』って考えをきちんと汲み取ってくれてる。

ぎゅうとコハルの首に抱きつくとコハルが顔を一舐めしてくれた

［その事で悩んでらしたんですね。気付かなくて申し訳ありませんでした］

「ううん。ありがとう」

ん？何だか視線を感じたので見上げるとリュージュがこちらを見て固まっていた。

「リュージュ？」

「…コハルは…人語を操れるのか？」

……使えないハイスペックは、こんなところで大絶賛活躍中らしいです。

55話　…チキンハートですから（後書き）

少し長めです。

前半が暗く執筆が思う様に進まなかったのですが、後半は元のノリに戻って気付いたらいつもの倍ほどの長さになってました…（苦笑）

56話　夢見る聖獣

コハルが人語を操れる事は特殊な事だと知って、これはちょっとハイスペックに感謝した。だってやっぱ動物大好きとしましては彼等との意思疎通って憧れだったしね。それにしても泣いて喋ったら…凄く喉乾いた。と言ってもここ平原の真ん中だし、自販機もコンビニも無い世界で気軽にお茶を買うとかも出来ないし…

「…ねぇリュージュ、とりあえず家戻らない？」
「…ん？あぁ…そういえばここはどこだ？」

…ここは知らなかったのかよってツッコミをいれるべきなのか、それともそんな事も知らずにどうやってここに来たのかを聞くべきなのか悩む所だったりする。

「アサミズ…こんな何も無い所で何か用事があったのか？」
「いや…用事があったのはあたしじゃなくて貴方でしょ？」
「……」

無いのかよっ！！駄目だ。このまま会話続けてたら永遠に家に辿り着かない気がする

「コハル帰ろう」
「了解です。主」
「……リュージュもコハルに乗ってく？」

あたしとコハルの会話を聞いていたリュージュが不可解な顔でこちらを見つめてる。…そんなにあたしのここでの用事が気になるんでしょうか？説明しようにも特に用事なんかないから説明しようが

無いですけど…適当な事でも言おうかと考えてるとリュージュが話しかけて来た

「…家までなら何故わざわざ聖獣に乗っていくんだ?転移魔法使えば簡単だろう?」

「……」

えぇ…忘れてました、すっかり忘れてました。さっきまでは頭がぐちゃぐちゃだったんで…考える力も無かったんですけどね…今は普通に忘れてました。ただ素直にそれを認めるのは何だか癪なので…

「…わわ、わかってたわよ。ただ…ちょっと空中散歩したい気分なの!」

「そうなのか…」

嘘です、ほんとはもの凄く喉渇いてるんで早く帰れるなら早く帰りたいです。あぁ…あたしの馬鹿。何こんなところで意地を張り合ってるんだか…これは弱い自分を見られた反動ってやつですかね…そんな腹の足しにもならないプライドは捨てるに限る。さっさと謝って転移魔法で帰ろ…

「コハルは火系の聖獣なので私とは相性が悪い。なので私も聖獣を呼ぼう」

「……はい?」

「ルシェーリア!!」

「いや…あの…転移」

リュージュが見上げた空を追って見上げるとそこに大きな魔力の渦が現れていた。渦の中から現れたのは…どう見ても影だけ見るとでかいワニ……コハルだけが凶悪なのかと思ってたけど…もしかし

て聖獣って全部こんなのばっかなの？聖獣って言葉に夢を見ちゃいけなかったの？しかもその見た目にルシェーリアはないでしょう…

「……」

リュージュのワニこと、ルシェはどんだけ凶暴な見た目なんだろうって思ったけど側に来ると意外や意外…美しかった。ワニのような姿だけどあんなごつごつした皮膚じゃなくて、魚の鱗のような物が身体を覆い、透き通りそうな水色をして光り輝いてる。瞳も全体的には透明で宝石のキャッツアイのように縦に一筋だけ青いラインが入っていて、こちらをじっと見つめている。

「…綺麗」

「そうだろう。ルシェとは一番長い付き合いだ」

微笑みながらリュージュは優しく側にいるルシェの身体を撫で、ルシェもそれを気持ち良さそうに受け止めている。うぅ…聖獣呼ばれちゃったら、それで帰るしかないよね

「コハル…んじゃ、さっさと帰ろう」

［では背にお乗り下さい」

「ん…」

あたしは伏せたコハルの背中にうつぶせに乗ると、何気なくリュージュの方へ視線を向けた。いや…だって空飛ぶワニとかって…普通見てみたいでしょ？しかもリュージュの乗り方とか気になるじゃない。まさか綺麗なルシェの背に立ったりとかは無いでしょ？

［主…飛びます］

「いいよー」

リュージュ達より先にコハルが翼を羽ばたかせ飛び上がる。全然翼によって揺れる衝撃がないから翼をはためかせなくても飛べそうな気がするんだけど…まぁ…見た目も重要だよね。

先に飛び立ってしまったので疑問が解決されてないんですけど…

…なので空中で安定した状態になってすぐ後を振り返ってしまった。

…ワニが飛んでます。普通に水の中を泳ぐみたいに前脚がふにふにと動いてらっしゃいます…ふにふになのに凄いスピードだし…うん。聖獣には陸海空は関係ないのかもしれない。そしてそれに乗るリュージュは…

「……何故横乗り」

あれですよ、あれ！好きな男子の自転車の後に女子が乗るあれですよ！

いや…美形なんで風に髪をなびかせてすっごく絵にはなるんですけどね……なるんですけど、せめてさっきあたしを抱きしめてくれた人には少なくとも少年のように股がっていて欲しかったというか。

「ねぇ…コハル。乙女心は複雑だね」

［主？］

「うん…複雑だ」

一人納得するあたしにコハルは首を傾げたけど、それ以上は深くつっこんでこなかった。あたしの状態が回復したからか高度を上げて飛んだので、さっきコハルが言っていた民家は見えなかったし、降りるまでとは全然違う速度だったのであっという間に村まで戻ってくる事が出来た。あたし達が村の外れに降りた後すぐにリュージュとルシェも降りてくる。

そして降り立ってすぐルシェは軽く浮くとリュージュの周りを一回りしてまた空中に戻り、魔力の渦を発生させその中へと潜ってしまった。

「…あれはどこに行ったの？」

ルシェの一連の行動を見つめながらあたしは側のコハルに聞いた。

「私たちは魔力の塊ですので、通常の空間でこの形態を取る事は自分と主の魔力を常に消費してしまいます。ですので普段はその力を使わずにすむ魔空間に身を寄せます」

「へぇ…じゃあコハルも？」

「私は…魔力を持て余してるぐらいなので…それに主が常に補給して下さいますし…」

「……」

ガソリンスタンド安佐水。ふふ…もう開き直ってきたよ

「ですが魔空間に入る事も出来ますから、何かあるようでしたら仰って下さい」

「まぁ…その都度考えるよ。今は別に居ていいから」

「はい」

居ていいと言われた事が嬉しいのか尻尾がブンブンと揺れている。可愛い奴め…ぐりぐりしてやろうか…

「アサミズ…何やってるんだ？」

はっとして声をかけられた方を見るとリュージュが呆れた視線を向けていて。どうやら想像でコハルをぐりぐりとしていたら手がワ

キワキと動いていたらしく…そんな場面を見られ…固まってしまう。

「…手の…運動？」

「……アサミズは時々おかしな行動をする」

いやいや…ワニに横乗りしてた人に言われたくないしっ！！

とりあえずリュージュの発言は無視してあたし達は家に向かったのだった

56話　夢見る聖獣（後書き）

なんだか入試だけで結構な長さになりそうなので、章のタイトルを魔術学院入試編へと変えました

57話　皇帝モード

玄関を開けてると忘れていた悲惨な部屋の状態をが飛び込んできた。うん…そういえば昨日コハルが産まれた時に酷い状況になったんだっけ…玄関と天井は直したけど、破壊されたままの机とか散乱した本とか…そのまんま。で、今のあたしの状況はその部屋の真ん中に正座させられていたりする。目の前には椅子に座ってそこら中に散乱していたあたしの受験資料を手にとって目を通してるリュージュ。

「…これも古い。全然使えない」

リュージュは手に取っていた本を投げ捨てた。投げ捨てた先にはすでに山のように本が積み重なっており、それらはすべてここ一ヶ月あたしが受験勉強に参考書にしてきた本たちだった。もちろん『はじめてのまほうのつかいかた』もすでに山の一部となっていて、リュージュはため息を一つ吐くとあたしに視線を向けてきた。

「こんな資料で勉強していたのか？」

「はは…」

だって村の本屋で買える本なんてたかがしれてて、これでも一番近い大きな街から取り寄せなんかをしてもらって精一杯のものを買ったのだけれど…

「アサミズ…帝国魔術学院は帝国の中でもトップクラスの学校だ。その学校に私やメルフォスの後盾なく平民受験で入学したいのだろう？」

「……はぃ」

「…敢えて聞くが、入試の筆記試験の魔法陣はどんな物を用意するんだ？」

…もちろん『はじめてのまほうのつかいかた』から適当に魔法を写すつもりでしたけど…そんな事を言ったら殺されてしまいそうな気がするのは空気読めるんでわかります。

「まだ…考えてなかったかも…ほら！昨日試験内容知ったばかりだし！」

「……」

リュージュが頭を抱えるのを見て「あ…あたし落ちたな」って確信しちゃったり…どうしよう？とりあえずライザ母さんが帝都で開く店をお手伝いしながらもう一度きちんと受験勉強するしかないか…ま、やって無駄な事なんてないのだし、この一ヶ月の勉強だってきっとどこかで役に立つだろう。

「アサミズ…」

すっかり頭の中で再来年受験モードに切り替わっていたあたしに地を這うような声が届いた。声の方を見るとリュージュが笑顔だけど背後に黒いオドロオドロシイものを背負ってる。見るからに皇帝モードになったリュージュに嫌な予感がする…というか嫌な予感しかしない。この人にギャップ萌えとかありえないし、ひぃって叫び声しか出ないわ！

「今から猛受験勉強だ」

「え？いや…あたし再来年入学でもいいし、っていうか受かるまで頑張るし」

「…絶対来年入学させてやる。すぐに私と一緒に帝都に来い。そ

れぞれのエキスパートな先生も見繕ってやる。…城でみっちり試験勉強だ。まさか平民受験したいって言ったくせに断るなんて事しないよな？」

さらに笑みを深めるリュージュはあたしが正座のまま壁際までズザザザーって下がってしまうほど恐ろしく。…怖すぎる…いつもの紋章使いのわんこリュージュは何処へ行っちゃったんですか！？助けを求めようとコハルに目をやっても頑張ってといわんばかりに尻尾をフサフサと振っている…裏切りやがった…

「しっかり陰から見守って合格させてやる」

ダラダラと流れる汗はもちろん冷や汗で、そんなあたしを見てリュージュの背後の黒さがどんどん増していってるのは…気のせいであって欲しい。そして黒いリュージュは尽くあたしの先手をつぶして行く

「ちなみにメルフォス家がどうのって言い訳は聞かないからな、メルフォス家も今週中には帝都へ引越しだ。２．３日アサミズが早いぐらいどうってことはない。それどころか帝都の城に『１人』で居るメルフォスは早めにアサミズが来れば喜ぶだろう」

…メルフォスさんの裏切り者ぉー！！…なんて本人にとって完璧な八つ当たりの全く意味の無い八つ当たりを心の中でしてみる。それにしても黒い！黒すぎる！！リュージュ！！

「…でも試験まで後一ヶ月しかないけど」

「俺を誰だと思っている、皇帝だぞ？この国で俺の思い通りにならない事はない」

いやいや…皇帝の力を一平民受験に例えるって間違ってますから。まぁ…リュージュに適当に付き合って…でもそれをやって落ちちゃったらどうしようもないし。また再来年受験という事で…そんなあたしの考えを読み取ったのかリュージュは椅子の背に持たれ、組まれた足の膝部分で手を握った体勢だったものを、足を開き、膝に肘をついて組んだ手の上に顔を乗せた前屈みの状況で笑った。

「アサミズ…再来年など無いと思え。平民受験に失敗するようであれば私の力だろうが後見人だろうがどんな手を使ってでも入学させるからな」

ひぃぃぃ!!そんなまんま裏口入学、一番嫌です!!!

「頑張ります!頑張りますから…勘弁して下さい」
「死ぬ気でやれ」
「了解でありますっ!!」

あたしがとっさにした敬礼姿勢に満足したのか、リュージュは椅子から立ち上がると玄関に向った。

「30分で大事な物と簡単な身の回りの用意しろ。後の荷物はメルフォス夫人によろしく伝えておく」

そんな捨て台詞を残しリュージュは出て行った。

うぅ…確実に一ヶ月地獄が待ってる。皇帝モードのリュージュ恐るべし。これ以上怒らせる事は避けたいので、この世界に着て来た服や、鞄。そして数枚の着替えと日用品などを慌てて荷造りした。

もちろんコハルの首元を腕でロックして頭に拳骨でグリグリする事も忘れない

58話　再び帝都へ

きちんと30分後に戻ってきたリュージュはあたしがきちんと荷物を用意しているのを見て満足そうに頷いた。話を聞くとライザ母さんへの挨拶とミレーヌが一緒に行きたがったのを止めるのに苦労したらしい。最終的にはライザ母さんを1人この村に置いておくわけにもいかないので…となったらしい。自分が戻ってすぐにメルフォスをこちらに戻すと言った事も説得の勝因だったらしいけど…

「ではアサミズ行こうか」

リュージュがあたしの荷物を持ってこちらを向く。…だけどまだ疑問があるんで

「あと少し待ってもらえます？」

にっこり笑ってリュージュに言うと、あたしは側にいたコハルに目を向け話しかけた。

「転移魔法ってコハルも乗れるの？」

［主、私は一度魔空間に入って主の気配が落ち着いた時点で合流します。主の魔力があれば迷う事なくどこでも合流出来ますので安心して下さい］

なるほど。そういえばリュージュのルシェもどこからともなく現れた魔力の渦から出てきてたもんね。

「そっか。じゃあまた後でね」

［はい。主も快適な旅を…」

そういうとコハルは空中に浮かび口を大きく開け魔力の渦を発生させた。その中に飛び込む姿はいかにもファンタジーな感じでちょっと感動した。さて快適な旅が出来るかどうかは今からこの人を説得出来るかにかかってるんだけどね?あたしはコハルが魔力の渦に消えるのを見送った後にいつの間にか背後にいたリュージュに顔を向けた

「もう済んだな?なら行くぞ」

「あのぉ…その事なんですけどあたし…転移魔法かけます」

「何故だ?帝都へは私の方が慣れている」

ガース国の人ので懲りたんで、絶対他人の転移魔法に乗るのはごめんなんです。ただそんな事を言ったらガース国の使者さんに酷い扱いをされた感じなので、どうにか穏便にあたしが転移魔法をかけたいんですけど…

「あたしの方が魔力あるから」

「っ!!」

…あ、落ち込んだ。だって…ねぇ、ほんとの事だし。使える魔法は少なくても使える物の技術は多分あたしの方が精度高いと思うし。落ち込んでる姿のリュージュを無視しつつ…だって仕方ない事のフォローとか面倒くさい…

「…そんな感じなんで。これかけて」

あたしはリュージュに用意していた転移用サングラスを渡す。

「これは？」
「まぁ…かけてれば分かるから」

そう言いながらあたしは自分用のサングラスをかけると、髪に魔法がかかったのがわかる…そういえばそんな追加魔法を組んでたんだ。…すっかり忘れていたけど…目の色とか…コンタクト作るのとかもすっかり忘れてたし…

「こんな時に何なんだけど…城で魔法実験とかしてもいいの？」
「…？被害が出るような危険な実験であれば事前に申請がいるが、それ以外であれば大丈夫だ」

シリコンハイドロゲルを合成するのに…爆発はしないと思うけど…。取り扱い間違えたら有毒ガス出る工程が確かあった筈…ただこれは白の加護を使った合成だから、城の資料で他に対処出来そうな物があればそれでもいいかな，瞳の虹彩とか変化出来れば一番簡単で目に負担が無いし…あたしが考え事をしている間にリュージュもサングラスをかけたのであたしはリュージュに向ってにこっと微笑むが、…どうやらリュージュは目を瞑っているようで何のリアクションも帰ってこなかった…

「…それじゃ行きますか」

と言ってから初めて問題が生じた。あたし他人を転移魔法に乗せた事無いんですけど…よく考えたら自分の身体構造と転移魔法を合成させて転移してたから他人を乗せるなんて出来そうに無いんだけど…

「あの…リュージュ…」

あたしが話しかけるとリュージュが目を開けた。

「…どうした？」

あんだけ大見得切っといて…今更出来ないとか非常に言いにくいですが、正直に言わないとリュージュにあたしのやり方で無理やり転移魔法に乗せて身体バラバラとか洒落にならないんで…

「あたしの転移魔法1人乗りかも…」

「は？」

「…というか人を乗せたことが無いから、やっぱちょっと怖いわ」

…だからといってリュージュの転移魔法に乗るのも怖いので…

「というわけで…現地集合にしませんか？」

「…何が『というわけで』だ」

「うぅ…だって…」

リュージュを乗せれない、リュージュの魔法に乗りたくない…どちらも絶対譲れない。そんなあたしにリュージュは大きい溜息を吐く

「ならば…私がアサミズの追尾魔法をかける。それでいいか？」

「…追尾？」

「いわゆる便乗魔法だ」

リュージュの説明を簡単にすると、メインの魔法をかける人が居て、そのメインの魔法に便乗が出来るグループ魔法らしい…それなら自分が使えなくても上級魔法に便乗出来るらしい。便利な魔法があるもんだ

「じゃあ…それで…あたしは普通に魔法かければいいんだよね？」
「ああ。すぐに行くから転送空間で停止しておいてくれ」
「わかった」

そういうとあたしは自分の身体を認識して転送魔法を合成していく。いつものように自分の身体が沈みきったところで目を開ける。するとすぐにその空間に歪みが発生してそこからリュージュの身体が現れた

「へぇ…転移空間に現れるのってこんな感じなんだ」

リュージュはあたしの横に着地すると、手を四方に動かし何かを確認している。盲目の人が行なう行動にリュージュが目を瞑っている事がわかる

「リュージュ…目開けても大丈夫だから」
「？だが…光が…」
「いいから開けてみてよ」

あたしがそう言うとこちらを向いて目を開けようとしているらしいが、サングラスに遮られ開けているのかどうか確認は出来ない

「これは…」

驚いた口調を聞いてようや目を開けたのだとわかる。辺りをきょろきょろと見渡し、それからまたあたしへ顔の向きを戻す。

「これのお陰か？」

そういってリュージュが自身のサングラスに触れる

「そ、この転移空間の光でも耐えられる魔法かけてるから」
「驚いた。さすがだな…」
あたしは褒められた事に素直に照れてしまう。
「じゃ。スピード上げて行きまーす！」
そう言ってあたしが乗ってる道の加速を上げると、リュージュがよろめいた。慌てて彼の手を掴むと、安定した後もずっと城に着くまで離してくれなかった。

59話　悪魔が来たりて、地獄を言い渡す

帝都の城に着いて、次の日は休みを貰った。その間にメルフォスさんに会ったり、城の間取りを覚えたり…全部は覚えられなかったから自分の使用しそうな所だけ把握した。あたしに用意された部屋はリュージュの部屋以上に豪華絢爛な部屋で、客間らしいその部屋は落ち着かないので部屋替えを希望したが泣きながら懇願という却下をされ…仕方ないので部屋にあった移動出来そうな家具で一部の空間を四畳半に区切った。用意された、というか元からあったベッドがその中に入るわけがないので、調理場からいらない木箱を大量にもらって囲われた空間に簡易ベッドと机を作った。

傍から見るとデカイ応接間の隅に突如バリケード部分が登場したみたいになっており、中に入ると…木箱による簡易机とベッド…戦後な香りがプンプンと漂うけど…うん、落ち着く。そんな感じで次の日は終わり、こんな感じで1ヶ月過ぎるのかと思いきや…

「…落ち着いたか？」

と夜にリュージュが持ってきた今後のスケジュールに村に逃げ帰りたくなった。

「…何ですか？これ」

手の中にある1ヶ月の予定表を凝視してしまう。見間違いかと思ったそれは何度見てもやっぱり変わらず…

「月曜、言語。火曜、魔術（医術含）講義。水曜、魔術（医術）実技。木曜、政治経済。金曜、歴史・地理。土曜、剣術訓練。日曜、

礼儀作法。各1日休憩は10時間……え~っとどこから突っ込めばいいのか…」

「…これでも最低限だ。期間が短いので全部上澄を浚うぐらいしか出来ないだろうが…しないよりマシだからな。ちなみに明日から朝から晩までみっちり各指導者の指示に従って貰うぞ」

「つかぬ事をお聞きしますが…休みは…」

「この1ヵ月は基本無いものと思え。ただ頑張り次第では2週目からは考えないでも無い」

…鬼が居ます。いや、鬼より恐ろしい皇帝がいます。

「…死にます。確実に死にます」

「大丈夫だ。調子が悪くなったらシーがいる。私が皇帝に就いた時にもシーが居たから政務で2ヶ月ほどほぼ不眠不休でも大丈夫だった。人間そんなに簡単には死なないさ」

いやいや…筆頭医確実に皇帝に何らかのジャンキー状態にしてるよね?それ。あまりの恐怖にひぃぃぃとワザとらしいほど怯えてみせるが、リュージュは動じない。

「ちっ…」

軽い舌打ちをしたあたしを見て、リュージュがスケジュールに何か書き込んでいる。それを再び渡されたあたしはソファに座っていたのをすぐ降りて土下座した。

「申し訳ありませんでしたぁ!頑張りますから『休憩時間。時と場合による』は元に戻して下さぁい!」

半泣きのあたしを見て、リュージュは無言で訂正に訂正を入れて

くれた。だってどうみても１０時間って休憩時間＝１日分でしょう？食事とか睡眠とか全部含まれてるんですよね？それを時と場合によるって……リアルに恐ろしすぎるでしょう。

「…あ、８時間になってる」

「ペナルティーだ。１週間ごとに見直すから、頑張って休憩時間も伸ばせ」

そう言ってリュージュはソファを立つと、「今日はゆっくり休め」の今日の部分を強調して部屋から出て行った。その後にあたしの「のぉぉぉぉ」という嘆き声が城全体に響いたのは言うまでもない

59話　悪魔が来たりて、地獄を言い渡す（後書き）

３００万ＰＶの感謝を込めて、通常更新とは別に、短いですがカットしようと思っていたシーンを載せました。

ありがとうございました。

６０話　月曜日、言語

１２時間の勉強時間に２４時間分ぐらいの勉強してみ？…普通に死ねるよ？魂が放心された状態のあたしの目の前に立つのはこの国の宰相と呼ばれる男…あたしの中での命名は『リュージュだけ（ここ重要）ラブな腐れ鬼畜』いや…ラブと言っても元世界でもっぱら腐女子の方に人気のそれではなく…根っから心酔してますって感じ、あ、でも年上だから溺愛の間違いか…

彼のあたしの四畳半の部屋を見て第一声が「…アサミズのようですね」だったから…それは身体の事を言ってるのか、性格のみみちさを言ってるのか、それとも根っからの平民根性を言ってるのか判断しかねたのでとりあえず笑うしかなかった。それにしても木箱で一人勉強する平民の図はいいとして、４畳半に男の人と二人で居るのって息苦しい…しかも貴族様だから威圧感半端ないし…これは一人で四畳半は落ち着くけどカテキョがいる時はちょっと…なんて手を動かしながら考えてたら

「アサミズ、ここの綴りが間違ってます。余計な事を考えずに集中しなさい」

と言って宰相が持っていた指示棒であたしの手を軽く叩いた。…何度目かのその行為は軽いくせに地味に痛い。宰相が教えてくれてるのは貴族・その他言語各種と政治経済で初日の3時間ぐらいは休憩挟みながらゆっくりと進行してくれてたのに、あたしが実は２５歳だと知った途端、態度が１８０度変わって超スパルタ方式に変換されたのだ。やはり若い子がいいのね！！と1時間ぐらいごねて愚痴ってやったら

「あのですね…12歳と25歳で態度が違うなど当然でしょう。はっきり言いますが12歳が持つ知識量と25歳が持つべき知識量では天と地ほど差があります。持つべき知識を有していない、つまり今の貴方は12歳してはお利口ぐらいです。そんな貴方がそもそもより博識を必要とされる魔術学院の試験に合格しようとは…はんっ」

…最後の『はんっ』はご想像通り鼻で笑われましたよ。それから休み無しで貴族言語の文法やら書き取りやら…書き続けて10時間。腱鞘炎で人って死ねる気がしてきた…右手親指の付け根部分からとんでもない悲鳴が聞こえる…。元世界のどの受験でもあたしこんなに勉強した事ないです…そしてこういうところにハイスペックが欲しかったと切に願い続けて8時間ぐらいです。

「…それにしても何でこの国には成人貴族文字だけで3種類もあるんですかね?言語的には一種類なのに」

「簡単には貴族の中にも高位貴族・中位貴族・下位貴族があるからでしょうね」

「あ〜公侯伯子男ってやつですか?」

「おや、爵位はご存知ですか?一概にそれだけとは言えませんが…高位文字は公・候、中位が伯・子、下位が男・騎を扱うと思っていただければ…」

改めて思うけど何故一つにしない…。あたしの不満が顔全面に出ていたのか、宰相は苦笑すると別の解釈も述べてくれた

「高位文字は主に政治や調印等に使用され、中位文字は貴族同士の手紙のやり取りなど、下位文字は中位文字に平民文字が混ざった物です」

うん…意味はわかるけどさ、何にしても…２５歳で一から習うのはキツい～～～。

「いたっ！」

「アサミズ、集中力が切れてますよ。ここの文法が違います」

「…うぃ～」

下位文字は平民文字に近かったので結構楽にクリア出来たし、中位も下位からの流れで何とかなった…。問題は高位文字で中位や他の文字とも全く異なった文字で形成されてるからかなり大変。元の世界に例えるなら英語とか中国語などの辛うじてわかる物を習ってる中、突然アラビア語がやって来ましたな感じ。

手を叩かれた出したのもほとんど高位文字になってからだし…元々勉強嫌いじゃないけど…まじでこれを４週間で覚えるのはキツいんですけど…

「…高位文字って試験までにどうしても覚えなきゃいけないんですか？」

「覚えていて損はないです。陛下に言語は全てマスターさせるよう言い遣っておりますので」

リュージュの馬鹿やろぉ～！って心で叫びながら満面の笑みを浮かべて宰相を見る。こう見えても営業で鍛えた笑顔を貼付ける技術は伊達じゃないです

「…少なくともアサミズは政治に向いてるようですね。どうです？魔術学院受験を止めて城に勤める事を考えては？それならば言語と政治経済だけで覚える事は済みますよ？１ヶ月なんて括りもないですし」

いやいや…政治なんて全然関心ありませんから…。そんな物に関わると碌な事が無いって知ってるし！それでなくても厄介事を一杯背負い込んでるんで、これ以上はご免被ります。っていうか魔術習えなきゃ意味ないしっ！

「結構です。地味に頑張ります」

「……そうですか？ならばもう１００回この単語集の書き取りをお願いします」

…かなりのページ数ありますけど？視線だけで「全部ですか？」「全部です」の会話をした後あたしは思わず叫んでいた

「鬼ぃぃぃぃ！！！！」

まぁ…そんな泣きそうな宰相のスパルタ教育のお陰で３週間目には２５歳が知っているであろう全ての言語が理解出来るようになりました。

61話　アサミズヒヨリ改造計画

生まれてこの方、清清しい朝をこんなに恐ろしく感じた事は無い。
初日の言語授業で完璧に腱鞘炎になった手はズキズキするし、頭の中は昨日覚えた事が耳からどんどん流出していくのを防ぐのが精一杯。こんな状況でどうやって新たな知識を詰め込めというのか…そんな事を簡易ベッドの上でボーっと考えてる間に時は無常に過ぎていき、バリケードな家具の向こう側の扉がノックされ、扉が開かれると同時に声が聞こえてくる

「アサミズ様、お早うございます」

返事も聞かずに部屋に入ってこられたおば様…ナサエラさんは侍女長らしく、城に滞在している間、作法の事など何もわからないあたしの面倒を見てくれるらしい。バリケードの入り口からちらっと顔を覗かせこちらを確認してくる

「ラッシュ様がすでにいらっしゃってますが？」
「…？ラッシュ様って誰です？」
「本日の魔術講義の先生でいらっしゃいます」

あたし…今起きたばっかりなんですけど。習慣になっている7時起床。つまり

「…まだ朝の7時ですよね？」
「はい。初めてお目にかかるのでご一緒に朝食を、といらして下さったようです」

いりません！そんな気遣いいりませんっ！何が悲しくて今日一日ずっと顔を合わせる人間とさらに長い時間を過ごしたいと願う人間がいるんですか。プライベートと仕事をきちんとわけましょうよ！！！と叫びたくても、こちらは教えを請う身。うぅ…最弱な立場です

「わかりました。すぐ用意します」
「入浴をお手伝いいたしましょうか？」
「いえっ！いいです！」

来てすぐに入浴をお手伝い頂くという羞恥プレイは経験しましたので、あれからお手伝いはご遠慮頂きたいと心の底から願う次第です。この世界のお貴族様は日常的にあれってほんとに凄いと思う…。まぁ…リュージュとかエリルさんみたいな見た目が『美』な人なら大丈夫なんでしょうけど…けっ！

…うん。昨日の疲れが残ってて自分でもやさぐれてると思う。
それに何より小心者なんで人を待たせてるのにゆっくり入浴とかありえないし…

あたしは壁にかけてあった服を取ると着替えた。もちろん白シャツに黒のハーフズボンというこの世界ではどこの坊ちゃん？みたいな格好だけど、動くのに楽だし…それでなくても苦行な一日をずっとスカートやワンピースとか有り得ないし…ナサエラさんが手にしてるドレスなんて問題外です。

「ナサエラさん」
「はい？」

…そんな期待を込めた目で見ても駄目です。

「…それはちょっと」
「……」

ナサエラさんが哀愁を漂わせドレスをクローゼットにしまう後姿に、若干胸を痛めるがここで妥協してしまうと後が怖い。何故ならクローゼットの横にある鏡台には昨日まで無かった見た事の無い箱が一杯積んである。ドレスを着て鏡台へ直行し色々弄ばれる自分を想像してしまって、ぶるっと身体が震えた
部屋替えを泣き落としで却下したのももちろんナサエラさん

「…恐るべし、ナサエラ」

誰かからの極秘使命を受け『アサミズヒヨリ改造計画』とやらを実行中の彼女は油断ならない。彼女に届かないような小声で呟きながらあたしはだいぶ伸びて来た髪をいつものようにシニョンに結った…腱鞘炎のせいで乱れた感じになったのは愛嬌というか…やつれです…多分。ちなみに色はリュージュからピアスを返してもらったので目の黒色が目立たない様に深い青にして、ふわふわモードから直毛スタイルに戻した。魔術関連の授業が始まるまでに瞳の色をどうにかしなくてはと思っていたのに、昨日は疲れ果てて不覚にも寝てしまった…

「どうしようかな…」

あたしは片耳のピアスを外すとそれに組み込まれた魔法式を頭の中に展開した。これにどうにかして目の色を変える方法を組み込めたらいちいちコンタクトとか考えなくて済むんだけど…髪みたいに単純にメラニン色素を弄ればいいってもんじゃないんだよねぇ…下手したら紫外線の抵抗なくしちゃうし…虹彩部分と網膜色素上皮のメラニン色素をどうにかしないと…メラニン色素がある場所は把握

してるのだから…黒褐色の真性メラニン部分を同じ構成の別の色に転化すればいいのよね？

「怖いけど…試してみるしかないよね…」

あたしはピアスに新たに眼球部分だけの固定魔法式を追加する。それには真性メラニンと呼ばれる光を吸収して黒くなる色素部分を、光を吸収して赤く変化するようにし、左のピアスには左目部分だけを指定した。

「…よし、つけてみる」

そういうとあたしはピアスを耳に戻した。そして目に走る魔力を感じ、違和感が無くなった状態で鏡台とは別のバリケード内の鏡を見てみた

「うわ……ウサギみたい…」

その瞳は瞳孔までも赤くなり、この世界にいる火属性の瞳と違和感が無い様に見えた。

「やるじゃん…あたし」

黒目と赤目のコントラストは不気味でしかなかったけど、取りあえず黒目と赤目交互に手で隠して色々な物を見てみるが、いきなり真っ赤な世界だったらどうしようとびびったのも何のその、視力も色判別にも支障はないらしい。あたしはもう片方のピアスにも同じ魔法式を追加すると、ついでに髪の色も黒に戻して、その足で今度は窓に向かい外の景色を見てみた。

「うん…とくに今までと変わらない」

光を見て眩しさを過敏に感じる事もなければ、視界はクリアな状態。

「アサミズ様？突然どうなされたのですか？」

ナサエラさんにとってはあたしが突然窓にへばりついてる状況が不可解なのか、ちょっと不安げな声を背後からかけられた。声のした方向へ振り向いてナサエラさんの驚愕の顔が飛び込んでくる…しまった…

「…あ、アサミズ様ぁっ！！め、目を怪我されたのですか！？」

慌てふためいて駆け寄ってくるナサエラさんに、あたしは手と首を思いっきり横に振った

「お、落ち着いて！あたしの目はこの色が元々の色なの、今日から魔術訓練だから変に幻術魔法とか自分にかけとくのよくないと思って…」

「…え？」

あたしの目の前で止まったナサエラさんの手は一体何しようとしてたんでしょうか？眼球抉られそうな形をしてるんですけど…怪我を調べるにしてもそれはちょっと危険だと思います…とりあえずこっちもかなりびびった。

「まぁ…火属性の方でしたの？」

手を元の位置に戻しながらナサエラさんがあたしに話しかけてき

た。火属性にしたのはコハルが火属性なのでその方が都合がいいと思ったからなんだけど…

「う、うん。ごめんね。驚かせちゃって」

「いえ…でもほんとにびっくりしましたわ。瞳に幻術なんてかけれるんですのね…」

「あたしの祖国で流行ってたの」

瞳の色は嘘ですが、カラコンが流行ってたのは嘘じゃないんで…ナサエラさんごめん。

こうして黒髪に赤目の女が誕生し、どこのアニメキャラ?にナサエラさんの思惑とは違った『アサミズヒヨリ改造計画』は完了した。

62話　エネルギーは満タンで

魔術講義のお兄さんは一言でいうと優しい兄風の人だった。片目を覆う前髪は長いが全体的には茶色の短髪、見えている瞳も茶色の瞳。顔立ちはいい方なのに…周りが美形すぎるのも可哀想だなぁ…と本人には有り難くもない憐れみを送ってしまう。あたしが部屋に入るとすぐに気付いて、立ち上がり入口まで迎えに来てエスコートの形を取ってくれるけど…これって日本人にはもの凄く恥ずかしいです…はい。

「お初にお目にかかりますラッシュ・ティディアーノと申します。医療部で副長をしております」

あたしを椅子まで導いてくれた後、その前で軽く会釈をしながらラッシュと名乗った彼は顔を上げるとにっこりと微笑んでいる

「あの…安佐水　日和です」

「…アサミズヒヨリ様、では、よろしくお願いしますね」

「あの…アサミズで結構ですので！」

そう言うとそれに対してもにっこり笑って「わかりました」と了承してくれる。そして彼も元の席に座るとタイミングを見計らった様にそれと同時に部屋の扉が開き、従者さんがワゴンに食事を乗せて入ってきた。

「アサミズ様、今朝は早くから押し掛けてしまってすみませんでした」

「え！？」

並べられる食事に夢中で相手を見ていなかったあたしは突然の相手からの謝罪にびっくりしてしまった。…だってさ、受験勉強中って楽しみ御飯ぐらいだったから、つい同席者がどうでも良くなったなんて…言えません。

「いえ…こちらこそ、お心遣いありがとうございます」

「？」

今度はラッシュさんが疑問符を頭に浮かべ、不思議そうに頭を傾けてらっしゃるんですけど…え？初顔合わせだから気を配ってくれたんじゃないの？あたしナサエラさんに確かそう聞きましたけど？

お互いがお互いに疑問符を頭に浮かべた状態で戸惑っていると、その間に食事が並べ終わったらしく「失礼しました」の従者さんの声でとりあえず食べましょうかの流れになった。あたしの「頂きます」に興味津々そうなラッシュさんを視界の端に納めつつも説明よりもまずエネルギー補給なので左手に焼きたてパンをがっつり掴んで、右手はフォークでよくわからない肉料理にブッさしましたよ！

…うん、ラッシュさんドン引きですね。でもいいんです！今は女気より食い気ですから、食べなきゃ持たない受験戦争っ！！

がつがつ目の前の食事を平らげていくあたしに、最初はドン引きだったラッシュさんの視線が途中からキラキラ光るようになったのは気のせいですかね？

「…目の前で食事が綺麗になくなっていくのはこんなに気持ちのいい事なんですね」

うっ！…なんか変なボタンを押してしまった…。

そこからはラッシュさん本人は食べる事など忘れてテーブルの上で手を組んで顎を乗せ、うっとりこっちを見てます。とても食べにくいですけど……いや、食べますけどね？

大半の食事があたしの胃袋に綺麗に納められ、目の前に食後の飲み物が並んだ辺りでようやくラッシュさんが話しかけてきた

「ところで…お心遣いってどういうことでしょう？」

「お心遣い？……あぁ！」

はい…一瞬忘れてました。どうもあたしは満腹まで食べると頭の回転速度が極端に落ちるみたいです。八分目にする予定だったのに、ラッシュさんが食べないもんだからついつい全部食べちゃいましたよ…。

「この朝食、初顔合わせで気を遣うだろうからって事じゃなかったんですか？」

「……」

違うのかよっ！！

ならあたしのゆったりまったりな朝の時間返せっ！！返してくれっ！！

「いや…それも理由の一つだったんですが…」

絶対嘘だね。片方だけの目が泳ぎまくってますよ？旦那。

あたしの胡散臭げな視線に気付いたのかラッシュさんはコホンっと一つ咳を吐くと、あたしに視線を合わせてきた

「ちょっと気になった事がありまして、授業の前にお伺いしようと思ったんです」

「…気になった事？」

…何だか嫌な予感がするんだけど、気のせいであって欲しい

「はい。城の魔障壁のゲート…私も拝見させて頂いたんですけど…」

「ぶはっ！」

…瞬間的に目の前の大人な男があのファンシーなゲートを潜る姿を想像してしまって吹いた。……はい、すみません真面目な話なんですね。びっくりした視線で殺されかけた。怖いよ…この人実は怖い人だよっ！！

「……まぁいいです。それにしてもあれほど綻びの無い完璧な魔法式を扱える人に今更なぜ各属性魔法の講座が必要なんでしょうか？しかも陛下から指示された内容が初級魔法からの指導で…理解し難い状況なのですが、説明して貰えますか？」

…あ。ヤバい…冷や汗タラタラです。さっきの食事全部リバースしそうです。っていうかリュージュちゃんとフォローしとけよぉっ！！！！

「え～っとですね…あの…ですね…」

…この人に黒の加護の事とか言っていいものなの？そしたら目を赤くしたの意味なくね？…まぁ…それはいいとして…どうしよう？…どうしたらいい？

テンパってほんとに気持ちが悪くなりそうになりかけた時、予想外の所から救いの手が入った。

「アサミズは異国からの留学生だ。出身国は転移魔法とシールド魔法に特化した国だったのでな…我が城の魔障壁もあんな風に細工が出来たのであろう」
「リュ…陛下！！」
危ない…名前で呼ぶとこだった…。
「これは陛下……お早うございます」
そう言うと目の前のラッシュさんはすぐに立ち上がって、椅子の横に跪き頭を下げた。その姿を見てあたしも慌てて椅子から立ち上がろうとしたのに、リュージュに手で止められた。で、何故かあたしの顔を見て愕然とするリュージュに首を傾げると、リュージュが口をパクパクとさせながら自分の目を指差している
「あ…」
そう言えば…リュージュに瞳の事なんて相談してなかったね？あたしはにこっと笑みを浮かべるとL字型にした指先をくるっと回転させてみせ「ちぇ～んじ」と口パクで伝える
リュージュは安心したように俯きながら大きく息を吐き、大きく息を吸い込んで正面に顔を戻した時には皇帝の顔に戻っていた。
ちなみにラッシュさんは俯いているのでこのやり取りは見えていない。
「アサミズと朝食を取りにきたのだが…もう済んだようだな」
「申し訳ありません。…アサミズ様とは初顔合わせでしたので、授業前に少しでも意思疎通を測ろうと思いまして…」
いやいや…それがっつり表向きだけだったじゃん。呆れて物が言

えないあたしにリュージュが人差し指を口にあてる。はいはい…これ以上つっこまれない為にもここは黙っとけって事ですね…

「そうか…アサミズは私の大事な客だ。くれぐれも頼むぞ」
「はっ！心を込めて指導させて頂きます」

…心なんて込めなくていいです。普通に教えて貰えればいいんで…そんなに張り切られるとこっちが困る。

「ラッシュ顔を上げよ。…朝食には乗り損ねたようだから、私は朝食を後で食べるので授業開始まで茶には付合ってくれるな？アサミズ」

…朝食朝食って…根に持ってんの？
ほら…ラッシュさんの顔がちょっと蒼くなってるし…

そうしてご機嫌なリュージュと蒼い顔したラッシュ、そして気まずいあたしとの短い朝のお茶が始まったのだった。

63話　オタクに世界は関係ない（前書き）

3ヶ月目に突入しました。

毎日更新も読んでくださる読者様がいてくださるので維持できます

心より感謝いたします

63話　オタクに世界は関係ない

蒼い顔のラッシュさんと違う意味で蒼くなったあたしの気まずい状態で始まった魔術講義。だってもぅさっきまでのリュージュのお茶会が…びっくりで…内容は思い出したくもないんで…簡単に要約すると…

『うちのアサミズは出来る子だから、落ちたらお前の教え方だからな』

なんて宣言をしてくれちゃって…でもね、リュージュ。それはあたしに対しても

『落ちたらラッシュがどうなるかわかってんだろうな？死ぬ気でやれよ』

とも解釈できるわけで…。お互いよくわからない崖っぷちに立たされた状態でどうやって和やかに授業を始められるんでしょうね～

リュージュが出て行った途端にお互いテーブルに突っ伏したのは言うまでもなく、リュージュが部屋を出て行ったのだって扉の外に待機していた宰相の我慢が限界を越えただけで、無理やり拉致られなかったら授業が始まるまでどころか昼ごろまであたし達は解放して貰えそうになかった。

原因が居なくなった事によってちょっとだけ気分を浮上出来て、お茶を口にしようとすればすでに冷え切っているのがわかり飲もうか悩んでいると、向かいのラッシュさんもカップを手にして一緒の行動を取っていた。ちょっとやつれた感じでカップを回す姿に自分

を重ねてしまい

「「あ…」」

そんな状況にお互い視線を合わせると、どちらからとも無く吹き出した。ひとしきり笑うとどちらからとも無く言葉がでる

「お茶淹れなおしましょうか」

「そうですね」

すでに授業開始の時間になっていて侍女さんや侍従さんが部屋には近寄らない事はわかっていたので、お茶を入れるために席を立つ。同じタイミングで二人とも立ち上がろうとしたのを、あたしの方がポットが近かったので「あたしやりますから」と言って止めた

お茶が湯気を立ててカップに注がれる。立ち上る香りに心を休めるが、勉強をするタイミングではコーヒーが欲しいなぁと思ってしまうのは元の世界の名残。内勤作業の時はいっつも傍らにコーヒーだったし…コーヒージャンキーだったから…あたし。

「アサミズ様？」

「うわっちゃ！！」

そんなことを考えてるとぼぉっとしてしまっていたのか、声をかけられたのにびっくりしてしまい、持っていたポットを落としそうになる。慌てて手に力を込めると昨日の腱鞘炎がズキンと痛み、ポットを手から落としてしまう。

ガシャンと大きな音を立てて落としたポットは割れ、中から溢れた薄く茶色の液体は綺麗な刺繍の施されたワゴンのクロスに見る見る広がり染めてしまった。

呆然となったあたしにすぐ横からラッシュが話しかけてくる

「火傷されませんでしたか？」

「あ…はい、それは大丈夫です。でもどうしよう…」

魔法を使えばすぐに直せそうな気がするが、ラッシュが居てはそれも出来ない。

「あたし…ちょっと謝ってきます」

悪いことをしてしまった時にはすぐに謝罪！そうすれば相手の怒りも多少なり収まるし…でもこんな高そうな物を弁償とか…うぅ、手元にお金、いくら残ってたっけ？

あたしがとぼとぼと部屋の外に向おうとするのをラッシュが二の腕部分を掴んで引き止めてきた

「アサミズ様。大丈夫ですよ」

そういうとラッシュは手を砕けたポットに向ける。そして何か口で詠唱するとポットが元の形に戻った。

「おぉ！」

「私は地属性ですので、物の修理は得意なんです」

パチパチと拍手喝采を送るあたしにラッシュはそう言うと、あたしの頭をポンポンと軽く叩いた。そしてそのまま今度は汚れたクロスに手をかざして、同じように詠唱する。するとクロスに染みたお茶がどんどん蒸発していく。

「お？」

今ラッシュさん地の属性って言ってたよね?目の前で使われているのはどうみても火の属性の魔法で…あれ?属性魔法以外を使用するには魔法陣が必要なんじゃなかったっけ?受験勉強の最中に何かの本で読んだ気がするんだけど…

クロスが元の白さを取り戻すとラッシュさんがこちらに向いた。混乱したあたしの様子から「あぁ…」と何かを察したのか隠れた前髪を手で掻きあげた。

「あれ…オッドアイ…」

オッドアイ…遺伝子疾患の一種で虹彩異常を指す言葉、元の世界ならそうなんだろうけど…この世界では瞳の色は属性を指すものだから…前髪で隠れていた瞳はあたしの今の色と同じ、赤く染まっている。茶色と赤い瞳。

「オッドアイ?それはアサミズ様の国の言葉ですか?ご覧の通り私は二つの属性を身に宿しています。周りがうるさいので普段は便利な地属性という事にしてるんです。まぁこの力のお陰であなたの指導者という立場を得ることが出来ました」

「…それっていい事なんですか?」

あたしの指導者なんて子守、もしくは良くて家庭教師だろうに医療部の副長なんて立場の人がそれを買ってでるなんて…何か裏があるようにしか思えない。さっきもあたしの事何か疑ってたし…あたしの怪しい者を見る目を見てラッシュさんが苦笑する

「先程は失礼な事を言ってすみませんでした。ですが本当に純粋にあのゲートを作った方にお会いしたかったんです。あの魔法式は本当に素晴らしかった。余分な物が一切何も無く、式の配置・組み

方全てが美しかった…」

そう言ってうっとりと宙を見つめるラッシュさんの視線を辿って宙を見てみても、もちろんそこには何も無い。え～っと…ラッシュさんは魔法陣オタクか何かですか？

「はは…」

「ですのであのような美しい魔法陣を組まれる方が初心者だなんて信じられなかったんです」

心底申し訳なさそうな顔を向けられ、あたしは「気にしてません」と首と手を横に振った。うん…色んな意味で魔術講座にぴったりな人な事も充分わかりました

「あのような魔法陣を他にも築いて頂けるなら…しかもそれを一番先に拝見出来るなんて…心を込めて指導させて頂きますよ」

うん…おかしな人だ。まだうっとりとした顔つきのラッシュさんはさっきリュージュに対して言っていたのと同じ言葉をあたしに向って言ったが、微妙にその言葉に艶がついてるのは…気付かなかった事にしよう。

63話　オタクに世界は関係ない（後書き）

すみませんまだ授業までたどり着きません…（汗）

６４話　火曜・魔術講義？（前書き）

ストーリー・文章評価が２０００ｐｔを越えました
嬉しいです。ありがとうございます

６４話　火曜・魔術講義？

お茶を入れ直した後の会話は先程とは全然違って和やかな物だった。一番ビックリしたのがラッシュさんが２５歳だった事…だって落ち着きすぎてるっていうか…どうみてもあたしより年上でしょう？

「っていうかタメ！」
「…タメ？」
「うん！あたしも２５歳！」

…激しく失礼だよ？その反応。顎が外れそうな勢いで開いてますから、今までの落ち着きは何処へ行った？。しかも何また蒼ざめてんのさ…

「あ、アサミズ様…」
「あ～同い年なんだし、敬語止めようよ。名前もヒヨリでいいし」

同じ年齢の人なんてこの世界に来て一人も会わなかったから素直に嬉しいかも、年下でも年上でもない同じ年…これってかなり貴重だ。

「…ひ、ヒヨリ様」
「ヒヨリでいいってば！あたしもラッシュって呼んでいい？」
「あ…はい。い、痛い…」

意味もなくとりあえずラッシュの背中をばしばしと叩く。いやぁ…何かテンションあがる！何だろうこの高揚感。しいていうなら高校入学したばっかりで「君何中？僕二中」「僕も二中！」「まじで

っ！」みたいに盛り上がりたい感じ。

「じゃあ授業始めちゃう？」

「はい……」

…うん、まぁ…あたしとラッシュの間にはテンションの温度差がかなりあるみたいだけど…。ただ、やっぱり副長の地位は伊達じゃないっていうか、偉い人だなぁって授業が始まると実感した。

＊＊＊

講座授業といえど、それなりのスペースが必要だと言われたのであたしのバリケード部屋は論外だった。

「…とりあえず、学習部屋を作りましょうか」

そういうとラッシュはソファや動かしたい家具に魔法陣が描かれた紙をどんどん貼付け、一通り全部貼り終えたら一気に魔法を発動させた。すると魔法陣を貼られた家具が少し宙に浮いた状態になる

「これで家具の重さが軽くなりました。ちなみにこれは地属性魔法で、物体の重さを軽くします」

「へぇ〜便利だね」

ラッシュが家具に貼った魔法陣を一つ見て解析してみると、どうやら物を空中に浮かすというよりは重力を調整している魔法らしい。こんな魔法もあるんだねぇと軽くソファを押してみると宇宙空間のように押された方向にふわふわと移動する。

「コレ面白い」

そこらに浮かんでる家具を突いて遊ぶ。家具同士がぶつかってビリヤードみたいに弾けるのを見て笑ってたら「遊ぶな」とラッシュに叩かれた。う～ん叩かれておいてなんだけど…まだまだ遠慮が見えるなぁ…「すみません」って謝られたし、友達になる道は遠い。宰相なんてばしばしあたしを叩いてきたんだし、もっとカモン！いや…決してM属性じゃないんですけどね…。

取りあえずスペース確保の為に応接室のソファやらを片隅に撤去して24帖ぐらいの広い空間を作り、そこに大きな黒板のような物を持ち込むと簡単な教室みたいになる。…こういう空間をわざわざ作るとどうして昨日は宰相とバリケード部屋で勉強したんだろ？とか考えちゃうよね…。

「凄いなぁ～あっという間に出来ちゃった」

あたしがそう呟いたのと同時にラッシュが家具の魔法を解除したらしく、ドンっという音が部屋に響く。

「さて、予定よりはかなり遅れましたが始めましょうか。ヒヨリ様、執務机の方へどうぞ座って下さい」

色々な意味ですみません。そのやつれの賠償は一番の原因であるリュージュに後で請求して下さい。あたしが言われた通りに執務机の椅子に座ったのを見届けるとラッシュは持ってきた黒板に何かを書き出した

そこには『天』『火』『地』『水』という4文字を時計でいうと天を12時に火を3時、地を6時、水を9時という場所で描かれていた。そしてそれを書き終わるとラッシュはあたしの方向へ向き直る

「この世界は四つの魔属性で形成されています。対象位置にある

物は反属性となっており相性が悪いです。各属性に補佐属性として無数の属性が存在していると言われており、現実に今でも新しい属性の発見などもあります。ただどんなに新たな属性が発見されても全て４大属性のいずれかに所属しています」

まぁ…これぐらいは自分で勉強出来ましたよ。天なんて元の世界では無敵っぽいのにこの世界では補佐属性に『雷』や『風』が付いてる事から推測して、どちらかというと大気や空中を表すような感じらしい。逆にもの凄く天っぽい『光』は火の補佐属性で他には『炎』などが『火』の補佐属性にはあるらしい。

「ヒヨリ様の瞳が赤いように、人の魔属性の判定は瞳で行います。私のような者も極稀にいますが、一人一属性が基本です。単一属性では出来る事が限られてしまうので、自分の属性の横に書かれた属性の力を借りて、新たな出来る事が生まれます。例えば地属性の私が『火』や『水』の属性力を借りると『錬成』が出来るようになります。『天』の属性力を『水』や『火』が借りると雨などの自然現象が起こります。ここまでは理解していただけましたか？」

この辺は別にどの本にも載ってた事だし、ばっちり理解してますよ。あたしがオッケーの形を指で取るのを見て、ラッシュは頷きまた黒板に向かって何かを書き出した

「…召還術と召喚術？何が違うの？」

「術者が聖獣や精霊の力を魔力化して使うのが召還術。個体を魔力化する事なくそのまま使役する事を召喚術と言います。聖獣や精霊は魔力が増幅して出来た個体ですので、どちらにも対応出来ますが、召喚術はその他にも使役契約を結んだ者を呼び出す事が出来ます。ただし使役契約を結べるのは魔力が一定以上有るものだけですので、見た事ありませんけど…膨大な魔力を持った人や竜族、海人

などが可能と言われています」

…膨大な魔力を持った人って…もしかしてあたしも含まれちゃう感じ？あたしって実は召喚されちゃう側の人間？

「あの…質問いいですか？」

「何です？」

「例えば…あたしが竜族を使役しようと思ったらどうすればいいんですか？」

…もしかしたらあたしがこの世界に来たのって何者かが行った召喚魔法に引っかかった可能性が高くない？ならそこに元の世界に帰るヒントもあるかもしれない！

「初心者が出来るはずもないですが…そうですね。書物などでは竜族や海人は直接会いに行って合意の上、使役契約を結ぶのが正しいやり方と載っています」

うん？…そんな契約、元の世界で結んだ覚えないけど…？という事は召喚術はやっぱり違うのかな？折角異世界トリップの謎にちょっと近づけたと思ったのに…残念。

だけど続くラッシュの言葉にあたしは釘付けになった。

６４話　火曜・魔術講義？（後書き）

後半はラッシュによる魔法説明文がだらだら続いて済みません。
重要な設定部分なので次回もこんな感じかもしれません。

６５話　火曜・魔術講義？（前書き）

すみません。ちょっと他でトラブルがあって短いです

65話　火曜・魔術講義？

ラッシュによって囁くように呟かれたその言葉をあたしはずっと求めていた。

「禁戎の法であれば…」

「禁戎？…それって…」

禁って言われるぐらいだし、異法って事よね…。異法って言われると想像してしまうのは自分の存在であって…それって…

「…黒の加護や白の加護の事を指すんじゃないの？」

「ヒヨリ様は黒白（こくはく）の加護をご存知なのですか？」

「え？」

しまった…あたしは魔法に無知な留学生だった

「そういうのが存在する事だけ…陛下に教えて頂きました」

嘘ではない…はず。だって黒の支柱に会わせてくれたのだってリュージュだし…。ちょっと無理やりではあるけど自分を納得させる

「そうですか…。しかし禁戎の法も黒白の加護も学院入試には関係の無い事です。それでなくても覚えなくてはいけない事が山のようにあるので、今は目の前の勉強に集中して下さい」

えぇ～！！！せっかく情報が得れそうだったのに！！あたし的には受験勉強よりその件のが重要なんですっ！？何てあたしが思って

ても、目の前のラッシュはこの話の続きをする気は毛頭なさそうで、次の魔力の説明を黒板に書き連ねてる。

あたしはモヤモヤした物を胸に抱えながらも、不確かな情報に無理をすると身の破滅だと思ってとりあえず勉強の為に用意されていた紙の端に『禁戎術』と走り書きする。もちろん手が空けば自分で調べる為のメモで、ラッシュに見られないようにする事と後からすぐわかるように端を折り曲げた。

「それでは、次は魔力の説明です。魔力に純度があるのはご存知ですか？純度が高ければ同じ魔法を発動しても全然威力が変わってきます。魔力の純度が高ければ高い程、魔法力は上がるというわけです」

「純度？」

…そのアルコール度数みたいなのは何なんでしょうね？…後から金なんかも純度あったなぁなんて考えて、一番最初にアルコールってあたし女としてどうなの？ってちょっと凹んだ

「はい。魔力というのは生体エネルギーの突然変異ですが、その中でもやはり属性魔力をずっと高めた家系と一代限りの属性魔力でしたら属性の魔力純度が全然違います」

「血筋って事？」

「はい、血統です。国の上位貴族達は大体これに当てはまりますね」

血統って聞くと、つい純血種！と売り出されてる動物を想像してしまうけど…意外とミックスの方が遺伝子的には強かったりするのにと考えてしまう。

「ヒヨリ様の火属性の純度を調べてみますか？」

「え?そんなの出来るの?」
「えぇ。本来はチェッカーではないですが」
と言ってラッシュが部屋の隅から持ってきたのは、小さなガラスの中で火が燃え続けている一見するとランプのような物だった
「これは?」
「これは火灯篭といいまして、世界の標準と呼ばれる属性魔術師が各属性の力をガラスに込めた物です。この力を基準として同じ魔法陣でどのくらいの魔法を出せるかで純度を測る事が出来ます」
う~ん、どうやってその世界標準が決められたのか…なんて突っ込みたいところは山のようにあるけど、それよりもまた訪れたピンチに頭が痛くなる
だってあたしの魔力って人外だし、普通にやってしまうと騒ぎになるのが目に見えてるよね?ラッシュが火灯篭の底から魔法紙を取り出すのに苦労している間に、あたしは火灯篭をガン見する。
…これ以上大きくしちゃいけない。これ以上のサイズはまずい
念のように自分自身に唱え続ける。まるで呪いのようだけど、今一瞬だけ呪われて力が減ればいいのに…と本気で悩んだ

６５話　火曜・魔術講義？（後書き）

コハルはどうなった？という声がちらほらと聞こえてきましたが、
もう少し出るのは後になりそうです。

66話　火曜・魔術講義？

ようやくラッシュが差し出した紙に描かれた魔法陣はあたしの愛読書『はじめてのまほうのつかいかた』にも載っている様な簡単な魔法だった。うん、やばい。これぐらいの魔法なら属性関係なく全部詠唱どころか念だけで出来ちゃいます。

「あ…の、さすがにこれぐらいだったら…詠唱で出来るけど…」

「もちろん火属性魔法の初歩ですから、火属性の者であれば詠唱で出来て当然なんですが…これはチェッカーですので公正さが重要なんです。なのでこの付属の魔法陣で発動して頂きます」

おいおい…まだ念とか詠唱だったら何とか誤魔化せたのに、魔法陣とかで固定されちゃったら魔力を誤魔化せそうにないんですけどっ！！

「はは…」

とりあえず顔を引きつらせながら紙を受け取ってしまった。魔法陣の解析をしてみてもチェッカーらしく、余計な部分が無いきっちりと組まれている物で、属性魔法を惜しみなく使う魔法陣になっていてラッシュの目を避けて細工なんて事出来そうにない。あたしが冷や汗を背中に流してるとラッシュが部屋の中央に別の魔法陣を描く

「…何その魔法陣？チェッカーに関係あるの？」

「いえ、魔法使用は事前に申請したんですが、何かあったら困りますので一応部屋全体にシールドを張らせて頂きます」

いやいやこんな初級魔法でシールドとかありえないし。うん？…もしかして私の存在気付いちゃってます？

「さぁ、いつでもどうぞ」

「……」

うぇー。やりたくないよぉ…今更止めますとか無理なんだろうなぁ…あたしは手の中の紙の端を弄りながらちらっとラッシュを見てみた。まっすぐにあたしを見つめて逃げる隙なんてありゃしない。

…こうなりゃ覚悟を決めましょう。どうか、ラッシュのシールドの範囲で収まりますように…あたしは一度大きく深呼吸をしてから紙を右手の手の平に載せた。すると魔法陣が発動し赤く光を放ちだす。手に熱が伝わるのを感じると『出来る限り最小で！！』と何度も念じる。効くかどうかわかんないけどね…

「綺麗な色ですね…」

うっとり魔法陣の色に見とれてる場合じゃないから…もしかしたら部屋吹っ飛んじゃうかもしれないからっ！！魔法陣の真ん中に赤い光が集められるとそこに火が発生した。

ポッ

「……え？」

「……」

えっと…あたしの見間違い？どうみても小指サイズのちっちゃな炎が一瞬現れただけなんですけど…この魔法陣の紙、おかしいんじ

ゃないの？まぁ、求めてる事まんまだったんだけどさ…現実になると何だか複雑。いくら何でもこんなちっちゃい炎にしなくてもいいんじゃない？ほら、ラッシュだって言葉失っちゃってるし…

「ヒヨリ様…」

「わかってます！今度は本気でもう一度やり直します！！」

別に手を抜いたつもりはなかったんだけど、ちっちゃくなれと願ったのは事実なんで…今度はさっきよりちょっと大きくなれって念じた。光の発生も手の熱もさっきと同じで…やっぱり現れたのは『ポッ』で何度やっても同じだった。息の上がるあたしにラッシュが頭を抱えてる

「ヒヨリ様…本当に魔術学院の試験受けられるんですよね？」

「はい…」

言いたい事はわかります。あたしもそれでなくても受かる自信が無いのに更に崖下に急下降してますから。

…というか、あたしって人外とか言われてるけど、それって全くのデマだったって事？

「…あたし全然普通の人間なんですかね？」

「……この状態だと、魔法使いとしては普通以下です」

「なんだ…」

あたしは身体から一気に力が抜けるのを感じた。

「何だ…全然普通なのか」

悲しくなんて全然無い。だって会う人会う人に想像の範囲を超え

る人間とか言われて…自分が化け物みたいで実は軽く傷ついてた。
あたしの求めるのは平凡！ビバ平和！願いが叶った！！

「いよっっっしゃぁぁぁぁ！！！」

不出来を前にして雄叫びを上げるあたしにラッシュは心底呆れた視線をくれる。でもいいもんね！今のあたしを傷つける物は無い！！あたしの黒目はこの世界での純粋な黒の加護の黒目とはきっと別物なんだ。大した事ないじゃん、あたしの黒の加護！早くリュージュに知らせてあげないとね

こんな平凡人には魔術学院なんて受からなくて当然だし、元の世界に戻るのは働きながら研究しよう！いやー良かった良かった！頭の隅っこで「ほんとに普通なのか？」とテリサン村で作った性能の高い魔法道具や質のいいと言われた魔石の事を思い出すけど…無視です！無視！！

「あの…、一応授業続けましょうか？」

ラッシュがあたしとは真逆のがっかりした様子で話しかけてくる。うん、あたしが凄い魔法使いなの期待してたんだよね？ごめんね！裏切っちゃってっ！！授業自体が無意味にも思えたけど、さっきラッシュが言ってた禁戒の情報がどんなタイミングで得られるかわからないし、ラッシュとの繋がりはちゃんと確保しておいた方がいいと思う。

「宜しくお願いします」

受験勉強すっごく憂鬱だったけどいい事があってよかった！あー今晩からすっきり睡眠出来るわっ！！

ラッシュが続きの説明をしている間中あたしのニヤニヤ顔は止まらなかった

６６話　火曜・魔術講義？（後書き）

はい…ひより有頂天です。

67話　火曜　魔術講義？

この世界の魔法の常識なんて知らなかったあたしにとってラッシュから教わる事は新鮮で楽しかった。魔法の発動の仕方もあたしの独学とは全然違う物でそれによってあたしがどれだけ元の世界の力、つまり白の加護という物を使用していたのかもよくわかった。

簡単にいうとあたしが魔法を使う場合は魔法自体を化学式に置き換えて使用していたのだけど、この世界の人は体内にある属性の力を感じてそれを体外に発する際に魔法式をゲートに見立て、それを通過させる事によってあらゆる魔法となるらしい

「身体の中に存在する火属性魔力をこれで感じて下さい」

そう言ってラッシュから渡されたのは一枚の魔法陣が描かれた紙で、どこかで見た事があると思ったら以前リュージュに貼られた魔力封じの魔法陣に似ていた

「これって魔封じの魔法陣？」

「いえ。陣は似ていますが別物です。先ほどのチェッカーである程度の結果が出れば必要ないと思ったんですが…あまりにも属性魔力が少ないので…もしかすると体内にある属性魔力を使いきれていないという可能性もゼロでは無いですから。…普通は小さな頃に子供に体内の属性魔力を自覚させる為に使う物なんですけどね。ちなみにこの魔法陣では火属性が感じる事が出来ます。では目を瞑り、体のどこでもいいので紙を貼って下さい」

あたしが目を瞑り額に紙を貼ると「なぜ額なんですか…」と横から呟きが聞こえたけど無視した。だって…札みたいな紙は元の世界

では額に貼るものと決まってるのよ！！
何て考えてたら額のその紙がふっと消え、そして指先を掠る程度の暖かな感覚を感じ取れた。それと同時に体の中に感じる違和感に思わず声が出た

「ん？」
「ありましたかっ！？」

目を開けた途端にラッシュの必死な顔が飛び込んできた。期待をすごくされてる目ですけど…結果を言いにくいです。

「あの……指先がほんのちょっと暖かかったです…」

あたしはその言葉を聞いてがくっと床に膝をついたラッシュの背中に手を置くと、ポンポンと慰めた。まぁ…原因に慰められてもちっとも慰めにはならないと思いますけどね。何とか立ち直ったラッシュが最後の希望を持って火系の魔法を中心に魔法講座は行われたんだけど…初級魔法が辛うじて発動する事が出来、中級魔法では発動出来ない物がほとんどであり、上級魔法なんてとんでもないという仮発動の結果。散々な結果にどんどん顔色が悪くなっていくラッシュが死んじゃうんじゃないかって後半あたしはハラハラしっぱなしだった

「…本当に陛下は貴方を一ヵ月後の試験に合格させるつもりなんでしょうか…」

ラッシュが目を手で覆いながら呟いた言葉はあたしに向けられたものでは無さそうだったので返事はしなかった。ショックの為か終了予定の時間よりだいぶ前に「とりあえず今日はここまでで…」と言って部屋にかけてあった全ての魔法を解除すると、ラッシュはフ

ラフラと帰っていった。そんな彼にあたしは出て行った扉に向けて出来の悪い生徒でごめんなさいと手を合わせて謝る。

さっきまでは『普通な自分』の余りの嬉しさに何も考えず喜んじゃったけど、冷静な自分がよくよく考えると「そんなわけないだろ」って事がテリサン村の事以外にもいっぱいあるのよね…。さっき体内魔力を調べた時に感じた違和感もその一つで、そんなの無視しちゃえばいいんだけどさ…どうも自分の性格上、物事ははっきり白黒つけないと気がすまないっていうか、立証あっての喜びだと思うのよね…さっきの体内魔法を調べる魔法陣が各属性分あれば簡単なんだけど…

あたしは部屋の中に向き直ると、先ほどラッシュが解除したシールドの魔法陣が今後の授業でも使うからと残されている事を確認して、その側まで近寄った。

…どうかあたしの考えが間違ってますように！

一つの空論があたしの中に存在している。それは今までの喜びが全部吹っ飛んでしまうもので…というか、よりどん底に落としそうな空論なので出来れば思い違いであって欲しいけど…あたしのこういう空論は昔からよく当たってしまう。

それの実証にはラッシュが残した魔法陣を使うのが一番手っ取り早い。

あたしは魔法陣の横に膝を立てて屈むと魔法陣に触れた。すると魔法陣が茶色の光を放ち、ラッシュより遥かに強固なシールドが部屋に展開される

「……やっぱりぃぃぃぃ」

純度が大事なんですよと言ったラッシュの言葉が頭に繰り返され

る。魔法式を展開してみるともちろんこれは地属性のシールド魔法。

「…つまりあたしの純度はラッシュより高いって事だよねぇ」

立証するにはあと2つ実験しなくちゃならないわけで…あたしは部屋のシールドが完璧に形成されてるのを確認してから「初級魔法は属性関係なく魔力の使い方は同じです」というラッシュの言葉に従って「はじめてのまほうのつかいかた」の水の初級魔法を習った発動の仕方で行ってみる

「我が力よ、水の流れとなって姿を現せ」

体の前に広げた手から言葉と同時に立ち上る水はまるで逆さの滝のように天井に向かう。すぐに手を握り魔法を解除したけれど、その結果、滝のような水は部屋に張られたシールドによって跳ね返り全てあたしの頭上に降り注ぐ。少し考えれば解りそうな物なのに…自分のお間抜けさには呆れを通り越して心配です。

「きゃぁぁ！！」

びしょ濡れとかのレベルじゃ無いです…ほんとに一瞬息が出来なかったし、シールド張らなかったらあたし水圧で死んでた気がする。何も水気が無い部屋で溺れ死ぬとか水による圧死とか可笑しすぎる変死体にならなくてよかった。何て安心してるのは逃避であって、もちろんそんな水が足元ちゃぷちゃぷ程度で終わるわけなく、余裕で床から2Mぐらいの高さになりました。天井が高かった事が救いですけど…今のあたしは浮かんだソファにしがみついてる状態で、いわゆる漂流者です。打開策を考えてもシールドを解くと、この水が一気に城内に流れ込んで5階から水が襲うなんて状況になりかねないし、白の加護を使って水を変換させようにもこれだけの水を大

気に変換させたら水素と酸素が爆発的に増加してしまうので…それはそれで危険…氷なんかにすると水に浸かった状況のあたし自身がやばい。なにより溺れそうな状況に陥ってパニックなんで落ち着いて化学とか考えられません。火属性の魔法で蒸発させようにも…指先ポッです。

…この水どうすればいいんでしょう？

あたしは部屋の中をぐるぐる漂流しながら「誰か助けて～」なんて心で叫ぶしかなかった。

67話　火曜　魔術講義？（後書き）

はい…おバカ日和再び光臨です
物語の紹介文を変えました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4120w/

至上最強迷子

2011年11月8日02時52分発行